平岡　用があつたら、何分頼むぞ。ときにお熊、首尾よく先刻衒り取つた百兩、早く金を渡してくれ。

お熊　なに、百兩の金を渡してくれ、途方もねえことを言ひなさるね、あの百兩はおれが金だ、命がけの仕事をして、濡手で粟のお前さんに、唯取られてつまるものかえ。

平岡　これお熊、汝やあ約束變替して、今となつて居なほるのか。

お熊　どうしたとえ。

平岡　元より無代は使はねえ、いくらか禮をする氣だが、丸々金を引上げて、この權内に渡さぬとは、いけつ太え婆アだな。

トきつとなる、お熊せゝら笑つて、

お熊　太え婆アは言はずとも初手から知れたこのお熊、小娘の折から身性が惡く、引詰島田髷の時分から男をこせえて逃げ歩き、そいつの爲めに長屋へ賣られ、切禿のお熊といつて、三田の三角市兵衛町、鐘ク下から堂前かけ人に知られた莫連者、枕屏風か兀げかゝり終にやあ色氣も鮫ケ橋、野玉持も借金とお八重で首が廻り兼ね、錢も取れなくなつたから、押借衒り夜働き、素人もいつか黒くなり二度まで墨の入つた私、惡事が割れゝば喰ひ込む危ねえひゞの入つた身體、明日をも知れねえ身の上だから、こんな仕事もするものゝ、衒つた金をお前さんに取られるやうな老耄はしねえ。年は老つても氣が若え、そい樂しみに使ふ金、おれを太えと思ふなら繩をかけて突出しなせえ。出るところへ出てしやべつたら扶持方棒に關はるだらう。よく考へて見なさるがいゝ。

トいろ〳〵しく言ふ、平岡呆れし思入にて、

平岡　えゝ忌々しい、その金も諸所方々で借り集め、やつとのことでまとめた百兩、それを呼に菊一文字のこの短刀を捲上げて、戀の遺恨の新助めに難儀をかけて腹癒せなし、又短刀を何處へか賣り、それでお元の年拔なし、手活にしようと思ひのほか、菊一文字を百兩でやつぱりおれが買つたも同然、こんなつまらぬことはない。これお熊。

お熊　何ぞ用かえ。

平岡　せめて半分返してくれぬか。（ト手を出すを拂ひのけ）、

お熊　未練なことを言ひなさんな。

平岡　いや、惡太い婆アだな。

ト平岡上手へ入る。時の鐘、凄き合方になり、

三次　おつかあ、うまく行つた分口を、

お熊　おゝ今遣るよ。（ト上手にて人音するのに思入）。

三次　早くいつぺい呑みてえので、すてきに咽がぐび〳〵すらあ。

お熊　ぐび附く咽なら、かうしてやるよ。

ト言ひながら三次の咽喉を締め、きつと見得。時の鐘忍び三重になり、上手より新助お元の手を取り出來る。お熊は三次の鼻へ手を當て窺ふ。お熊咽喉へ卷いた手拭を取るとひよろ〳〵として三次ばつたり倒れる、これにて兩人はびつくりなし、三人ちよつと探り合ひの立廻りあつて、新助、お元は花道へ行き、お熊手拭を振ふを木の頭、兩人は手を引合つて花道へ入り、お熊は胴卷の金を見てにつたり思入、この模樣よろしく、

ひやうし幕

二幕目

稲毛屋敷辻番の場

雪の下若菜屋の場

〔役名――稲葉幸藏、刀屋新助、辻番人與惣兵衛、同伴與之助、刀屋新兵衛、乳母おさと、番頭佐五八、家主佐次郎兵衛、山井賚仙。若菜屋の後家お高、藝者お元、杉田娘おみつ。〕

（稲毛屋敷塀外辻番の場）――本舞臺上手へ寄せて二間常足の辻番、本庄三尺の舗臺、二重の上下人見のある戸、正面鼠壁六尺棒かけあり、この脇に灯を點けたる辻行燈、下手一面忍び返し附の黑塀、よきところに用水桶、塀の後見越の松。總て滑川稲毛塀外辻番の態。辻番の中に與惣兵衛辻番の親仁にて楊枝を削りゐる、紺看板の中間○△の二人竹の皮包一升徳利を提げ立つてゐる、通り神樂にて幕明く。

○　どうだ與惣兵衛殿、この頃は痴氣はいゝかの。

與惣　おゝ大部屋の衆か、どうも此間の雪からして、腰が引釣つてならぬわいの。

△　さうだらうよ、若い者でせえ、いつぺいやらにやあ腰が延せねえ。

與惣　お前方もなる口だが、兎角樂しみは酒ばかり、勿體ないと知りながら五勺づゝも呑まねば寢られず、夜業をするも呑みたい故、いやも、口には孝行なことさ。

○　いや、孝行といへばお前の息子、まだ年は行かねえが、鹽噌の世話から何やかや、少しの間にも草履を作り、今時稀な與之助殿。

△　それ故御家中でも大評判、今に八代目のやうに御褒美が出るだらう。

與惣　いやも、我子を褒めるぢやござりませぬが、少い時から何一つほしがるものも買うてやらぬ親甲斐もないこの私を、それは〳〵孝行にしてくれまする。

○　それといふのも日頃からこなたの育てがいゝからだ。

△　さうして息子殿は、廻りにでも行つたのか。

與惣　いえ、作り溜めた草履草鞋を町へ賣りに行きましたが、もう今に歸りませう。

○　それぢやあ今夜は父さんも、あつたかにいつぺいやれるの。

與惣　はい、大方歸りに買つて來てくれませう。

△　いや、嘸こつちも大部屋で、買つて來るのを待つてゐよう。

○　早く行つて暖たまらう、それぢやあ父さん、大切にしなせえ。

與惣　はい、有難うござります。（ト兩人行きかけ）、

△　どうでもこいつあ雪だわえ。（ト空を見ながら兩人は上手へ入る）。

與惣　あゝ、雪とは厭な噂だなあ。

ト　やはり楊枝を削りゐる。花道よりおみつ屋敷娘の打扮にて出來る、後より身重と見える屋敷乳母のお
ふと醫者の山井養仙を引きづり來る。

山井　あこれ〳〵おふと、何ぼ夜でも往來中、人命を助ける醫者を捉へて見ともない、放してくりやれ。

ふと　えゝ年中人を殺してゐながら、人命を助けるも氣が強い、病の見えぬは知れてあれど、私の腹が
このやうに大きくなつたが見えぬかいな。

山井　そりや見えぬではないけれど、何もそれが愚老一人で大きくしたといふ譯でもなし、

みつ　何か樣子は知らねども養仙樣がお困りなさる、そのやうに言はずとも、まあ靜に言うたがよいわいの。

ふと　いえ〳〵靜に言うては分かりませぬ。これから宿へ連れて行て、白い黑いを分けねばならぬわいな。

山井　これは情ない目に遭ふものだ。

ふと　さあ、この腹を大きくしたかせぬか、暗黑の恥を明るみへ出して、洗ひ方をせにやならぬわいな。

山井　それを洗はれてたまるものか、養仙表札に關はる仕儀、どうぞ助けてくれ〳〵。

ト　この聲を聞き、與惣兵衛出來りて、

與惣　お辻先も憚らず、やかましく言ふは何者ぢや。

みつ　これ與惣兵衛、私ぢやわいの。

與惣　や、これは誰かと存じましたら、お組頭松田主膳樣のお孃樣、こりや何事でございます。

みつ　乳母が何やら腹を立つて、養仙樣と爭うて故、そなた留めてたもいの。

與惣　畏まりました。

トこの中山井逃げようとするをおふと引留め爭ひゐる、與惣兵衛中へ入り留めて、

これ〳〵お乳母どの、どういふ譯か知らないが、お辻先でどつぱさつぱ旦那樣のお耻になる。よあ下にゐて事情を言はつしやい。

ふと　いえ〳〵譯を言つてもわからぬ數醫者、引きずつて行かにやならぬわいな。

與惣　そりやもう養仙樣の分からぬのは、今始まつたことではない。

山井　これは御挨拶。

與惣　ちつと耳は遠いゝけれど、大概のことは分かる故、私に言つて聞かしやいの。

ト與惣兵衛無理に兩人を引放し下におく、おふと思入あつて、

ふと　事情をとつくり話すから、お前聞いて下さんせ。

山井　それを言はれてたまるものか、こりや逃げるのが專一だ。（ト逃げにかゝる）。

ふとうぬ、逃げるとて逃がさうか。

山井　逃げるが勝だ。

ふと　逃げるとて逃がさうか。

ト山井逸散に花道へ逃げて入る。おふと腹を抱へよち〳〵と追かけて入る。

與惣　いや、どこの國にか大切なお主樣を打捨つて、困りきつたお乳母どのだ。

みつ　ほんに、早う返ればよいが、

與惣　もしお乳母どのが返らずば、伜が今に歸りますから、送らして上げませう。

みつ　與之助に送らしてたもるとか（ト嬉しき思入）、どうぞ乳母が返りませず、與之助が早う歸りますやう（トちよつと神佛を拜む思入）。

與惣　もう今に廻りませう、むさくろしうはござりますが、こつちへお上りなされませ。

みつ　いえ〳〵こゝで往來を見てゐるのが、樂しみぢやわいな。

與惣　然し川風でお寒うござりませう。どれお茶でもこしらへませうか。

ト辻番の内へ入る。おみつ與之助の歸りを待つ心で柱にもたれ彼方を見てゐる。よきほどに與之助風呂敷包みを脊負ひ、三合穗利と鰯を紙にて提げて出來り、思入あつて、

與之　今日は思はぬ災難で命をば取らるゝところ、後家御樣のお情で無事に歸るも天のお助け、然し、父樣にこの事をお話し申さばお案じなさらう。惡いことは言はぬが孝行、よいことばかりをお話し申し、どれお悅ばせ申さうか。

ト此中おみつ與之助を見て嬉しき思入、髪を撫附けたり、帶を結んだりする。與之助が本舞臺へ來る とおみつ耻しき思入にて、

みつ　與之助、今戻りやつたかいの。

與之　これは松田様のお孃様、思ひがけない、今時分、何でこゝにおいでなされました。

みつ　そなたの歸りを待つてゐたわいの。

與之　へい、私が歸りますのを（ト合點の行かぬ思入）。

みつ　あいなあ。

與惣（奥より出來りて）おゝ伜、歸つたか、だいぶおそかつたな。

與之　今日はよいことがござりまして、それでおそうなりました。

與惣　よい事とは耳寄りな、あとでゆつくり聞きませう。

與之　もし父様、お頭のお孃様には何でこゝに、

與惣　さあ、こりやかういふ譯ぢや、お乳母どのがお連れ申してお孃様をこゝへおき、おのが勝手に何處へやら、それ故そなたが歸つたらお送り申させようと、言つてゐたとこぢやわいの。

與之　それでお待ちなされてゞござりましたか。嘸お待遠でござりましたらう、直にお送り申しませう。

みつ　いゝえ、直でなうてもだいじないわいの。

與之　でも、お家でお案じなされませう。

みつ　今日は琴のお師匠様の月並のお浚ひ故、家でも案じはせぬわいの。

與惣　左様ならもう少し、お乳母どのゝ返りをばこゝでお待ちなされませ、先へお歸りなされましたら、お乳母どのが濟みますまい。

みつ　ほんに、あれが濟まぬ故、どうぞこゝに置いてたもいの。

與之　然し、お家と違つて、むさい所に、

みつ　それが私や好ぢやわいの。

與之　何でお好きでござりませう。

與惣　いやゝ〳〵よい衆といふものは、却てこんなところがお好きなものぢや。

與之　いやお好きなものといへば、お前のお好きな鰯があつた故、鹽燒にして上げませうと、腰越から買うて參りました。（ト德利と鰯を見せる、與惣兵衛皿を出し、鰯を入れながら）、

與惣　何ぢや、これで一ぱい呑ます、いや有難いことぢやな、お孃様なぞのお家と違うて私共の身分では、鰯の鹽燒で三合とは、此上もないよい御馳走。何とお孃様、やさしい奴ぢやござりませぬか。

みつ　そのやさしい心故、私もとうから、

與惣　え、

みつ　褒めてゐたわいの。

與惣　むゝ、褒めてやつて下さりませ。これ與之助嬉しいぞよ〳〵。

（ト嬉しき思入、おみつは始終與之助に見惚れてゐる。）

與之　まだ、父様に悦ばすことがござりますぞえ。

與惣　まだ悦ばすことがある、何ぢや知らぬが早う聞きたい〳〵。

與之　いつも草履や草鞋をば買つて下さる、雪の下の若菜屋の後家御様が、寒明が寒い故、これを親父に着せたがよいと、このやうな布子をばお貰ひ申してまゐりました。（ト風呂敷より出して見せる）。

與惣　ヨウ、こりや裏表とも新らしいのぢや。おれが着るには勿體ない、丁度幸ひこの布子は、そなたの贋着にしたがよい。

與之　いえ〳〵、それでは先方様の思召が無になります、それ又私もこんな半纏をお貰ひ申しました。

（ト見せる、與惣兵衛は手に取り見て、）

與惣　こりや藍天鵞絨の紋附、えらいものをお貰ひ申したな。これといふのも日頃から親孝行なそなたの故、天道様からのお恵みぢや。あゝ有難い〳〵（ト二品をいたゞき）祝ひ酒に鹽焼で一ぱい御馳走にならうかい。

與之　それがよろしうござります、どれこしらへて上げませう（ト立ちかゝるを）、

與惣　あこれ、鰯ならおれがこしらへる、手をよごすには及ばぬわいの。

與之　でも、お冷たうござりますのに、

與惣　はて、こしらへる中が樂しみぢや。

與之　左様ならお心任せになされませ。

與惣　お嬢様、お話しなされませ。これ、拵へて一ぱいやらうか。

（ト酒と鰯を持ち奥へ入る、與之助間の悪き思入にて、）

與之　私も明日の仕事の仕度、藁でも打つておきませう（ト下手にある打臺と碪を持つて出る、おみつ積んである藁を持つて來る）、あゝお嬢様お止しなれませ、お召物が埃になります。

みつ　埃になつてもだいじないから、私にも手傳はせてたもいの。

與之　勿體ないことおつしやりませ、お頭のお嬢様に何で手傳ひが賴まれませう。

みつ　何故賴まれぬぞいなう。

與之　さあ、お賴み申されぬといふ譯は、旦那樣は足輕組をお預りのお頭樣、私共はお組下言はじ御家來も同じこと、御主樣も同然のあなた樣へ何が賴まれませう。

みつ　そりやもう組頭と組下とは格も違ふであらうけれど、もし組頭の娘などが組下の者の所へ緣があつて、嫁いても何も用はさせぬかいの。

與之　いえ〳〵、我女房に持ちますれば、假令お主樣でも夫の高下で、何でも用はさせまする。

みつ　そんならどうぞ私をば、そなたのなんにして、用をさせてたもいの。

與之　へい、そなたのなんにしてとは、何のことでござります。

みつ　それ、今言うた、なんのことぢやわいな。

與之　いや、何のことだかさつぱり分かりませぬ。

みつ　私やよう分かつてゐるわいな。

與之　あなたには分かつてをりませうが、私には分かつてをりませぬ。

みつ　何の分からぬことがあるものか、組頭の娘の私を、組下のそなたの（ト耻しき思入にて）、おかみさんにして用をさしてたもいの。（ト袖にて顏を隱す）。

與之　はゝゝゝ、五つか六つの子供ではあるまいし、大きな形をしておかみさんの御亭主のと、飯事ができますものか。

みつ　飯事ぢやない、あの、ほんまに、

與之　え、何とおつしやります。

みつ　ほんまにしてたもいの（ト耻して思入、與之助立ちかゝりて、）

與之　お孃樣、ずつとそつちへお寄りなされませ（ト おみつを上手へ押しやり）、小さい時から私は旦那樣に手習を敎へてお貰ひ申しました故、お前樣ともへだてなく、言はず寺子屋の友達同然、飯事もして遊びましたが、男女七歲よりしては席を同じうせずとやら、必ず側へお寄りなされまするな。

ト傍を向き褄を打つてゐる、おみつ思入あつて、

みつ　今も言やる寺友達、さう嫌はひでもよいではないかいな。

與之　嫌やいたしませぬけれど、ほんまの何のとおつしやる故、私は嫌ひでござります。

みつ　やつぱり私を嫌やるのぢや。聞けば御用人の娘御お花さんと情人ぢやといふこと、嫌やるのも、尤もぢやわいな。

與之　えゝめつさうもない、誰がそんなことを言ひました。

みつ　誰でもない、御家中で皆々が言うてゐるわいの。

與之　えゝそんな嫌らしいことを聞き度くもございませぬ（ト耳を塞ぐ）。

みつ　聞き度くなうても聞かさにやならぬわいの。

ト厭がる與之助の手を取らうとするを振拂ひて飛退き、

與之　男女七歳より席を同じうせず。

みつ　また、そんなことを言やるかいな。

與惣（奥より出來りて）、あゝいゝ心持に醉つた、一合五勺一人でやつたら、寒さをさつぱり忘れてしまうた。

與之　それはよろしうございました。

與惣　いや、このお乳母どのもお嬢樣を忘れたが、嘸お家で御兩親がお案じなされてゞあらう。これ、與之助、お送り申してくりやいの。

與之　畏まりました。

與惣　いや、そちは一日草臥れたであらう、おれがお送り申さうわいの。

與之　いえ〳〵お腰の痛いのに、私がお送り申します。

みつ　それ〳〵、與之助の方が、

與惣　あなたもよろしうございますか、そんなら太儀ながら行つて來てくりやれ。

與之　はい〳〵、さあお嬢樣お送り申しませう。

みつ　そんなら、太儀ながら。與惣兵衛大切にしや。

與惣　有難うございます。（トおみつ花道へ行かうとして躓く）、あゝ危ない、與之助お手を引いて上げ申しや。

みつ　おゝ與惣兵衛の許しぢや、手を引いてたもいの。

與之　そのやうなことが、

與惣　はて、だいじない、お怪我をさしてはならぬわいの。

與之　さあ、參りませう。

ト迷惑さうにおみつの手を引く、おみつ嬉しさうにいそ〳〵として花道へ入る、與惣兵衛見送りて、

與惣　あゝ、同じ年でも男と女とよつほど容子の違つたもの、形は大きうても與之助は感じぬやうだが、お嬢樣はよつほどお心のある樣子、譬にもいふ小袋と小娘、油斷のならぬことぢやなあ。（ト四つの鐘鳴る）。南無三、もう四つぢや、今五つを打つたと思うたに、夜はよつほど詰つたわい。どれ、一廻り廻つて來ようか。

ト弓張提灯をもち、六尺棒を突き、『火の用心、火の用心』と呼びながら下手へ入る。と上手より□

◎の駕舁、垂をおろせし四つ手駕籠を擔ぎ出來ると、以前の○△の中間二人その棒鼻を捉へがやゝ言ひながら出に出て來る。

○　これ、この廣い往來中を、なんで棒鼻をぶつつけやあがつたのだ。

○△　了簡ならねえゝ。

トこれにて駕籠をよきところにおろし、

□　もしゝ親方、ほんの出合頭でござります、

◎　どうぞ了簡して下さりませ。

○　いやだゝ、どこの駕籠だか知らねえが、屋敷者に突かけて、たゞ詫るといふがあるものか。

△　中の客が相手だ、引きずり出せゝ（ト駕籠へ立ちかゝるを留めて）、

□　これさ親方、お客の知つたことぢやあねえ。

◎　いつぺい買へなら買ひやすから、了簡して下さりませ。

△　いやだゝ、何でも中の客が相手だ。

兩人　引きずり出せゝ。

□　これさ、野暮を言つてくれちやあいけねえわね。（ト兩人を留めてゐる。◎は駕籠の側へ來り）、

◎　もし日那え、とんだ愚圖に出つくはして、面倒でござりますから、ちよつと一ぺい飲まして來ようす、ちよつとの間お待ちなすつて下さりませ。

○　さあ、中の客を出せ、出さねえけりやあ駕籠ぐるみ、十總部屋へ引きずつて行くぞ。

□　まあ、そんなことを言はねえで、いつぺいやるから一緒に來なせえ。

△　いやだゝ、振舞酒は呑みたかアねえ。

◎　まあ、いゝから來ねえといふに、

ト中間を引つぱつて下手へ入る。時の鐘、兩吟の唄淨瑠璃になり、花道より刀屋新助頬冠り腕組をして出來り、續いてお元手拭を吹流しに冠り、しほゝと出來り思入あつて、

新助　これお元、どう思案しなほしても、こりや死なねばならぬわい。

お元　どうか仕樣はござんせぬかいな。

新助　さあ、これが十か二十の金ならどうかしやうもあらうけれど、何をいふにも大枚百兩、今という て今その金を貸してくれる人もなし、かういふ譯で街られたと言うた所がこれまでの、身持の惡さに親始めよもや眞實とは思はれまい。今日も出がけに親父樣が、金受取つたら暮れぬ中に歸れとおつしやつたを、上の空に聞いて出たが、その罰故に今日の仕儀、御恩も送らず先立つは、不

孝なれどもいつそのこと、死んだ方が御苦勞休め、それ故金の言譯に死なうと覺悟極めたわい。

お元　それといふのも私から。藝者狂ひをなされずにお家にばかりござんしたら、かういふ譯で衒られしとおつしやつたならそれなりに、仕方もないと濟まうのに、その言譯も立たずして、死なねばならぬ仕儀になつたも、元はといへば私故、かうなる兆か母さんがお乳を上げた若旦那と言交しては義理が濟まぬ、思ひ切れとの意見も幾度、私が切れたことなればお身のお爲めになること故、思ひ切らうと思うても、切るに切られぬ互ひの惡緣、終にはかういふことになり、今更言うても返らぬこと、どうぞ堪忍して下さんせいな。

新助　そりやおれとても同じこと、どうせ女房に持たれぬそなた、いつそ切れたらその身の爲めと心は附けど思ひ切られず、よしないおれ故苦勞をかけたが、然しそれも今宵限り、思ひ切るの切られぬのといふのもほんの娑婆にゐる中、死んでしまへばもうそれまで、どうぞこれから爲めになるそなたも客に身を任し、これまで剛染んだ誼には、思ひ出す日があつたなら口へ出して言はずとも、心で回向してくりやれ。草葉の影で待つてゐるぞよ。

（ト新助愁ひの思入、お元も涙を拭ひて、）

お元　爲になる客があるなら身を任せろと、親切に末を思うて下さんすお志しは嬉しいが、お前に別れて一日でもどうまあ生きてゐられませう。私も一緒に死ぬ覺悟、どうぞ殺して下さんせいな。

新助　その義理立は惡い了簡、おれは百兩失ひし身の言譯に死ぬ身體、それに引かされともぐ〜におぬしが死なばお袋や年端も行かぬ弟が、おれを恨むは知れたこと、どうして一緒に殺されう。

お元　一緒に死んで惡いことなら、私は後から死ぬほどに、冥土とやらで私の行くのを、待合はしてる

新助　そんなら、どうでも、死ぬといふのか。

お元　お前の死ぬのを他所に見て、どうまあ生きてゐられうぞいの。

新助　それほどまでに思うてくれるのか。これお元。

お元　新助さん。（ト兩人手を取交し）、

新助　あゝこれがこの世の顏の見をさめ、

お元　とつくり見せて下さんせいな。（ト兩人顏を見合せ、愁ひの思入）。

新助　そなたも死ぬと覺悟したなら、どうで昨日から人の噂、心中者と言はゞ言へ、かうなるからは一緒に死なう。

お元　そんなら私もとも〳〵に、えゝ嬉しうござんすわいな。

新助　とは言へ、又物も持合さず（ト前なる川へ思入あつて）、幸ひ今が上潮時、月の出ぬ間に川の深みへ、

お元　人の目つまにかゝらぬ中、

新助　石を拾つて袂へ入れ、

お元　互ひに裾をくゝりあひ、

新助　彌陀の御國へ、

お元　少しも早う、

兩人　さうぢや〳〵。

ト兩人邊りの石を拾ふ、此の時正面の駕籠より稲葉幸藏（鼠小僧）着流し唐桟の半纏にて出で、兩人を窮ひゐる、兩人はこれを知らず、よろしくあつて、

新助　覺悟はよいか。

お元　あい（ト兩人手を取り）

兩人　南無阿彌陀佛、

ト飛びこまうとする、幸藏つか〳〵と出て兩人を留め、

幸藏　二人とも、まあ待つた。

新助　どなたかは存じませぬが、死なねばならぬ二人が身の上、

お元　どうぞ見逃して、

兩人　下さりませいな。

幸藏　いゝや見逃すことはならぬ。樣子はあらまし後で聞いた、外のことなら留はしねえが、金故命を捨てるなら死ぬには及ばぬ、待ちなせえ。

兩人　それぢやというて、

幸藏　はて、待てといつたら待ちなせえ。

ト兩人をぐつと引すえる。これにて兩人思入あつて、

新助　何れのお力か存じませぬが、御親切に有難うござります、お尋ねの上からは何をお隱し申しませう。百兩といふ金がなければどうも生きてゐられぬ身體、

お元　お慈悲にはこのまゝに、どうぞ見逃して、

兩人　下さりませ。

ト幸藏あたりの捨石に腰をかけ、思入あつて、

幸藏　かう見たところが二人とも、水の出花の若い同志、後や前の考へなく一圖に迫つて、言譯に死な

うといふは悲い了簡、聞けば互ひに親もあり又兄弟もある樣子、死んで言譯が立つにもせよ、後に殘つた親達が世間へ耻をかいた上、これまで育つた甲斐もなく賴りに思ふ子に別れ、その悲しみはどの位、先立つ不幸を惜むとも、非業な死をば不便に思ひ、朝夕箸の上下しに目の前にちらついて、寢ても寢られることぢやあねえ、その悲しみを思ひやり、必ず死なうと思はつしやるな。見ず知らずのお前達だが、金故命を捨てると聞いては、見逃すことのならねえのも、天より助ける二人の命、衒り取られたその金は、私がこなたに進ぜるから、死なうといふのは止めにしなせえ。

新助　すりや、見ず知らずの私どもへ、

お元　アノ、大枚のお金をば、

幸藏　さあ、陰德あれば陽報ありと、人の命を助けたなら此の身に惡くは報ふまい、命代りの百兩は私が二人に進ぜよう。

兩人　えゝ有難うござりまする。

幸藏　然し、こゝに金を持つてゐねえから、私が金を持つて來るまで、暫くこゝに待つてゐねえ。

兩人　畏まりましてござります。

幸藏　必ず外へ行きなさんなよ。

ト後の屋敷へ目を附け、思入あつて上手へ入る。兩人は嬉しき思入にて、

新助　金のできぬに一圖に迫り、二人一緒にこの川へ身を投げようと思うたも、

お元　思ひがけない今のお力に、危ふい命を助けられ、

新助　衒り取られしその金まで下されんとは產神の、神の助けであつたるか。

お元　死にたう思うた死神が、

新助　放れて見れば二人とも、

お元　危ふい事で、

兩人　あつたなア。（ト嬉しき思入あつて、お元癪のさし込む動作）。

お元　あいたゝゝゝゝ。

新助　これお元、どうぞしたのか。

お元　折惡い持病の癪が（ト胸先を押へ苦しむ）。

新助　おゝ尤もだ〳〵、死なうと思ふ心がゆるみ、それで癪が起つたのだ、どれ〳〵おれが押してやらう。

ト新助介抱する。と與惣兵衛下手より出來りて、

與惣　火の用心々々。（ト兩人を見て）これ〳〵こなた衆は何をしてゐるのだ、往來の者なら通らつしやいい〳〵。

新助　へい、おつしやる通り往來の者でござりますが、同伴の女が癪が起り歩くことができませぬ。暫くこれにお置きなされて下さりませ。

與惣　（提灯で兩人を見て）。はあ、病人でござるか、それは嘸困らしやらう。式臺へ連れて來て介抱さつしやい。

新助　それば有難うござります、お言葉に甘へまして暫く拜借いたしまする。さあお元、あそこへ來やれ。

お元　あい〳〵。（ト お元を連れ式臺の上へ來る、與惣兵衛も上へ上り）、

與惣　まだ雪があるかして、私なども病氣がおこり膝が釣つて困ります、もし藥でも服まつしやるなら、湯がぬるんでゐるから進ぜませう。

新助　有難うござりますが、生憎藥を持合せませぬ。

與惣　それは困らつしやらう、ゆつくりと休んで行かつしやい。

ト家臺へ上り戸を閉める、新助介抱しながら、

新助　どうだ、少しはいゝか。

お元　どうもまだをさまらぬわいな。

新助　もうちつとだ、辛抱しろ〳〵。

ト お元の胸先を押へ介抱する、この見得、時の鐘にて道具廻る。

（稻毛屋敷玄關の場）――本舞臺三間の間式臺附の玄關、左右黑塗り間平棧のある杉戸、正面は塗骨障子、その後方は大形の襖、上の方塀、下の方雨戸の閉れる家體、上下黑塀にて見切り、總て稻毛屋敷玄關先の態。玄關に鐵行燈をおき、こゝに稻毛の臣杉田主膳老けたる打扮にて、稻毛の臣源吾と掛磐の火鉢にあたり、茶道珍才控へてゐる。

源吾　主膳樣、よほど夜はつまりましてござりますな。

主膳　されば、日の長くなつたのはさのみ眠にたゝぬが、夜は大きに短うなつた。

珍才　その故かこの頃は眠くつてなりませぬ。

源吾　夜が短くなつて眠いとはどうでござる。

珍才　はて、夜が短くなれば眠る間が短くなりまする。

源吾　そりや私宅にあらば兎も角も、斯くお夜詰をするには夜の短くなる方が眠くござらぬ。

珍才　そりやお手前樣なぞは起きてござるからさうでござらうが、この珍才などは宵つから居眠つてをりますから、夜が短くなると寢が足らぬから、眠うござります。

主膳　株で珍才が不理窟か、寢ると申すお夜詰がどこにあるものだ、以來きつと慎んだがよい。

珍才　へい、どう慎んでも眠くなりまする。

主膳　それが心の油斷からぢや。殊にこの節動騷にて、稻葉幸藏といふ盜賊が大小名へ忍び入り、金銀を奪ふ由寸の間も油斷がならぬ、必ず寢ることはならぬぞ。

珍才　畏まりました。

源吾　いや、安心ならぬことぢや。

珍才　もし私が眠りましたら、如何やうとも御存分になされませ。

源吾　面白い〳〵、居眠りをするが最後、頭をぴつしやりとやりますぞ。

珍才　よろしうござる、寢たことならお打ちなされませ。

主膳　いやさう定まつたらよもや寢ることでもあるまい。最早九つに間もあるまい、部屋々々を見廻つてまゐらう。

源吾　畏まりましてござりまする。（ト源吾先に立ち手雪洞を灯す、主膳立上りて）、

主膳　こりや珍才、必ず寢ることはならぬぞ。

珍才　心得てござりまする。

主膳　源吾殿、さあ參らう。

ト時の鐘にて兩人下の方へ入る。珍才後を見てそのまゝ横になり、

珍才　頭ぐらゐ張られても、寢る間が極樂だ。どれ鬼のゐない中にとろ〳〵とやらうか。

ト玄關の障子を閉める。凄き合方になり、下手より幸藏紺の手拭にて頰冠りをし、半纏を裏返し黑八丈の半纏となし、紺の股引尻端折りにて出來り、障子をそつと明け、上手杉戸の錠前を見て思入、この足音に珍才寢てゐながら、

そこへござつたのは源吾殿か、まことに眠くつてならぬから、約束の通り頭を張つてちつとの中寢かして下され。後生になる〳〵。

ト寢ぼけた聲で言ふ、幸藏思入あつて珍才の頭を打つ、

あゝ、これで寢心がいゝ、ムニヤ〳〵。

ト珍才鼾をかき寢入りし思入。幸藏奥の間へ行き思入あつて杉戸の桟を足掛りに上り、欄間の障子を

明けて内へ忍び込む。こゝへ源吾出來り珍才を見て、

源吾　もう珍才め寢てしまつた、大方こんなことだらうと思つた。どれ頭をくらはしてやらうか。それ、約束だぞ（ト珍才の頭を打つ、珍才起上り）、

珍才　あいたゝゝゝゝ。これ源吾殿、何で頭を打たつしやるのだ。

源吾　約束だから打つたのだ。

珍才　さう幾度も打たれて合ふものか。

源吾　なに、幾度も打つものか。

珍才　たつた今打つたぢやあないか。

源吾　そりやあこなたが寢ぼけたのだ。

珍才　それぢやあ夢かしらぬ、はて、夢にしちやあ痛かつた。

源吾　何をたはけたことを、

珍才　どうぞ後生だから主膳樣のおいでまで、とろ〳〵とやらして下さりませ。

源吾　えゝさうも眠いものか、一つ打つたから許してやらう。

珍才　それは忝ない。どれ御馳走にならうか（ト横になる）。

源吾　いや、呆れたものだ。

ト下手へ入る。と上手欄間より幸藏蒔繪の手箱を抱へ出來り、杉戸より飛下り四邊へ思入あつて、箱の中より百兩包みを出し懷ろへ入れ、箱をそこへおき頷いて下手へ行かうとする。下手より主膳出で來るに幸藏びつくりして、玄關の腰羽目を足代に梁へ上り隱れゐる。主膳四邊を見て、

主膳　この源吾は何れへ行きしか、扨々若い者といふものは世話の燒けたことぢや。（ト上手欄間へ思入あつて）はて心得ぬ、欄間の障子の明いてあるわ、むう。このほど世上に噂ある稻葉といへる盜賊は、天井欄間なんどより忍び入るとの風説、もしや御殿へ（ト四邊へ思入。珍才寢ぼけし動作にて）、

珍才　後生だから、もうちつと寢かして下され。（ト言ひながら足を延ばし行燈をひつくり返す）。

主膳　え、粗相千萬な。源吾殿灯を早く〳〵。

ト暗黑の思入、幸藏梁より下りてうまいと思入あつて、窺ひながら下手へ行く。この時源吾雪洞を持ち、つか〳〵と出來る。是にてびつくりなし板羽目へぴつたりと附く、源吾心附かず本舞臺へ來る。

源吾　主膳樣、何事でござりまする。

主膳　源吾殿、欄間を見られよ。

源吾　どれ（ト雪洞を上げ上手を見る。この間に幸藏頷いて下手へ入る。兩人はこれを知らず）。どうして障子が、

主膳　もしや、御殿へ盗賊が、

源吾　え、（トおどろき手箱を見附け）、やゝ、この手箱は、

主膳　こりやお納戸金を入れ置くお手箱、これがこゝにあるからは、まさしく御殿へ盗賊が忍び入りしに疑ひなし。

源吾　さうだ（ト行きかけるを）、

主膳　あいや、源吾殿何れへござる。

源吾　盗賊の後追ひかけ、

主膳　いや、かほどの働きなすものが、うかゝなしてこゝらにをらうや、

源吾　それぢやというて、

主膳　はて、待てと申さば先づ〳〵待たれよ。

源吾　これといふのも珍才が、居眠りをなせし故、

ト源吾珍才の頭をくらはす、珍才びつくりして飛起き、眞面目になり、

珍才　源吾殿、地震でござるか。

源吾　えゝ、盗人が入つたわえ。

珍才　え。どろぼう〳〵。

主膳　あこれ、御家の瑕瑾ぢや。密かにしやれ。

ト時の鐘にて、この道具廻る。

（元の辻番の場）＝＝本舞臺元の辻番の道具へ戻る。と、やはり新助お元の胸を押へてゐる。と、正面の黒塀の影へ幸藏出で、見越の松へ上り忍び返しを引つたくり、用水桶を足代にひらりと飛下り、手拭を取り半纏をひつくり返して着、元の唐桟になり、四邊を窺ひ、辻番にゐる兩人を見て、

幸藏　そこにゐるのは今の衆か。

新助　さうおつしやるは、先刻のお方（トお元を介抱しながら下手へ來て）お早うござりましたな。

幸藏　それ、約束の百兩（ト懐より百兩包を出し、新助に渡す）。

新助　すりや、この金子を下さりますとか。

幸藏　お前方に上げるのさ。

新助　命の親の旦那樣、

お元　何とお禮を申さうやら、

兩人　えゝ有難うございます。（ト金をいたゞき嬉しき思入）。

新助　してあなた樣には、お宅は何れで、名は何とおつしやりますか、承りたうございまする。私ごとは（ト言ひかけるを制へて）、

幸藏　あいやその名は聞くに及ばぬ。仔細あつて私が方の名も名乘らねば、言はず語らず、命助けしその金は天道よりの即ち賜物、忝ないと思ふならこの後親を孝行に、必ず死なうなぞといふ、一圖な心を出しなさんな。

新助　御親切なるその御意見、

お元　死んでも忘れはいたしませぬ。

幸藏　いや、死ぬといふのは言はねえことだ、命を大切に末長く、夫婦になつて暮しなせえ。

兩人　有難うございます。

幸藏　もう今夜も九つ前、定めて家で案じてゐよう、殊には金を持つてゐては、夜更けぬ中に少しも早く。

兩人　左樣なればこのまゝに、

幸藏　緣があつたら又重ねて、

兩人　お目にかゝるでございませう。

ト唄になり、新助お元は花道へ入る。幸藏後を見送り思入あつて、

幸藏　見ず知らずの二人が命助けてやつたあの金はこゝの戸敷のお納戸金、人の物で人を助け、思はぬ功德をしてやつたが、悅びあれば悲しみと、今夜御殿の夜詰の人が定めて難儀をするだらう。然し忍び返しを打ちこはし、塀を乘越え出て來たから、外から入つた盜人と夜詰の人に疑ひのこれでかゝる氣遣ひなし、

ト此中辻番より與惣兵衞出かゝり窺ひゐて、これを聞きびつくりなす。幸藏思入あつて、

この駕籠屋はどうしたか、うか〳〵こゝに待つてもゐられぬ、あゝ仕方がない、歩いて行かうか。

ト時の鐘になり、幸藏思入あつて下手へ行かうとすると、與惣兵衞つか〳〵と出て、

與惣　盜人どの、待たつしやい。

幸藏　や、なに盜人とは、

與惣　こなたが今の問はず語り、後でとつくり聞きました。

幸藏　聞いたとあれば隱すに及ばぬ、いかにも、私は盜人だが、さういふこなたは、

與惣　辻を固むる足輕でございまする。

幸藏　その足輕どのが、何で私を、

與惣　呼留めましたは盗人どの、こなたにちつと頼みがござる。

幸藏　なに、私に頼みとは、

與惣　外でもない、この親仁の命を取つて貰ひたい。

幸藏　何と言はつしやる。

ト捨石へ腰をかける、與惣兵衛思入あつて、

與惣　人の命も助けるこなた、情の道も辨へし盗人どの故私が頼み。今辻番で聞いてゐれば、この屋敷へ忍び込みお納戸金を百兩盗み、塀を乘越し出たとのこと、辻を固むる役目故取押へねばならぬけれど、こなたは血氣盛の盗人、足腰さへも人並に利かぬ親仁が捉へられうか、とあつてみすみす盗人の眼前あるを見逃しては、一合たりとも殿様より御扶持を頂戴いたしますれば、役目がどうも濟みませぬ。それ故こなたの手にかゝり命を捨つれば、親仁めも役目を思ひ盗人を捕押へに出て殺されしかと、お上にて思召せばそれでこの身の役目も立つ。もう六十も越したれば死んでもをしうない身體、どうぞ殺して盗人どの、私に忠義を立てさせて下され。

ト與惣兵衛思入にて言ふ。幸藏不便なといふ思入にて、

幸藏　同じ人でも侍の交はりなせば魂が、これほどまでに違ふものか。役目も輕い辻足輕、僅少な扶持を貰ふ身で、御恩を捨てず命をば捨てる覺悟はあつぱれ感心、いかに非道な盗人でも、こなたがどうして殺されう。その心根を聞く上は、この場でこなたの繩にかゝり手柄にさして進ぜたいが、願ひある身に今こゝでどうも命が捨て難い、こなたの忠義を無にするは本意ならねど此のまゝに、私を見逃し助けて下され。

與惣　情深いこなた故、殺し難くもあらうけれど、又向うたとて年老を所詮殺さぬ氣性を見込み、事情を分けての私が頼み、慈悲ぢや情ぢや盗人どの、どうぞ殺して下されい。

幸藏　その頼みはこつちから、どうぞ此のまゝ逃して下され、その替りには近い中盗んだ金はもと〳〵へ、きつと返しに來るほどに、暫時の間忠義を捨て助けて下され親仁どの、これ、手を合して拜むゝ。

與惣　いえ〳〵、こなたより私の方から手を合して、をがみます〳〵。

幸藏　いや〳〵私から、

兩人　拜むゝ拜むわいの。（ト兩人手を合してをがむ。與惣兵衛は是非なき思入にて）、

與惣　あゝ、そんならどうでも殺しては下されぬか、その情深い心にて、何故盗みをさつしやりますぞ。

幸藏　さあ、惡いことゝは知りながら、生れ附いての盜み根性、我と我身に意見なし、盜み心は止めようと心に錠をおろしても、止められぬのはこの手の鍵、金を見るとほしくなり、どんな鎖のある所でも忍んで入るが譬にいふ國に盜賊家に鼠、どうで仕舞ひは天の罰地獄落しに獄卒の手にかゝるのを知りながら、今日が日までも止められぬは、何と因果なことではないか。

與惣　その話を聞くにつけ、思ひ出すは我總領兒、庚申の夜の生れ故心にかゝりある僧に人相を見て貰ひしところ、盜人になる相なりと詳しい敎に不便ながら、七夜の祝ひが親子の別れ、臍緒書を守袋へ入れ、產神樣の鳥居前へ捨てゝ丁度三十年、死んだか生きたか便りも知れず、こなたを見れば似寄りの年配、私が倅もこのやうに多分盜みをするであらうと、老人の思ひ過しに、他人のやうには思ひませぬわいの。

ト涙を拭ひながら言ふ、幸藏これを聞き、扨はといふ思入。

幸藏　むう、そんならこなたの總領は、庚申の夜の生れ故水子の中に捨てたとか、してその守袋の臍緒には何と記してありましたな。

與惣　はい長寛二年八月四日庚申の夜の誕生、與惣兵衞倅與吉と私が手蹟で書記し、捨てる子でも末を思ひ、出世大黑の御影を添へ、守袋へ入れておきました。

幸藏　すりや臍緒書に、大黑天の御影が添へてあつたとか（ト與惣兵衞を見て、扨は我親であつたかといふ思入あつて）、三十年來尋ねてゐたが、そんならこなたが、

與惣　え、

幸藏　いやさ、こなたが尋ぬゐその倅は（ト名乘らうとしたが氣を替へ）、達者に暮してゐるほどに、必ず共に案じなさんな。

與惣　すりや達者でをりますとか。どうしてそれを此方さんが、

幸藏　知つてゐるのは仲間故、

與惣　そんなら倅も、やはり盜みを、

幸藏　生れ附いた因果にて、私とともゝ〳〵盜人渡世、

與惣　して〳〵何處にをりますな。

幸藏　何れ何處と遠くもない、鼻の先のこの鎌倉、水子の中に別れた故何處にどうしてゐられるか、達者な中に逢ひたいと、明暮言はねえことはねえ。

與惣　あ、親とはいへどたつた七日、親甲斐もなく邪慳にも捨てた私を親と思ひ、朝夕尋ねてをりましたとか。

幸藏　そりやあ僅七日でも、親子の縁を結んだからは、逢ひたく思ふはこりや人情、私も親に別れた身だが、善きに附け惡いに附け、思ひ出さぬことはねえ。

與惣　そーやうに親切にこなたが言うて下さると、年配といひ裝容、伜のやうに思はれてなつかしうござるわい。（ト幸藏に縋り思入、幸藏も術なき動作）。

幸藏　さう思ふのも尤もだが、私でさへこなさんが親父のやうに思はれて、をかしな心になるものを、年寄つた身では尤もだ。して、こなさんは、今では一人か。

與惣　七年後に女房は死に、百姓業も出來ぬ故、捨てた伜の弟を連れ、お國屋敷にお願ひ申し、今では親子二人にて、この辻番にかすかな暮し。

幸藏　それでは、捨てた息子の下に弟が一人ありますか（ト弟に逢ひたき思入）、何にしろこなさんも、實の伜に逢ひたからう、少しも早く樣子を知らせ、息子どのを逢はせによこさう。（トこれを機に逃げる心にて）、さうだ〳〵（トつか〳〵と行くを引留め）。

與惣　いや盗人どの、待たつしやい。よしないことにうか〳〵と、こなたに賴んだ事を忘れた、行くなら私を殺して下され。

幸藏　さうでもあらうが不思議にも、三十年來尋ねた伜の在所が知れたら、逢つた上で死んでもおそくはあるまい。

與惣　逢ひたう思うた伜なれど、逢ふことならぬ今宵の仕儀、伜が仲間のこなさんに逢うたは私が今際の悦び、年格恰も似寄りのこなた、伜に逢うたも同じこと、これで望みが果てたれば、どうぞ殺して行つて下され。

幸藏　知らぬ前でも殺されぬに、ましてや親と、さあ、仲間の者の親と知り、どうしてこれが殺されう。こればつかりは許して下せえ。

與惣　いや許さぬ、許されぬ、伜が行方が知れたる上は、生き延ばはつては子に迷ひ命をしむも同じこと、猶々死なねば役目が立たぬ、是非とも殺して下されい。

幸藏　えゝ聞分のない親仁どの、どうでもこなたは殺されぬ（ト振拂ひ行からとするを與惣兵衛縋り留めて）、どうぞ殺して下されい。

ト尙も幸藏に武者振りついて留める、幸藏是非なく手荒く振拂ふ、その機に與惣兵衛脾腹を打ち、うんと悶絶しどうと倒れるに、幸藏寄らうとして、

幸藏　許して下せえ、親父樣。

ト恐ひの思入、この時下手より具前の駕舁□◎出來りて、

□◎ 旦那、お待遠でござりました。

幸藏 駕舁か、急いでくれ（ト四つ手駕へ手早く乘る）。

□◎ 畏まりました。

ト駕籠を舁き上げ花道へ行きかける。と花道より與之助足早に出來り、駕籠と花道にて行逢ひ、與之助は舞臺へ來り、駕籠はよき所にて杖をする。與之助與惣兵衛に躓きびつくりして、

與之 や、こりや親父樣か、

ト、この時駕籠の垂を上げ、幸藏は舞臺を見て手を合せるを木の頭、與之助は與惣兵衛を抱起して、

親父さまいのう。

ト呼ばゝる。船の騷ぎ佃にて駕籠は逸散に花道へ入る。與之助は與惣兵衛を呼生ける。こゝ見得よろしく、

と時の鐘にてつなぎ　直に引返す。

ひやうし幕

（若栄屋の場）――本舞臺三間の間常足の二重家體、正面暖簾口、上手に戸棚、下手は賀帳をかけし壁、上手には障子家體、いつもの所門口。下の方は白壁の土藏、雪の下といふ札あり。用水桶、總て若栄屋店頭の道具、二重に角行燈を灯し夜の態。こゝに山井養仙藥箱をなほし調合してゐる、丁稚三太手燭を持ちて側に控へ、門口に養仙の供ひん助煙草を喫みゐる、

三太　もし養仙さん、此間のやうな嘘藥があるなら、おくんなせえな。

山井　生憎今日は持ち合はさぬて。

三太　へい、そんなことを言つて、呉れめえと思つて、

山井　仁術を施す醫者が僞りを言ふものか。

三太　仁術は入らねえから、嘘藥をおくんなせえな。

ひん　子僧どん、寢小便の藥はあるがやらうか。

三太　何をこのひん助め、手前にくれといやあしねえわ。

ひん　寢小便と言はれて腹を立つたな。

三太　立てねえでどうするものだ。

山井　これ〳〵、何もそんなに腹を立つことはない、嘘藥の代りに奇代な藥をやらうか。

三太　はあゝ、そいつあよく利くだらう。

山井　まだ何とも言ひはしないわ。

三太　道理でさつぱり分からなんだ。

山井　愚老家傳の忘れ薬といふものがあるが、これは天竺靈鷲山般得の塚に生ぜし若荷の細末、これを茶の中へ入れて呑ます時は、いかなる記憶のよいものでも、物忘れをすること奇々妙々、至つて高料なもの故、宿下の小遣ひがあるなら百孔ばかり賣つてやらうか。

三太　そいつあ有難い、一丁度こゝに天保があるから、これだけ賣つておくんなせえ。

ト守袋より百錢を出し渡す、山井藥籠より紙の袋へ入りし藥を出して紙に包み、

山井　まづ、試みはこの位だ（ト渡す、三太取つて）、

三太　こりやあ大そう高いものだ。

山井　はて、天竺渡りの藥だ、安くは賣れない。

三太　なに、高いのはいゝが、藪醫者の藥だから利けばいゝが（ト言ひながら奥へ入る）。

ひん　いや、子供は正直なものだ。

山井　何を、おのれまでが（ト睨む、奥より下女おせん出來りて）、

せん　養仙樣、お藥はできましたか。

山井　丁度調合いたしたところだ、少々今日は加減をしまして（ト藥包を渡す）。

せん　煎じやうは變りませぬか。

山井　やはり、常體でようござる。

ト奥より三太盆へ茶碗を二つ載せ持ち出來り、

三太　養仙樣、お煮花が入りました（ト茶臺へ載せて出す）。

山井　これは忝けない（ト茶を飲む）。

三太　さあ、ひん助どんも飲みなせえ。

ひん　寢小便のお禮かな。

三太　又そんなことを言ふか（ト盆を振上げる）。

せん　これはしたり、どうしたものだ。

三太　どうすりや馬の子ができる。

トついと奥へ入る、とひん助ぼうつとせし思入にて煙草盆を提げ、花道へふら〳〵と入る。

せん　もし養仙さま、たいした御樣子でもございませぬが、後家御樣の御病氣は何御病氣でございますな。

山井　（ぼうつとせし思入にて）、はあゝ後家樣は御病氣でござるかな。

せん　何をおつしやります、御病氣故にお藥をお貰ひ申しますわいな。

山井　左樣でござつたか、一向に存じ申さぬ。

せん　これはしたり、たつた今お貰ひ申しましたに、

山井　左樣なことがあつたかしらぬが、愚老はたと失念いたした、宅へ歸つて愚妻に承はつてまゐらう。

ト山井匙を持つたまゝ跣足にてふら〳〵と花道へ入る、おせん呆れて、

せん　こりやまあ養仙樣にはどうなされたことぢややら、あの樣子ではこのお藥もどんな調合がしてあるも知れぬ。こりやめつたには上げられぬわいな。

ト藥包を持ち奥へ入る、引違へて三太出來りて、

三太　藪醫者の藥にしてはめつほうな利きやうだ、藥箱を忘れて行つたこそ幸ひ。殘りの藥を盜んでやらう（ト藥箱の抽出しより以前の藥包と百錢を出し）、殘りの藥をせしめた上、天保錢までとは有難い。早く誰ぞに飲ましたいものだ。

ト花道より駒田久六、村井傳藏出來り門口にて、

兩人　賴まう〳〵。

三太　そりや來た〳〵。どちらからおいでなされました。

久六　我々は三浦の家來、此の家の娘若草どのゝ儀につき。

傳藏　後家御に面談がいたしたい、左樣申してくりやれ。

三太　畏まりました。（ト奥へ入る、引違へて番頭佐五八出來りて）、

佐五　これは〳〵御兩所樣、ようこそおいで遊ばしました。子僧よ、お茶を上げぬか。

三太　はい〳〵（ト奥より茶を汲み持來りて）はい、お茶をお上りなされませ（ト兩人へ出す）。

久六　あいや、構やるな〳〵（ト飲みながら）、

傳藏　これは結構な茶でござる。

三太　よろしければもう一ぱい差上げませうか。

兩人　むゝ、もう一ぱいくりやれ。（ト三太茶碗を持ち奥へ入る、兩人ぼうとせし思入）。

佐五　して御兩所樣のおいでは、何御用でございますな。

久六　我々ども參りしは（トしやに搆へ忘れし思入）村井氏、何でござつたつけな。

傳藏　されば、はたと失念仕つた。

佐五　それは怪しからぬことでございまする。

三太（茶を汲み持來りて）へい、お茶をお上りなされませ。

ト兩人茶を飲み、考へてゐる思入。

傳藏　駒田氏、少しは思ひ出されましたかな。

久六　一向思ひ出されませぬ。

佐五　それでは、御用の趣は、

久六　何であつたか、忘れてしまうた。

傳藏　とくと考へてまゐるであらう。

佐五　それがよろしうござりませう。

ト兩人下駄と雪駄と跛に穿き、花道へ行き、

久六　どこへ御用を落して來たか。

傳藏　易占にでも見て貰はう。

ト兩人跛を引きながら花道へ入る、三太これを見て踊りながら奥へ入る。佐五八見送りて、

佐五　二人が二人口上を忘れるとは合點が行がぬ、狐にでもつまゝれはせぬか。

ト帳を附け始める、と花道より家主佐次郎兵衛出來りて、

佐次　いや御免なせえ、家主の佐次郎兵衛でござる。

佐五　これは大家樣、ようおいでなされました。

三太　（奥より茶を汲み持來りて）はい、お茶をお上りなされませ。

佐次　（茶を飲みながら）小僧、寢小便は止んだか。

三太　大家にお世話さ。

佐次　お茶でもおくれ（ト茶碗を出す、三太取つて奥へ入る）。

佐五　とさ、、大家樣、何ぞ御用でござりますか。

佐次　されば、何か用があつて來たが、番頭そなたは知らぬか。

佐五　なに、私が存じませう。

佐次　はて、困つたことだなあ。

佐五　まあ、とつくりと考へて御覽じませ。

佐次　あゝ、思ひ出されゝばよいが。

ト花道より講坊主西念伏鉦と撞木を持ちて先に立ち、同行の者一、二後より從ひ出來り、

同一　扨、今夜は若菜屋の去年死なれた旦那どのゝ一周忌の百萬遍、

同二　定めし富家のことなれば、御馳走はたつぷりであらう。

西念　然し、精進物では呑めませぬな、たいがいな御馳走より、あの美しい若後家のお酌を願ひたいものだ。

二人　大きに左様さ、はゝゝゝゝ。

三人　南無阿彌陀佛々々（ト門口へ來て）、

西念　御免下され、百萬遍の講中でござります（ト内へ入る）。

佐五　これは西念和尚に御同行衆、今晩は御苦勞にござりまする。

西念　此間のやうでござつたが、もう一周忌でござりますな。

同一　月日の經つは早いもので、まだ二月か三月と思ふ内、直流れになりまする。

同二　違ひござりませぬ。

ト奥より三太盆へ茶碗を載せて出來りて、

三太　はい、お茶をお上りなされませ。

三人　いや、構はつしやるな〳〵。（ト三人茶を飲む）。

佐次　これ〳〵西念和尚、こなた私が用を知らぬか。

西念　いえ、何だが存じませぬ。

佐次　あゝ、門徒物知らずといふが、淨土もやつぱり物知らずだな。

西念　それはさうと同行衆、こちらへは何しにまゐつたのちやな。

二人　されば、何でござりましたか。

佐五　いや、これは怪しからぬ、お前方は一周忌の百萬遍にござつたのだ。

三人　さうでござつたかな（ト不審な顔をする）。

佐次　だいぶ連ができて來たわえ。

三太　いや、藥の利目は奇々妙々、

ト盆を持ち踊りながら奥へ入る。と花道より以前の久六、傳藏出來りて、

久六　村井氏何でござつたな。明日御殿に尾平扇玉新玉の俄狂言がある故、後家にも見物に參れと、かやう申すのでござつたな。

傳藏　左様でござる。何の雜作もないことを、はたと失念仕つた（ト言ひながら舞臺へ來て）、

兩人　賴まう〳〵。

佐五　これは御兩所様、またいらつしやりましたか。

久六　途中にて使ひの趣思ひ出して罷り歸つた。

佐五　それはよろしうござりました。

傳藏　急いでこなたへまゐつた故か、咽喉がかわいてならぬ。

（ト奥より三太茶を持つて出來り、

三太　はい、お茶をお上りなされませ。

久六　只今所望いたさうと存じたところだ（ト兩人茶を飲み）、村井氏、お使の趣演說めされ。

傳藏　畏ってござる。えへん〳〵。駒田氏何と申すのでござつたな。

久六　身共は一向存じ申さぬ。

佐五　又お忘れでござりましたか。

久六　これは粗相。

傳藏　出なほしてまゐらう。（ト兩人眞面目に花道へ入る）。

佐五　いや、呆れた人達だ。

佐次　あのやうな立派なお侍樣でさへ物忘れをさつしやるもの、家主などはあたりまへだ。

佐五　ときに毋念さま、百萬遍をお始め下さりませぬか。

西念　さあ、初めは初めようが、念佛は何と申したか。

佐五　これは怪しからぬ、坊主が念佛を忘れるといふのがあるものか。

西念　ところをさつぱりと忘れてしまつた。同行衆念佛を知つてござるか。

同一　されば、念佛はあまかつたか、辛かつたか。

同二　久しく食はぬから、忘れてしまつた。

三太　いや、念佛を忘れるとは面白い〳〵、もつとお茶を上げませうか。

皆々　もう一ぱい貰ひたい。

三太　いや、しめ〳〵（ト奥へ入る）。

西念　何と番頭どの、念佛を知つてござるなら敎へてくれぬか。

佐五　何の雜作もない、南無阿彌陀佛さ。

西念　なるほど、さう言はれて見れば聞いたやうでござる。なあむ——何とかいふのであつたな。

佐五　阿彌陀佛さ。

西念　阿彌陀佛さ。

佐五　そのッさは入らない。

西念　はて、念佛にッさは入らぬかな。

佐次　ッ、ッさを入れずば、壁の持が悪からう。

佐五　何を言はつしやる。

同一　何と番頭どの、百萬遍の稽古がしたいが、

同二　教へては下されぬか。

佐五　えゝ、忙しいけれども、仕方がない、さあ〳〵音頭を取るから、私が言ふ通りにやんなせえ。

三人　合點ぢや〳〵。

佐次　おれも念佛の補助に入らう。

西念　これは御奇特なことでござる。

佐五　(鉦をたゝきながら)、なむあみだんぶつ、

皆々　なむあみだんぶつ、

佐五　なむあみたんぶつ、

皆々　なむあみだんぶつ、

佐五　いや、うまいもの〳〵。

西念　扨々、念佛といふものは、

三人　覺え難いものだ。

佐五　いや、呆れた人達だ。

(百萬遍の念佛にてこの道具廻る。)

(若栄屋裏手の場)――本舞臺上の方白壁の土藏の後。下の方一面忍び返し附の黒塀、見越の松、總て若栄屋裏手の模樣。と時の鐘通り神樂になり、花道より與之助頬冠りにて出來りて、

與之　一昨日の晩お屋敷にてお納戸金を百兩盗み、堀を越したる盗人を父樣が呼留めて取押へねばならぬけれど、年寄りし身に及ばねば、殺して行けとおつしやつたを言譯なして逃げる折、脾腹を打たれて暫しの氣絶、折よく私が戻りかゝり介抱なして樣子を聞けば、庚申の夜の生れにて、七夜に捨てし我兄に年格恰が似寄りとやら、もし兄にてはなかつたかと父樣が後でのお話し、それを屋敷の者が聞き、父樣は盗人の手引をなせし同類と疑ひかゝつて嚴しい詮議、その夜御殿のお夜詰よりお組頭の主膳樣、役目を嫉む朋輩が何でも勝手を知つた者と主膳樣にあてつけて、お組下故猶更に御宥免なく、父樣には問注所へ引渡され、昨日から獄屋の住ひ、また主膳樣にも遠慮のお咎め。どうぞしてその百兩の金を調へお上へ納め、御恩に與る主膳樣附いては親の苦しみを、

助けたいと一圖に思ひ、夜の目も寐ずに歩いても、天から降るか地から湧かねば所詮出來よう當はない、これが僅少なことなればお慈悲深い若菜屋の後家御樣へお願ひまをさば、お貸しなされて下されうが、大枚百兩といふ金をどう御無心が申されう。うか〳〵と歩いて來たが、こゝは若菜屋のお庭口(ト塀の内へ思入あつて)、あゝあるところにはある金も自由にならぬ身貧な活し、そでないことも親の爲め、いつそ今宵忍び込み、あゝいや〳〵、止しにしませう〳〵、いかに親の命が助けたいとて、御恩になつた後家御樣へ御難儀かけては此の身の罰、天道樣がお許しなされぬ。あゝ惡い心は持ちますまい〳〵。(ト身慄ひをして、東の假花道へかゝり思入あつて)、とはいへ金が出來ぬ時は、父樣には獄屋の責、辛い苦患を受けた上刀の錆とおなりなされう。假令この身は盜人の重き仕置に逢はうとも、お助け申すが親への孝行。こりや心を鬼に持つて、御恩を仇で返さにやならぬ。さうぢや〳〵。

ト本舞臺へ戻り、塀の側へ來て内を覗く。此の時上手よりひん助煙草盆を提げしまゝ出來り、大きな聲にて、

ひん　こりや〳〵(トいふので、與之助びつくりして)、

與之　へゝい(ト慄へながら下にゐる)。

ひん　私は山井養仙といふ醫者の供だが、主人を何處へか忘れて來た、もしこゝらで見當なんだか。

與之　いえ、そのやうな方は存じません。

ひん　はて、どこへ忘れて來たか。

ト花道へ入る、與之助胸を撫おろして、

與之　疵持つ足にびつくりしたが、これでは盜みも覺束ない。どうぞ首尾よう行けばよいが、

ト思案の思入、唄、時の鐘になり、與之助上手へ入る。これにてこの道具を左右へ引いて取り、後の黑幕を切つて落す。

(若菜屋奥の間の場)——本舞臺三間の間常足の二重家體、正面更紗の暖簾口、上手に立派なる佛壇、上の方に障子家體、下の方は建仁寺垣、梅の樹、石燈籠、手水鉢などよろしく、總て若菜屋奥の間の體。こゝに若菜屋の後家お高番頭佐五八の手先を押へゐる、佐五八手を捉へられ頭を掻きゐる。

お高　これ番頭どの、わしが懷へ手を入れて、こりや何としやるのぢや。

佐五　何とするとは後家御樣、あなたも粹のやうにもない、たいがい御推量なされませ。

お高　いや、推量しませぬ、夫のない身にこのやうな亂らなことを言やらうが、淨譽貞林信士といふ私

には夫のある身ぢやぞよ。

佐五　へゝい（ト面目なき思入）。

お高　外の者でもあることか、見世の締りもするその方、このやうなことして濟まうと思ふか、あまりのことで物が言はれぬ（ト手を放し突放す）。

佐五　へゝい。（トうづくまる、お高立つて佛壇より位牌を出し）、

お高　これ、この位牌を見や、淨譽貞林信士、法譽妙貞信女と逆朱を入れしは私が法名、並べて彫りしは過行かれし夫と一つにゐる心、娘に聟を取るまでと浮世の義理に髪は剃らねど、心の中は尼法師、世間を飾る紋附の色氣放れし墨染同然、月雪花の樂しみより朝な夕なのお香の世話、佛いぢりを樂しみに、後家の操を立て通す私を捉へて亂らなこと、それも向後心を改め見世を大切にしてくりやれば、誰も聞人のないこそ幸ひ、この場の事はこの場ぎり。強つてと言やれば是非もない、親類衆へも話した上そなたに暇をやらねばならぬ。位牌の前で番頭どの、二つに一つの返事をしやれ。

ト思入にていふ、佐五八南無三といふ思入にて、傍にある茶碗の水を眼に附け泣く思入。

佐五　あゝ後家御樣詫り入りました、御免なされて下さりませ。

ト茶碗の水を眼へ附ける。奥よりおせん出でこれを伺ひ頷いて、有合の硯箱を持ち奥へ入る。

言譯がましうござりますが、本心あなたへ亂らなことを申しましたのでござりませぬ。世間での評判に若菜屋の若後家は、あゝ見えても旦那どのが死なれてからは色狂ひと、世間の噂に私は聞く度毎にどのやうに悔しいか知れませぬ。（ト茶碗の水を眼に附け）、あなたに限つてそのやうなことのないのは知つてをれど、それともしやと私が心にもない不義いひかけ、色めいたことおつしやつたら、とつくり御意見申さうと、思ひのほかに私が御意見を承り、面目もない仕合せながら、操正しいお心を承つて安心なし、嬉し涙がこぼれます。

トこの折おせん墨を入れし茶碗と取換へおく、佐五八それを知らず眼へ墨を附け、しく〳〵と泣く思入。

元より心にないことなれば、この場のことはこの場ぎり、沙汰なしにして下さりませ。

お高　そなたがさういふ心なら、私は元よりこの位牌の旦那樣が嘸御悅び、この後とても見世の締り、よう氣を附けてたもいのう。

佐五　そりやおつしやるまでもござりませぬ。

お高　兎角うるさい人の口、目つまにかゝれば無き名が立つ、そなたは見世へ少しも早う。

佐五　左樣なれば後家御さま（ト顏を出す、お高見て）、

お高　や、そなたの顔は、

佐五　え（ト手で撫で、墨が附くのでびつくりし）、はて、めんような。

ト呆になり佐五八思入あつて奥へ入る。お高位牌に向ひて、

お高　どうぞ早う跡目をこしらへ、あなたのお側へ参りたうございます。

ト位牌をいたゞき、佛壇へ仕舞ふ。合方になり、奥より刀屋新兵衛におせん附いて出來り、

新兵　後家御どの、この間は逢ひませぬ。

お高　これは刀屋の新兵衛様、いつのまにおいでなされました。

新兵　今しがたこれへまゐり、番頭どの〻不埒の段々、次の間にて承りました。

お高　見世の束ねをするもの〻あのやうな亂らなこと、御推量下さりませ。

新兵　いやも女の身にて嘸かし心配、推量いたしをりますて。

せん　そしてまあしら〳〵しい、茶碗の水を眼へ附けて泣く眞似をしてゐなさる故、硯墨と入替へて遣趣返しをしてやりましたわいな。

お高　して新兵衛様には夜に入つて、何ぞ御用でございますか。

新兵　後家御どの、ひよんな事ができましたて。

お高　ひよんな事とは氣がかりな、どんな事でございますぞいな。

新兵　外でもない倅が事、一昨日三浦のお屋敷から、菊一文字の刀の代金百兩お預り申せしところ、街りに出逢うてそれを盗まれ、常から身持がよからぬ故、言譯なさに乳母の娘、今は藝者のお元を連れ身を投げようとせしところを、さる人に助けられ百兩の金まで貰ひしに、情なやその金は稲毛の屋敷で盗人に盗みとられし極印金、それ故倅に疑ひかゝり、可哀や乳母の娘まで縄目に逢うて問注所へ、今日引かれて行きました。

兩人　え〻（トびつくりする）。

新兵　たつた一人の倅故大切に思ひ平生から、やかましう言過ぎて盗人にせし今の後悔、推量して下さりませ（ト涙を拭ふ）。

お高　え〻何故さういふことならば、私に一言いうてはくれぬぞ。百兩はおろか千兩でも、金で命が買はれうか、情ないことしてくれたなあ（トはつと泣伏す、おせんも思入あつて）、

せん　此方様でもお嬢様がお厭だとおつしやるを、三浦様で無理無體妾にくれいとおしつけわざ、後家御様にもそれを氣病に一昨日からお勝れなされず、そのお涙の乾ぬ中に、また御親類の新助様が思ひかけないお身のお難儀、憚りながらお二人様のお心の内が思ひやられ、おいとしう存じますわいな。

新兵　おゝよう悔みを言うてくれた、定めて話さば後家御様にも案じさつしやらうと思うたが、言はずにゐられぬ親類仲、餘計に苦勞をかけまする。

お高　同じ苦勞もこちの娘は、假令妾になつたとて命にかゝはることでもなし、新助どのは身の疑ひ言譯たゝぬその時は、どうしたらようござりませうぞいな。

新兵　元より知らぬことなれど、言譯立たねば是非がない、此の上は神佛のお力借りて、伜が命救うてお貰ひ申さにやならぬ。

お高　これを思へば世の中に、子のないお人が羨しい。

新兵　後家御どの、

お高　新兵衞さま、

新兵　あゝ子は三界の、

兩人　麻挂ぢやなあ。

ト兩人よろしく愁ひの思入。と、ばた〳〵になり、下手にて佐五八の聲にて『うぬ盗人め、うしやあがれ〳〵』といふ聲して、與之助の襟髮を執りて引立てゝ佐五八出來り、續いて佐次郎兵衞、西念、同行、三太等手代二人棒を持ちて、わや〳〵と出來る。

後家御様、盗人が入りました。

皆々　盗人が入りました。

佐五　お案じなされますな、取押へましてござりまする。

佐次　何にしろ、こりや問注所へ訴へずばなるまい。

佐五　大家様、御苦勞ながらお頼み申します。

西念　ついでに寺へも人を遣らつしやい。

同一　葬式は何時だな。

同二　問注所はどらかだな。

佐次　今月は北條様だ。

三太　それぢやあお寺は增上寺か。

新兵　あこれ〳〵、さうてんやわんやに言はずと、まあ〳〵、靜にさつしやいく。

佐五　いえ〳〵靜になりませぬ、裏の塀を乘越して、忍びこんだ大盗人、

佐次　何にしろ、どんな奴だか、

西念　手拭を取つて面を見てやるがよい。

佐五　何だか生つ白けた奴だ（ト手拭を取り與之助の顏を見て）や、こりや辻番の倅の與之助か。

三太　やあ、親孝行だ、親行孝だ。

お高　なに、與之助とや。

せん　ほんに、お前は與之助さん。

ト與之助面目なき思入にて、

與之　後家樣、御免なされて下さりませ。

ト與之助俯向く、お高は合點の行かぬ思入にて、

お高　思ひがけない、どうしてそなたが、

佐五　どうもかうも入りませぬ、親孝行を賣物に正直らしく見せかけて、盜みをするに違ひない。

佐次　まだまあ見れば若衆だが、今から盜みをしならつたら、よい盜人になるだらう。

お高　あいやく、その子は親に孝行にて、なかく盜みをするやうな性質のものではない。そりや間違ひであらうわいの。

佐五　いえく間違ひではござりませぬ、ないといふ證據がござります。

新兵　なに、證據とは、

佐五　これが親父の與惣兵衛といふ奴、おのが屋敷へ盜人の手引をなし　といふ噂、親が親故子もやはり盜みをするに違ひはない。

西念　可哀さうだと思つたが、さう聞けば太い奴だ。

同一　以後の見せしめ、この若衆、

同二　百萬遍でしめてくれう。

西念　それがいゝく、どれ愚僧が音頭をとらうか、（ト鉢卷をなし、皆々棒を持ち）、

皆々　なむあみだんぶつく、（ト與之助をくらはす、與之助手を合せて）、

與之　もし番頭樣、いづれも樣、たつた一言いひたいことがござります、まあく待つて下さりませ。

ト皆々を拜む。これにて皆々も控へる、與之助涙を拭ひて、

いかにも私はこのお家へ、御恩を仇に百兩の金を盜みに入りましたが、それも切ない事情あつて、何をお隱し申しませう、私の親父與惣兵衛と申す者、身に覺えない盜人の疑ひ受けて一昨日から、問注所の獄屋の住ひ、譬にもいふこの世の地獄、六十越えし老の身で嘸や切ないことであらうと、子の心ではあるにもあられず、就いては御恩に與りしお組頭の旦那樣、これもそれ故咎めの御遠慮。この御難儀を救はんには金調へてお上へ納め、お慈悲願ひをいたさうと思へど、はかない身

貧な活し、假令此の身はどのやうな憂き目に逢ふとも、旦那様や親の苦勞が助けたく、後家御様の御恩をも顧みませず、百兩の金を盗みに忍び入り捉へられしは天の御罰、これにて親の命もなければ生きて詮ない我身體、打つなりと踏むなりと御存分になされし上、この身に縄かけ問注所へお引きなされて下さりませ。刀の錆に身の末は犬の呑食になりましても、親子一つに死ぬるが樂しみ、もし番頭さま、何れもさま、御存分になされて下さりませ。

ト此の中お高、おせん涙を拭ふ、新兵衛も愁ひの思入にて、

新兵　聞けば聞くほど哀れな話し、身につまされて不便だわい。

佐五　へん、さういふ哀れつぽい事をいふは、此奴等の附目、

佐次　めつたに、それにはのられない。

西念　何にしろ逃げぬやう、ふんじばつておくがいゝ。

皆々　それがいゝ〳〵。

ト皆々立ちかゝる、お高この時つか〳〵と行き、與之助を圍ひ皆々を留め、

お高　あゝもし皆様、まあ〳〵待つて下さりませ。

佐次　こりや後家御に、

皆々　何故留めさつしやる。

お高　お留め申すは縄かけるこの子が盗人でござりませぬ故。

皆々　や、なんと、

佐五　これは異なことをおつしやります。塀を乘越し忍び込んだを、盗人でないとおつしやるわ、

お高　さあ、塀を乘越し忍んで來たわ。

佐五　何でざりますな。

お高　耻かしながらこの高が、密男ぢやわいなあ。

皆々　やあ（ト肝をつぶす）。

佐五　むゝ、すりやこの若衆と後家御様は、密通なされて、

皆々　ござるとか。

お高　夫に別れて閨寂しく、疾うからこの子と言交し、夜な〳〵塀を乘越して私が部屋へ忍んで來たが、阿漕ヶ浦に引く網の度重なつて今宵の仕儀、露に言はゞ不義の科、わざと盗みに入りしと、私を助ける志し、何にも言はぬ嬉しいわいの。

ト思入にて言ふ、與之助びつくりして、

與之　えゝめつさうなことおつしやりませ、この身にさら〳〵覺えのないこと、今ち申す通り、親の命が助けたさに金を盗みに入つた、盗人でござりまする。

ト お高これを打消すやうに冠せて、

お高　あこれ〳〵與之助、私を庇うてそのやうに言うてくれるは嬉しいが、もうかうなつたら包むに及ばぬ、そなたに罪は着せぬほどに、落附いてゐやいの。

與之　それぢやというて、覺えもないこと、

お高　さあ、そなたに科は少しもない、私が方から仕かけた戀路、年端も行かぬそなたを捉へ、道ならぬことするからは、露はれたその時はと豫て覺悟の私が身の上。もしお家主樣、この與之助に科はない、私がしだせし不義の科、どうぞこの身に繩かけて、此の子を許して下さりませ。

ト 思入にていふ、これにて新兵衛急き込みて、

新兵　そりや本性か、後家御どの（ト お高の胸づくしを取つて）、七右衛門殿の死なれてより、年若な身に思ひきつたる二つ髷、七日々々の佛事さへ殘る方なき迫善供養、あつぱれ貞女の鑑ぞと、世間へ行ても四方山の話しの序にこなたの自慢、それがかういふ事あつてと、惡事は千里谷七郷ぱつと浮名のたつ時は、今日の今まで自慢したこの新兵衛が白髮頭を人中へ出されうか、見下げ果てたこなたはなあ。

ト お高を突き放す。とこの中佐五八佛壇より以前の位牌を出し、お高を引附け、

佐五　これ後家御樣、最前何とおつしやつた、髮は剃らねど尼法師墨染を着る心だと、この番頭を耻しめたまだその口の乾かぬ中、墨染を着る尼法師が若衆と不義の色狂ひ、これで濟まうと思はつしやるか、いやさ、淨譽貞林信士といふ夫に對して濟むまいが。いつそのことに、かう〳〵。

ト お高を位牌にて打つ。

せん　こりやあんまりな番頭どの、なんでこなたは後家御さまを、

佐五　打つてもいゝ、たゝいてもだいじない。

せん　家來の身にてお主さまを、

佐五　いや、おれは打たぬ、この位牌に記しある旦那樣が打たつしやるのだ、なんと言分あるまいが。

せん　それぢやというて（ト 悔しき思入）。

お高　あこれおせん控へてゐや、何事もこの身の科、人に恨みはないわいの。

ト これにておせん控へる、與之助思入あつて、

與之　いや申し後家御樣、此の身の科をお庇ひ下され、盗みを不義と言ひなしてお助け下さるお志し、

有難涙がこぼれますが、曇りかすみもないお身にどうまあ科が着せられませう。もし旦那様、何れも様、盗人に違ひござりませねば、後家御様をお助け下され、この與之助に縄かけてお引きなされて下さりませ。

お高　いえ〳〵あの子の言ふのは皆偽り、不義に違ひござりませねば、あの子を助けて私を御成敗なされて下さりませ。

與之　いえ〳〵やつぱり私めを、

お高　いえ〳〵私を、

與之　どうぞ縄かけて、

兩人　下さりませ。（ト兩人にて爭ふ、皆々思入）。

佐次　扨々これは困つたことぢや、どちらがどうやら水かけ論、こりや鎌倉の問注所へ持出さずば分かるまい。

西念　あゝ葬式ならば私が掛り、

同一　お役所沙汰は大家様、

同二　こりやお前様のお掛りだ。

佐次　兎角近所に事なかれ、いつそ忘れてしまひたいものだ。

三太　忘れたくばお茶でも上れ。

新兵　（思入あつて）數代續きし若菜屋の暖簾に關ることながら、内沙汰にては事が濟むまい。

佐五　出る所へ出にや埒は明かぬ。

與之　さうなりましては私が、

お高　濡れぬ前こそ露をも厭へ、もうかうなつた上からは濟むも濟まぬも、入らぬわいなう。

ト與之助を引寄せようとする。

佐五　えゝ舌たるい、（ト立ちかゝるを新兵衛これとへだてる）。

お高　はて、可愛い（ト與之助の手を取るを木の頭）、ことぢやなあ。

ト與之助迷惑なる思入、佐五八又立ちかゝるを新兵衛留める、皆々呆れし思入、此の仕組よろしく、

ひやうし　幕

三幕目

駿河二丁町大黒屋の場
鎌倉稲瀬川御藏下の場

〔役名――小鼠次郎吉後に稲葉幸藏、大黒屋の息子文四郎、船頭乘切り長吉、慾山檢校、悪漢三次、度胸熊、座頭かき市、鼠取りの藥賣り銀次、岩八。大黒屋の抱女松山、槌屋の女房お大等。〕

（駿河二丁町仲之町の場）――木舞臺三間の間常足の二重家體、正面に大槌屋といふ柿の暖簾、上手延喜棚、軒口に大槌屋といふ掛行燈。上の方江戸町と門を半分見せ、この内に用水桶、たそや行燈。下の方路次口、總て駿河二丁町仲之町の態。こゝに槌屋の女房お大女郎の手紙を四五本持ち、下女お仙、若い者千次燭臺の掃除をしてゐる、若い者小助小さな荷物を持ち、禿ゆかり仕着裝にて、立つてゐる。この見得通り神樂、流行唄にて幕明く。

小助　これ、あの子や、花魁にさう申してくんな、麹漬がちつと甘くなり過ぎましたが、お約束だから上げますと、忘れちやアいかねえよ。

ゆか　あい〳〵。

小助　道でつまんで喰ふめえよ。

ゆか　好かねえ小助どんだヨウ（ト荷物を持つて上手門の内へ入る）。

千次　なんの言はないでもいゝことを、道でつまんで喰ふなどゝ、智恵のない子に智恵をつけるやうなものだ。

小助　ほんに、さうだな。

お仙　何故禿衆といふものは、あのやうに意地のきたないものだらうね。

小助　あんまり口奇麗なことは言はれない、お前もよつほど、

お仙　おや、いつ私がつまみ喰ひをしたえ。

小助　誰もしたと言ひもしねえのに、

お大　また喧嘩をするのか、ほんに二人寄ると犬と猿だよ。

お仙　おや、お神さん情ないことをおつしやいますね。

小助　こら犬と猿と言はれたとて、腹を立てなさんな、謂れ因縁のあることだ、何故と言ひねえ、それ茶屋の若い者や女中はお客樣の先に立つだらう、山王樣でも明神樣でも、お祭りの先に立つのは犬と猿だ。

千次　お祭りの先に立つのは猿と鷄だわな。

小助　はあ、犬ぢやなかつたか。

お大　お株でそゝつかしいことばかり。そゝつかしいと言へば初瀬小路の春景樣と、雪の下の梅丸樣へ
この文をお届け申してくんな、間違へてはいかないよ。
小助　なに、生業のことは間違ひはしませぬ、ぜんてぇお祭りも犬だつたと思ふが。あゝそれ〳〵犬と
猿と雉子だつた。
お大　そりやあ桃太郎のお供だわな。
小助　また間違つたか、はゝゝゝゝ。

（ト花道より慾山撿校撞木杖を突き、座頭かき市、小座頭でぼ市附添ひ出來りて、）

慾山　これ〳〵かき市、二丁町の大門を入ると、兩側の茶屋でうまひ香がするな。
かき　左樣でござりまする、玉子燒の香がぷん〳〵としまする。
慾山　むゝこりやなか〳〵感がいゝ、玉子燒の香ひだ。
でぼ　これかき市さん、私や腹が減つてならぬ、早く何ぞ喰はして下さりませ。
かき　今に喰はせるから、辛抱しろ。
慾山　おゝ今朝から飯を喰はせぬから、空腹からう、さあ〳〵。早く來い〳〵。（ト三人舞臺へ來る）。
お大　これは〳〵慾山樣、

三人　よういらつしやりました。
慾山　おゝ、皆變ることもなくて、目出度いな〳〵。
お大　あなた樣も御機嫌よう、
三人　お目出度うござりまする。
小助　さあ、こちらへお上りなされませいな。
千次　どれ、お手を取りませう。（ト三人の手を取り、上へ上げる）、
小助　かき市さん、よくおいでなさいましたね。
かき　今日はお師匠樣のお供で來たから、よい新造を買はして下さい。
小助　畏まりました、よいのを見立て上げませう。
慾山　これかき市、初買ひのこと故、家内の者へ祝儀をやつてくりやれ。
かき　はい〳〵（ト懷ろより風呂敷包を出し、中より二百包を出して）、はい、お師匠樣からの御祝儀、
お大　これは有難うござりますわいな。
小助　おや〳〵御祝儀はたつた二百かえ。
かき　はて、座頭の祝儀は二百にきまつたものだ。

千次　これでも貰はねえよりは優だ。

お大　何にしろ御酒を一つ差上げませう。これ、お肴を早く〳〵。

慾山　あ、いや〳〵その御酒はお預けにしよう。どうで大黒屋へ行けば呑まねばならぬ酒、今呑むのは無駄なことだ。ときにお内儀、このかき市に春のこと故新造を買つてやる積りだが、二朱より安い新造はないかの。

お大　左様でござります、宿場と違ひまして御免の場所の二丁町、二朱より安い新造衆はござりませぬわいな。

慾山　少々引物でもよいが、三百か四百ぐらゐなのはあるまいか。

お大　御冗談をおつしやりませ。

かき　もしお師匠様、二百や三百は出しますから、とてものことによいのを買つて下さりませ。

慾山　おゝ入銀するなら二朱のを買つてやらう。さあ、少しも早く松山がところへ連れて行つてくりやれ。

小助　はい〳〵畏まりました、してその小僧さんは、こちらへおきませうか。

慾山　いや〳〵それは座敷へ一緒に連れて行てくりやれ。

小助　何ぞ御用でもござります故、

慾山　おゝこの小僧を連れて行くは、座敷へ出る臺の物の殘りをこれに喰はせる積りだ。

かき　平生肴といふ物はついに買つたことがない故、かういふ時に小僧なぞに、肴の味を覺えさすのだ。

でぼ　それで今朝からお師匠様が、晩には旨いものを喰べさす故、お飯を喰べるなとおつしやるから、まだ朝のお飯を喰べませぬ故、腹か減つてなりませぬ。

小助　それは嘸おひもじからう。

慾山　その替り、晩には食傷をさせるわ。

でぼ　いえもう旨いお肴でなくともよいから、早く何ぞ喰べたうござりまする。

お大　そんなら小僧さんにはこちらで御飯を上げうわいな。

慾山　いや〳〵、それでは臺の物の殘りを置いて來るのが殘念、

かき　何にしろお師匠様、早う行かうではござりませぬか。

慾山　おゝ早く行つて松山の顔が、見えぬから香をば嗅ぎたいわい。

小助　そんなら直にお連れ申しませう。コウ千次どん、おらあちつと用があるから、お前お連れ申してくんな。

千次　いや、有難いね。

慾山　さあ〳〵、誰でもいゝから、

かき　早く連れて行つて下せえ。

でほ　あゝひもじくつてならない。

千次　どれ、お連れ申さう。

お大　左様なら、いらつしやりませ。

慾山　これは大きにお世話でござつた。

千次　さあ、おいでなさりませ。

ト慾山先きにかき市、でぼ市附いて上手門の内へ入る。

お大　慾山さんにも困るの。

小助　あんなあたじけねえ人はねえ。

お大　然し、あれでなくてはお金ができぬわいな。

ト通り神樂流行唄になり、花道より次郎吉紺の腹掛細のばつち白足袋突かけの草履、羽織尻端折りにて出來る、後より藝者おもん、幇間雀八出來りて、

もんもし、そこへおいでなさるのは、次郎さんぢやァありませんか。

次郎　おゝ、誰かと思つたら雀八におもんか。

雀八　もし、この間狐拳がござりましたさうだが、私や江戸へ行きました、をしいことをいたしました。

次郎　今夜閑なら遊びに來ねえ、二分掛でやる積りだ。

雀八　是非參ります。

もん　狐拳と聞きましては、

次郎　それぢやあ一緒に來ねえ（ト舞臺へ來り）、小助公、どうだ。

小助　これは次郎さん、よくいらつしやいました。

お大　おや次郎さんどうなさいました、きついお見限りでございますね。

お仙　花魁が毎日おたづねなさいますわいな。

次郎　此間から來ようと思つたが、この頃流行る風邪を引いて、十日ばかりくすぶつてゐたが、やうやう風邪もすつかり拔け、湯へ入るやうになつたから、狐拳でもして遊ばうと、こつちの方へ出かけて來たのよ。

お大　そりやあよくおいでなさいました。これお仙、松山さんに早くお報せ申して來や。

お仙　畏まりました。嘸花魁もお悦びでございませう。どれお報せ申してまゐりませう。

ト上手の門の内へ入る。次郎吉腹掛の隠しより金を出し紙に包み、

次郎　こりあ少しばかりだが、お年玉だ。お母あ、皆々にやつてくんな。

お大　これは有難うござります（ト受取り、三人にやり）、こりやあ次郎さんからお年玉。

もん　これは思ひがけないところで、

三人　有難うござりまする。（ト辭儀をする）。

雀八　コウ小助どん、下司ばつたことをいふやうだが、百疋の辭儀は毎日だが、二百疋といふのは減多にないよ。

小助　こりやあ雀八さんの言ふ通り、立派なお客ほど呉れねえものよ、今も慾山檢校から二百の祝儀を貰つたのさ。

もん　それでもお辭儀をにしやあならないね。

雀八　その割をして見ると、十六遍お辭儀をしてもいゝのだ。

次郎　コウおらあ汗が出るぜ、いゝ加減に胡麻をすらねえか。

小助　なに、胡麻ぢやあござりませぬ、

兩人　地金でございます。

兩人　何にしろわざと御酒を、これ小助、奥へ行つてお肴の仕度を、

小助　畏まりました（ト奥へ入る）。

次郎　久しく雀八の聲色を聞かねえの。

雀八　今夜は私の一本鎗、高鳥屋（小團次）をやりませう。

もん　ほんに、雀八さんの高鳥屋は、出たやうでございますよ。

次郎　高鳥屋は眞平だ、おらあどういふものだか嫌ひだよ。

雀八　その癖、次郎さんはよく似てゐなさいますぜ。

次郎　みんながそんなことを言つてならねえ。

ト此中奥より小助口取、刺身の二つ物を廣蓋へ載せ、燗徳利猪口を持ち出來り、

小助　さあ、お一つお上りなさりませ。

お大　松魚でござりますから、お屠蘇はお預り申しまする。

次郎　その事〳〵、下戸と違つて飲む口ぢやあ、屠蘇なぞはちつともいけねえ。

お大　左樣なら、憚りながら（ト猪口をさす）。

お六　さあ、雀八（ト飲んで雀八に猪口をさす）。
雀八　へい、有難うございます。
もん　どれ、お酌をしませうわいな。
　ト捨ぜりふにて酒宴になる。此中上下より鼠取の藥賣岩八、銀次箱を肩にかけ、幟を持ちて出來り、
兩人　いたづらものはゐないな〳〵（ト兩人行合ひ）、
銀次　おゝ、そこへ来たのは岩八か。
岩八　さういふは銀次か、どうだ今日は。
銀次　極く〳〵やだ、まだ三文も取らねえ。
岩八　はて、似たこともあるものだ、おいらもまだ一服も賣らねえ。
銀次　この頃のやうに閑ぢやあ、何ぞ宗旨を變へにやならねえ。
岩八　さうよ、弘法樣の御夢想でも賣らうか。
銀次　何にしろ、晝飯の錢にありつきたいものだ。
岩八　コウ仲之町の兩側を見りやア、門並呑んだり喰つたりして二挺鼓で騒いでゐるに、いたづらものはゐないかと足手ばかりに歩いても、晝飯の錢に困るとは、何と意氣地のねえことではねえか。
銀次　今度の世に生れるなら、錢のあるとこへ生れて來て、仲之町で一ぺい呑みてえな。
岩八　實にこんなことを思ふと、首でも縊つて死んでしまひたいが、こんたもおれも一人身でねえから、死ぬにも死なれねえわけよ。
銀次　こんな愚痴を言つてもうまらねえ、それよりかあ暮れねえ中に、米の錢でも取りてえものだ。
岩八　米の錢を持つて歸らねえと、又嬶と喧嘩をしにやあならねえ。
銀次　違えねえ、そんなら岩公、
岩八　早く歸らつし、
兩人　いたづらものはゐないか、いたづらものはゐないか。（ト上下へ別れ行きかける）。
次郎　おい〳〵、岩見銀山々々。
兩人　はい〳〵（ト歸つて來て）、
岩八　お呼びなさりましたか。
銀次　コウ〳〵おれが前へ返事をしたのだ。
岩八　馬鹿なことを言へ、おれが前だ（ト兩人爭ふ）。
次郎　あゝこれ、爭ふにやあ及ばねえ、二人ながら買つてやるよ。

兩人　それは有難うござりまする。
銀次　一服上げますか。
次郎　何さ、悉皆貰はう。
兩人　えゝ（トびつくりする）。
雀八　もし次郎さん、そんなに藥を買つて何になさいます。
次郎　閑だといふから惣仕舞をしてやるのだ。
兩人　それは有難うござりまする。
次郎　小助や、あの人達に一ぺい呑ましてやつてくんねえ。
小助　畏まりました。さあ、お客樣から下さるのだから、大きいものでやんなせえ。（トお茶碗を出す）
銀次　これは〳〵御酒まで下さるとは有難うござりまする、今もこんだの世には、いゝ衆に生れて仲ゝ町の酒が呑みたいと、申したところでございました。
岩八　これ、早く廻さねえか、のどがぐび〳〵するわえ。
銀次　えゝ忙しない（トよろしく酒を呑む）。
次郎　さうして藥はいくらばかりあるえ。
銀次　はい、悉皆賣りましたら一貫ばかりでございますが、元が山師の藥故幾許でもようございまする。
小助　お前の藥はいくらあるえ。
岩八　なに、私も同じことでございます。
次郎　それぢやめ二人にこれをやつてくんねえ。（トかくしより一分銀を二つ出し、小助に渡す）。
小助　それ、一人前一分づゝだ。
銀次　これは有難うござります。然し、今朝つから商ひをしませぬから、お釣錢がございませぬ。
次郎　なに、釣錢にやあ及ばねえ。
岩八　え、あの、お釣錢まで下さりますとか。
銀次　岩公、こいつあ夢ぢやあねえか。
岩八　何にしろ、有難いことだ。（トこの人箱から藥包を出し）、
兩人　左樣なら、藥をこれへおきます。（トこの上へ積上げる）。
次郎　コウ〳〵待つてくんな、おらあとんだことをした。お前方が閑だといふを氣の毒に思つて、ほんやり買つたが、この藥はしやうがねえ。
銀次　大方そんなことだらうと思つた。

岩八　それぢやあ片方返しますのかね。
次郎　何さ、金はいらねえが、この藥に困るからよ。
雀八　さうさ、齒磨なら湯屋の年玉になるが、鼠取は仕樣がねえ。
小助　藝者衆のことを猫といふから、お年玉に鼠取はどうだね。
もん　若い衆のことを消炭といふから、お前貰つておおきな。
小助　そりや何故ね。
もん　ね、すみとりだからさ。
雀八　とんだこじつけ茶番だ。
次郎　むゝ、いゝことがある、かうせう〳〵。それ、お前の藥をおれが買つて、この人に酒代にやらう、又この人の藥をおれが買つて、お前に酒代にやる。これで兩方商ひをしたやうなものだ。
小助　なるほど、これはよいお裁きだ。
銀次　お金をお貰ひ申しまして、又お酒を頂戴して、
岩八　その上藥をお貰ひ申しますとは、
兩人　こんな有難いことはございませぬ。

お仙　（上手より出來りて）。もし、花魁がきついお悅びで、直にお連れ申してくれと、くれ〳〵おつしやつてゞございますから、直においでなされませ。
もん　それぢやあ、被方へお座敷を替へませう。
次郎　大勢で狐拳としようか。
お大　それがよろしうございます。
雀八　私も直にお供いたしませう。
もん　雀さん、また負腹をお立てゞないよ。
雀八　なに、お前ぢやあるめえし。
小助　然し、誰でも二分掛けぢやあ揉みますよ。
次郎　そんなら行かうか。
三人　さあ、いらつしやいまし。
お大　これ正八や、見世を氣を附けなよ。
岩銀　これは旦那、有難うございまする。
次郎　たんと呑んで行きねえよ。

鼠小僧

皆々　さあおいでなさりませ。

ト次郎吉にお大、お仙、おもん、雀八、小助附いて上手門の内へ入る。岩八、銀次見送りて、

銀次　コウ岩八、あやしい錢の遣ひぶりだな。

岩八　さうよ、何でも堅氣の錢ぢやあねえ。

銀次　おいらの考へぢやあ、鎌倉で噂の高い、(ト岩八に呼く、岩八頷いて)、

岩八　それぢやあ、あの(ト言ひかけるを制へて)、

銀次　これ(ト四邊へ思入あつて)、鼠取請合藥。

岩八　いたづらものはゐないかな。

銀次　ゐたか〳〵。

ト兩人上手へ入る、これにてこの道具廻る。

(大黒屋二階の場)——本舞臺一面の平舞臺、正面中切の襖、上下塗骨障子家體、總て大黒屋二階の態。こゝに慾山檢校、かき市酒を呑みゐる、傍にでぼ市臺重の中より慈姑をつまんで食つてゐる。

慾山　かき市、茶屋の者は誰もゐぬか。

かき　いつの間にかどこへか行つてしまつた。

慾山　客を置きぱなしにして行くとは、ひどい奴等だ。

かき　これでぼ市、そこらへ行つて見て來い。

でぼ　見てと言つたとて、動くことができませぬ。

かき　何をそんなに食つたのだ。

でぼ　これを悉皆喰べてしまひました。

ト臺重を出す、かき市探り見て、

かき　おや〳〵この臺重をみんな食つてしまつたか。

慾山　え、あまり物を喰はせるのだに、あゝをしいことをした。

でぼ　どうも嘔吐しさうだから、今に出るかもしれませぬ。

かき　えゝきたないことを言ふな。

小助(出來りて)　旦那、大きにおそなはりました。

慾山　小助か、どうしたものだ、旨人ばかりおいて、駒のしてがないわ。

小助　それぢやあ藝者衆でも呼びませうか。

慾山　いや〳〵、藝者は呼ぶに及ばぬ、隣りの騒ぎで澤山だ、それよりは早く松山を呼んでくりやれ。

小助　生憎今夜は松山さんは、お馴染のお客が落合つて、名代でございますから、後にお連れ申します。

慾山　また今夜も名代か、流行女郎はこれがいやだ。

かき　さうしておれが買ふ新造は、まだかな。

小助　今お連れ申してまゐりました（ト立つて下手の障子を明け）、さあ、あしかのさんこつちへお入んなさい。

あし　あい（ト胴抜新造の裝にて出來り）、おや、好かねえ旨人だよ。（ト脇を向いて下手へ住ふ）。

小助　さあ、かき市さん、お前さんのお相方をお連れ申しましたぜ。

かき　おゝさうか、どれ〳〵どこにゐる〳〵。

小助　あしかのさん、もつとこつちへお寄りなせえ。

あし　私やアいやだよ。

小助　まあいゝから、お寄りなせえ。（ト無理にかき市の側へ突きやる）。

かき　どれ〴〵（トあしかのを捉へ、顔を撫でようとする）。

あし　あれ馬鹿らしい、何をさつしやるのだよ。

かき　美しいか美しくないか、撫でゝ見るのだ。

あし　いけ好かねえ、わちきやア厭だよ。（トすつと立つて下手へ行くを小助引留める）。

かき　何故、撫でさせぬのだ。

小助　はい〳〵、唯今撫でさせまする（ト下手へ來り）、もしあしかのさん、後生だから、ちよつと撫でさせてやつておくんなせえ。

あし　小助どん、お前もたいがいだよ、なんぼお客が座頭だつて顔を撫でるものがあるものかね、わちきあほんとにいやざますよ。

小助　そりやあ尤もでござりますが、先方が客で撫でたいといふのだから仕方がない、こゝが苦界の勤でございます。

あし　ほんに苦界とはよく言つたものだねえ、嬉しいと思ふ日は一日もありやあしないよ。

小助　さ、そこが苦界々々、どうぞ勘辨して撫でさせておくんなせえ。

かき　これ小助、まだかな〳〵。

小助　へい〳〵唯今直でござります。さああしかのさん、顔をお出しなさい。

あしえゝも、いけ好かねえなう。

トこれにてあしかのつんとしてかき市の前へ顔を出す、かき市撫でゝ見て、

かき　どうも私は感が悪くて、よいか悪いかはつきり知れぬ、お師匠様どうぞ撫でゝ見て下さりませ。

慾山　おゝよし〳〵おれが撫でゝ見てやりませう（トあしかのゝ顔を撫廻し）、こりや止した方がよい、人間にあるべき鼻がないわ。

かき　え、そんなら私の相方は、あの鼻がありませんか。

あし　（これを聞き。むつとして）えゝも止してもおくれ、鼻のない人間があるものか他人様よりはちつと低いが、こゝにちやんとありますよ。（ト鼻をたゝき顔を出す、慾山又撫でゝ見て）、

慾山　なるほど、これが鼻か知らん、なか〳〵ちよつとは知れぬ鼻だ。

小助　あしかのさんは中低で、まことに意氣な顔でござります。

慾山　意氣か野暮か知れないが、今撫でた鼻の様子では、先づ人間には遠いはうだ。

あし　言はしておけばよいかと思ひ、言ひたいがいの出放題、もうお客にはこつちで御免だ（立上り）、小助どん、覺えておいでよう。（ト小助を突倒して奥へ入る）。

慾山　えゝ、わるいからわるいといふに、豪氣に腹を立てをつた。

かき　あれでもよかつたに、をしいことをした。

でぼ（腹の痛む思入にて）かき市さん、あんまり喰べたら腹が痛くなつた。

かき　さうだらう、さつきから食ひつゞけだつたから、

慾山　然し朝飯を喰はせずにおいたから、まだ痛くなる時分ではないが、

小助　何にしろ鍼でもしてやつてはどうでござります。

でぼ　いえ〳〵鍼なら御免なさりませ。

小助　そりや、何故だ。

でぼ　お師匠様の鍼では幾人死んだものがあるか知れませぬ。

慾山　何をこいつが、

かき　なるほど子供は正直だ。

慾山　えゝおのれまでが、

小助　はて、まあよろしうございます、もうお引になさりませ。

慾山　然し、松山が來てくれねばならぬ譯だな。

小助　今に花魁がおいでなさいますから、まあおいでなさりませ。

でぼ　あゝ、痛くつて歩かれない。

かき　こいつはとんだ厄介者だ。

ト小助慾山の手を曳き上手へ入る、下手より大黒屋の息子文四郎に若い者太助附添ひ出來りて、

太助　もし旦那、どうも紛失物があつてなりませぬ。

文四　困つたものだな、昨夜も何か失なつたか。

太助　へい、紙入が一つに、金が三兩見えませぬ。

文四　誰が所爲か知れねえが、こんな噂がぱつとするとつひにやあ樓の衰微になる。お爪にも言附けておいたが手前もよく氣を附けてくれ。

太助　そりやあもう此間から如才なくかんを附けてをりますが、大がい目當はつけました。

文四　むゝ、二階の者か。

太助　左樣でござりまする。

文四　はて、誰がそんなことをするな。

太助　もし誰でもございません、あの松山さんが、

文四　あ、これ、

ト制へて呟く、この模樣、流行唄にて道具廻る。

（松山部屋の場）……本舞臺一面の平舞臺、正面床の間違ひ棚、下手夜具棚、この下黑塗鐘筥、上下折廻し塗骨障子家體、總て松山部屋の態。こゝに座布團の上に次郎吉胡座をかき火鉢にあたりゐる。此の前に酒肴を取散し、雀八とあしかの拳をしてゐる。傍におもん三味線を彈き、お大お仙、ゆかり居並びゐる。

もん　さあ〳〵これから二丁目（市村座）の芝居でした、狐拳をなさいましな。

雀八　ほんに、あれがいゝ、ちよつと彈いてくんな。

もん　あい〳〵。

トおもん三味線を彈く、狐拳の唄になり、あしかの雀八よろしくあつて雀八勝つ。

雀八　あゝ有難い、勝つたものにはお纏頭の御褒美。

次郎　それ、雀八がまた勝つた。

雀八　もう一番勝たにやあならねえ。

あし　後生だから負けておくれよ。

次郎　いや、弱い音を出したな。

あし　それでも私やア悔しいもの。

もん　悔しいよりは御褒美をたんと貰つてその中で、

せん　彼人を一晩呼ぶ積りだらうね。

あし　なあに、鰻飯を腹一ぱい喰べたいのさ。

せん　おや〳〵、色氣のないことを、

あし　どうで色氣の方は難しいから、喰氣のほうさ。さあ〳〵何でも今度は勝たにやあならない。あゝ息が切れる、これゆかりや微溫くして、お茶を一ぱい持つて來てくんな。

ゆかあい――（ト奥へ入る）。

あし　さあ〳〵雀八さん、もう一遍おいで（ト又狐拳をする、此時小助出來りて）、

小助　まあ〳〵待つておくんなせえ〳〵、先刻から來たくつてうづ〳〵してゐるのを、慾山檢校に引つかゝつて、二分取らねえで二百損した。さあ〳〵私を入れておくんなせえ。

あし　まあ〳〵、私が二分取るまで待つておくれ。

小助　どうして〳〵、駈付三番は當然だ。

もん　それぢやあ一人勝一人負として、三人勝負となさいましな。

小助　それがいゝ〳〵。

三人　よい〳〵〳〵。（ト三人よろしくあつて、小助勝ち）、

小助　やれ有難い、二分有附いた。

あし　えゝいめえましい、鰻飯を喰ひそこなつたか。

（ト流行唄になり、奥より松山胴抜紋附裏襟の褄滿にて出來り、）

松山　次郎さんよく來ましたね。

次郎　おゝ松山か、豪氣に勿體を附けたな。

松山　なあに、湯に入つて來たのだわね。

もん　花魁も久しぶりの次郎さんだから、奇麗にしてお見せなさる積りさ。

あし　然し、これより奇麗にしやうはありますまい。

松山　なんぼ私が新參でも、そんなにおだてゝくんなますな。

お大　なんともうお片附としてはどうでありませう。

あし　ほんに、花魁も話があらう。

小助　舊い奴だが、仲人は宵の内、

せん　お開きとしませうね。
松山　まあいゝぢやありませんか。
雀八　花魁、痩我慢をおつしやいますな。
小助　腹の中に箒を立てゝおきなすつて、
松山　當てられましたかね。
次郎　松山も口が悪くなつたの。
もん　次郎さんのお仕込だから、
次郎　なあに、おらあ無口だ、
あし　あんまりさうでもありますまい。
お大　そんなら次郎さん、又明朝、
もん　花魁お樂しみで、
皆々　ござんすね。

ト皆々どか〳〵と下手障子家臺へ入る。松山後を見送り思入あつてつか〳〵と次郎吉の側へ行き手を執る。

松山　次郎さん、逢ひたかつたわいな。
次郎　えゝびつくりした。
松山　それぢやあ、側へ寄つては悪いのざますか。
次郎　なに、悪くはねえが氣が揉めらあ。
松山　氣が揉めるとはえ。
次郎　いつの間にかこんなに手が出來たかと思ふと、誰にでもさうだらうと癪に障るよ。
松山　馬鹿らしい、誰にそんなことをするものかね。
次郎　するかしねえか番をしちやアゐめえし、
松山　そりやあ私の方で云ふこつてありますよ。どんなところに情人があつて熱くなつて行きなますか知れることぢやアありませんよ。
次郎　そんな株はこつちにはねえ。
松山　あんまりないこともありんすまい。（ト次郎吉をつめる）。
次郎　あいたゝゝゝ。
松山　誰にあひたいえ。

鼠小僧

次郎　おぬしによ。

松山　嬉しうありますよ。

次郎　（松山をぢつと見入つてゐて）、あゝ水の流れと人の末、かうも移り替るものか、

松山　なんざますえ。

次郎　今更言ふも愚痴つぽいが、おぬしが家は雪の下で若菜屋といふ質兩替、立派な家のお嬢さんが、心がらとは言ひながら故郷を離れて苦界の勤め、かういふしがない身になつた元はと言やあ去年の正月、忘れもしねえ江ノ島の初の巳待に夷屋で落合つたのが縁の端、最初はへだてた襖越し話の合つたが縁となり、後前見ずに引つぱらひ上方筋へ出かけたところ、堅い親御に直に勘當、その罰故にこの駿河で半年あまりのおれが煩ひ、宿屋の借金や醫者の禮金、見兼ねておぬしが苦界の勤め、通常の身でゞもあることか丁度あの時三月四月、それも世間に鬼はなく、この親方の親切に見世を引かして産み落させ、藁の上から里にやり、人の噂も七十五日日數が立つて出ると聞き、亭主を隱して登樓るのも、せめてその晩一晩でもおぬしに樂をさせよう爲め、ついうかゝと去年の春から二年越し、三年まではおかねえから、もう半年か一年だ、どうぞ辛抱してくれよ。

松山　ほんに、私がかういふ身になりんしたを、人さんが嘸笑ふことでありませうが、これもみんな好好から、どうでかうなる上からはそりやもう二年が三年でも、私や辛抱してゐるから、その替りにはお前もまた浮氣をしてくんなますなよ。

次郎　なんの附にするものかな、してえと言つても外にやあ出來ねえが、おれと違つておぬしやア又僅一年經つか經たぬに、以前に替る廓言葉、そのあだつぽい動作ぢやあ誰でも熱くならにやあならねえ。長い月日のその中にやあ心變りでもしようかと、取越し苦勞に鎌倉へ歸るもなんだか心がかりだ。

松山　なんだなお前も愚痴つぽい、私の心を知らないぢやアありんすまいし、實はお前より私の方が、鎌倉へ歸すのが厭ざますから、歸らずにゐてくんなましよ。

次郎　それだといつて歸らにやあ、おぬしの年季のぬきやうがねえ。

松山　そりやもう年季は拔けずとも、お前故なら增してもいゝから、どうぞ此方にゐてくんなましよ。

次郎　さう氣休めを言はれると、又歸るのが厭になりあ。

松山　私にばかり氣を揉ませ、ぬしは何とも思ひなんせんから、實に悔しうざます。

次郎　なに、氣を揉まねえことがあるものか、氣が揉めるから歸るのだ。

松山　ほんたうざますか。
次郎　嘘言をつくのは大嫌ひだ。
松山　嬉しいねえ。
　　ト此の時若い者太助出來りて、
太助　もし、花魁明けてもようござりますか。
松山　太助どん、何だえ。
太助　次郎さんにお目にかゝりたいといふお人が、二人參りましたがお連れ申しても、ようございますか。
次郎（思入あつて）なに、おれに逢ひたいとは誰だ。
太助　何だか風體の惡い人達でござりまする。
松山　そんな人なら、ゐないと言へばよかつたに、
太助　さう申しましたけれど、お聞きなされませぬ。
次郎　はて、おれに逢ひたいとは誰だ知らぬ。
　　ト此時下手にて、『誰でもねえ、私でござります』と早乘三次の聲して、三次と度胸熊出來る。太助は

奥へ入る。次郎吉二人をぢろりと見て、
次郎　ついぞ見たこともねえ、お前達は、
三次　私やあ、この近所のびいつくでござりますが、
熊　次郎さんといふ名を聞いて、近附になりに來やした。
次郎　そりやあよく來なすつた。あゝ呑過ぎた故か、頭痛がするやうだ。（ト少し横になる）。
松山　ちつとたゝいて上げようか。
　　ト松山次郎吉の頭をたゝいてゐる、兩人これを見て思入、熊わざと腹を立ちし思入にて、
熊　なんだ〳〵こいつらあ途方もねえ、こちとらあ何だと思やあがる、たゞのびいつくだと思やがると當が違ふぞ。今でこそ宿場のごろつき、元は鎌倉谷七郷の役屋敷は言ふに及ばず、十人火消に遊んでゐても、据膳で飯を食ふ株だ。質屋の使ひや鹽増の世話をするとは譯が違はア、何で寢てゐて挨拶するのだ、途方もねえ奴等ぢやあねえか。（ト大きな聲をするを三次留めて）。
三次　これさ〳〵大きな聲をするなえ、ぬしやあ鎌倉でいゝ男ださうだから、こちとらあ何だとも思やあしねえ。いゝ男ならいゝ男のやうに話が分かるだらうから、まあ靜にしやな。（ト思入あつて）、もし次郎さん、ちよつとお顏を貸して下せえ。

次郎　なんだか知らねえが、其處で言ひねえ。

三次　えい、私等あこの府中の宿にごろついてゐるもゝんじいでござりますが、お前さんをいゝ男と見かけてお願ひがあつてめえりやした、どうぞ聞いておくんなせえな。

次郎　そりやあ何だか知らねえが、出來ることなら聞きやせう。

三次　そいつあ有難うござります、お禮から先へ言ひやすが、どうぞ私等二人の頭へ、四五十兩貸してお貰ひ申したい。

次郎　松山、とんだ定九郎が出て來たな。

松山　さうざますね。

次郎　コウ、ついぞ今まで逢つたこともねえお前方、なんでおれに貸せといふのだ。

三次　借りてもいゝから、

兩人　借りに來たのだ。

次郎　なに、借りてもいゝとは、(ト起直る)。

三次　きら几帳面の遊び人なら、こんなことを言ひにやあ來ねえが、

熊　勾引だから借りに來たのだ、

次郎　なに、おれを勾引だと、

三次　しらばつくれた顏をするなえ。

熊　その松山はどこから連れて來て、

兩人　この二丁町へ賣つたのだ。

次郎　どこから連れて來るものだ、鎌倉から連れて來たのだ。

三次　そりやあ鎌倉から連れて來たらうが、親も得心しねえ娘を、汝ア引ぱらつて來やあがつて賣つたからにやあ勾引だ。

熊　かういふ仕事をするならば、めりを出しておいてしろ、外土地から來やあがつて、こんな旨え仕事をされちやあ見逃しにならねえ。

三次　あんまり人を江戸馬鹿にするな、手前達に痴にされる奢碌ぢやあねえ。さあ、長い短いは言はねえ、四五十兩貸して下つし。

ト言つても次郎吉は煙草を喫みゐる。松山思入あつて。

松山　なんざます、お前方はそんな大きな聲をして、まあ靜にしなまし。太助どんもなんでこんな衆を上げたんだらう。

三次　何で上げるものか、女郎を買ひに來たのだ、二朱出しやあお客様だ。

熊　襤褸ァ着きゐても、物貰ひや乞食ぢやあねえぞ、御大層なことをぬかしやあがるな。

三次　さあ次郎さん、お前もいゝ男ださうだから、器用に金を、

兩人　貸してくんねえ。

次郎　いやだ。

兩人　なに、いやだと。

次郎　汝等に貸す金はねえ。

兩人　どうしたと、

次郎　そりやあ遊び人の交際だから、見ず知らずの者だらうが、かういふ事情で困るから貸してくれろと轉げ込まれりやあ、鍋茶釜から竈の金物までも引ぺがし、質においても貸してやるが、こりやあ無賴漢の交際だ。手前達も直素直に貸せといふなら貸しもしようが、勾引しだと肩書をつけられたら二朱も貸せねえ。なるほど手前達のいふ通り、この女は雪の下の質屋の娘、おれと逃げたばつかりに勘當受けたあの松山、親子の縁が切れてしまやあ、天から拾つたおれが女房、得心づくで賣つた身體、なんでこれが勾引だ、そりやあ旅先他國へ乘り出してごろついてゐるからにや

あ、かわを打つ氣でめりも出さうが、こんな脅しをかけられちやあ缺けた錢も出せねえから、勾引なら勾引を砂利の上へ持つて出ろ、見かけはけちな小野郎だが、びくりともするのぢやあねえ。

（卜茶碗を取つて）松山一ぺい注いでくれ。

松山　冷たくなりんした（卜注ぐ）。

次郎　あ、ちつと多かつた。

松山　お待ち、助けて上げるから。

卜次郎吉の茶碗の酒を呑む。此中三次、熊出損つたといふ思入あつて、

三次　もし親方、眞平御免なせえ。お前さんにこんなことを言ふのも素面ぢやあ言ひ悪いから、蛤鍋で二合づゝお神酒を上げて來やしたから、つい申し過しをしやした。

熊　お氣に障つたらうが、親分、酒の上の言過だからどうぞ堪忍しておくんなせえ。

三次　實は私等も鎌倉の者でござりますが、筋の悪い早乘で御牢内へ行くところを、友達が助けてくれて、とんだ昔噺だが山を越して川を越して二丁町の近所へ來て、ごろついてゐやすが、何を言つても狹いところ大概諸方塞げてしまひ、上方へでもつッ走らうと思ふ所へこの話し、こいつを種に强面で、二兩と三兩路用を借り、出かける積りの出來心。

熊　ぜんてえ私がこれよりやあ、打ッつかつて親分に借りた方がよからうと言つたのを、この野郎が、なにそれよりやあ脅しをかけて借りるはうが近道と、ぼんの高い親分に日先の見えねえ今夜の仕末、もし花魁、どうぞお前さんから親分へよろしくお詫をして、

兩人　おくんなせえ。（ト窮屈さうに座り詫びる、次郎吉、松山思入あつて）、

松山　もし次郎さん、あの衆があのやうにあやまりんすから、堪忍しておやんなんしな。

次郎　むゝ（ト兩人に向ひ）、そりやあお前方がさう言ひなさりやあ、なに私だとつて初春早々こぶを出してえことはねえ。然しこれが鎌倉なら器用に金も貸してえが、何をいふにも去年から私も旅へ踏出して、ちつと懐が寂しいから思ふやうにやあいかねえが、これを取つてくんなせえ。

ト腹掛の隠しより金を出し四ツ折の半紙で捻り放り出す、兩人取つて、

三次　そんなら、それを貸しておくんなさいますか。

兩人　こりやあ有難うござります。（ト言ひながら明けて見てびつくりなし）

三次　や、こりや十兩、

次郎　少なからうが不肖して下つし。

三次　とんだことを言つたものだ、五兩づゝぢやあ十分過ぎます。

熊　見ず知らずのこちとらに、まとまつた金を貸して下さるとは、親分びつくりしました。

三次　同じ遊び人のごろつきでゐても、親分とこちとらあ、雑兵と大將ほど違ふな。

熊　違えねえ、ほんに遊び人の大將だ。

次郎　近い中においらも又鎌倉へ歸るから、お前方も出て來たら小遣錢位は上げようから、必ず尋ねて來てくんねえ。

三次　有難うござります。

熊　是非お禮ながら上ります。

三次　それぢやあ、喰べ立ぢやあねえ、貰ひだちにお暇いたします。

次郎　まあいゝやな、一ぺい呑んで行きねえな。

三次　有難うはござりますが、花魁の邪魔になりやすから。

熊　お貰ひ申しましたこのお金で軍鶏鍋へおし上つて、一ぺいづゝやつて行きます

次郎　それぢやあ、お前方が心任せにしねえ。

三次　左樣なら、親分、

熊　花魁、

兩人　大きに有難うござりました。（ト兩人小腰をかゞめ下手へ入る）。
次郎　忌えましい、しみつたれな奴だな。
松山　ほんに、好かない人達だねえ。
次郎　そりやあいゝが彼奴等のお蔭で、鎌倉へ歸る路用の金をちやあふうにしてしまつた。
松山　それぢやあお前お困りだらう、どうにかしてあげようか。
次郎　手前算段ができるか。
松山　今夜來てゐる檢校を騙して、金を借りて來る積りさ。
次郎　止せよ、眼の見えねえものを可哀さうに、
松山　なあにまことに邪慳な高利貸だから、ちつと位はようざますよ。
次郎　それぢやあ十兩ばかり借りてくれ。
ト此時下手よりあしかの出來りて、
あし　もし花魁、お爪どんがやかましく言つてゐますから、檢校さんの所へちよつとおいでなんし。
松山　あい、今行く所だが、これあしかのさん、次郎さんには二階中で皆々が思ひついてゐるから、番をしてゐてくんなよ。
あし　あいゝ、私がきつと番をしてゐます。
松山　どれ、苦界の勤めをして來ようか。
ト流行唄になり松山下手へ入る、次郎吉後を見送りて、
次郎　朱に交はれば赤くなると、僅半年か一年で豪氣に女郎じみて來た。
あし　ほんに花魁は、昨日今日のやうぢやありませんよ。
次郎　手前が仕込むからだ。
あし　おや、いやだねえ。
次郎　なに、いやなことがあるものか、それに違えねえからよ。
あし　あれ、そんなことを言つていぢめなんすと、花魁に言ひ附けんすよ。
次郎　言つ附けるなら言つ附けろ。
あし　あれ、次郎さんがいけませんよう。
ト次郎吉あしかのにからかふ、この見得にてよろしく道具廻る。
（廻し部屋の場）――木舞臺やはり平舞臺、上下やはり塗骨障子家體、中央に丸行燈あり、總て二階

廻し部屋の態。と、下手より松山出來り思入あつて障子を明ける、内に慾山夜着をすつぽり冠つてゐる心にて、枕元に紙入あること、松山傍へ寄り、

松山　もし慾山さん〳〵寢なましたか。（ト思入あつて）、あゝ濟まぬことではあるけれど夫と思ふ次郎さんが路用の銀に困ると聞き、道ならぬとは知りながら、今宵に迫るお金の入用、心を鬼に、さうぢや（ト障子をそつと明けて内へ入り、紙入を持ち出來り）、勤はすれど次郎さんに情をば立つてついに一度お客に下紐解かぬ故、馴染で通ふ人もなく紋日物日も皆自前、その苦しさに恐ろしい怖い心になつたのも、戀に迷ひし私が因果。もし慾山さん、どうぞ許して下さんせ。

文四　花魁、待ちな。

松山　え（ト文四郎を見てびつくりし）や、慾山さんと思ひしに、お前は樓の若旦那、

ト面目なき動作にて逃げにかゝるを文四郎留めて、

文四　ちよつと話したいことがあるから、こゝへ來なせえ。

松山　いゝえ、私や。

文四　さうでもあらうが、まあこゝへ。

松山　さあ、

文四　はて、來なせえといふに。

松山　はい。（ト是非なく下にゐる。文四郎煙草を喫みながら）、

文四　口ばし青き身をもつて小癪なことゝ思ふのも、百も合點二才の身で意見をするもおぬしの爲め、又二つには樓の爲め、聞けば以前は鎌倉で、立派な家の娘ださうだが、思案の外の色戀で故郷を離れ旅の空、歩きなれねえ山坂に杖とも思ふ男の煩ひ、苦勞するがのこの廓へそのたゝまりで苦界の勤め、心からとは言ひながら世間知らずの懷子、不便なことゝ思ふから、辛い勤めの樂しみに、亭主と知つて惡足を客にさしておくのも情、それも一つはこつちの見當、素人ながら押出しは一と言つて二丁目につゞく者のない容姿、廓馴れたならおぬし故外の者まで賣れようと盛り待つ間の花に風、惡い噂の枕捜し、男の爲めでもあらうけれどこの評判がぱつとすれば、言はずと知れた客も散り、おぬしに連れて外の者まで賣れなくなるは知れたこと。金が入るなら十や二十はいつ何時でもやらうから、惡い心を思ひきり少しはこつちの氣も汲んで、厭でもあらうが、そこが苦界のちつと勤を精だして、爲になつてくれたなら五年の年季は三年でも、損せえいかにやあ證文を卷いて身儘にさせようから、金で買はれた身體とあきらめ、もつと精を出してくりやれ。

おぬしなぞにこんなことをまだ言ふ株は來ねえけれど、親父のせりふを聞きかぢり死んだ兄貴が似ぬ聲色、聞き難からうがこれ花魁、どうぞ聞いてくんなせえ

トよろしく思入にて言ふ。松山面白なき動作にて、

松山　勤めの身にて大膽な盗みをするもお叱りなく、御親切なるその御意見、身にしみ〴〵と勿體なく、いつそ消えてしまひたうざます。

文四　つまらねえことを言つたものだ、金で抱へた大切の花魁、消えられてたまるものか。

松山　そりやもうさうでもありませうが、どうもこのまゝ、

文四　はて、外に誰も聞いてはゐねえ、おぬしせえだまつてゐりやあ何でおれが言ふものだ。

松山　そんならどうぞ今夜のことは、

文四　言はず語らずこの場限りさ。

松山　左樣なればこのお金を（ト財布を出す）

文四　いや、その金はやつたのだ。

松山　それではどうも、

文四　氣の毒だと思ふなら、精出して勤めてくりやれ（ト言ひながら立上る）。

松山　はい（ト思入）。

文四　いや、慾ばつたやつよなあ。

ト唄になり、文四郎思入あつて奥へ入る。松山金をいたゞく、此の時上手の家體より次郎吉出來りて、

次郎　かう見たところが、まだ年は若いが、利口な息子だなあ。

松山　や、お前は次郎さん、いつの間に、

次郎　さつきから次の間で、息子の意見を聞いてゐた。

松山　えゝ（トびつくりなし）、それ聞かれたら、（トつか〳〵と行くを次郎吉留めて）、

次郎　これ松山、どこへ行くのだ。

松山　お前にどうもこの顔が、

次郎　合はされぬとは、枕捜しか。

松山　さあ、それと知れては定めし愛想が、

次郎　何で愛想が盡きるものだ、枕捜しもいはゞおれ故、素人と違つてその心がありやあ、猶更頼もしい。

松山　盗みせし身をお前には、頼もしいとはどういふ理で、

次郎　理といふのは外でもねえ、今日の今まで包んでゐたが、實はおらあ盗人だ。

松山　えゝ、(トびつくりする)。

次郎　かう聞いたらおれよりやあ、松山おぬしが愛想が盡きよう。

松山　そんなら次郎さん、あの、お前も、

次郎　さあ、小兒の折から手癖が悪く、人の物は我が物と盗みはするが今日が日まで、邪曲非道なことはせず、盗んだ後でその家が戸でも閉しやあその金へ利息を附けて返す心、それ故町より大名の金を盗むが上分別、どんなひつてん屋敷でも、まさか百や二百の金で家の潰れることはねえから、鎌倉山の大小名和田北條を始めとして、佐々木、梶原、千葉、三浦、當時一萬別當の工藤なぞへは二三度入り、千と二千の仕事をしたが、その替りにやあ貧乏とその名も高い曾我なぞぢやあ、盗んだ金をおいて來た。悪事はするが義理堅え言はゞ野暮な盗人だが、知らぬ前は兎も角も、かういふ身性と聞いたなら、此の頃世間の流行詞、おぬしやあ厭になりやあしねえか。

松山　何で厭になるものかね、これも皆々その身の好々、お嬢さんと言はれるのが小さい時から私は嫌ひ、油で固めた高髷も潰しの島田に結ひたい願ひ、御殿模様の文字入りより二の字つなぎの寛衣が着たく、御新造さんや奥さんと呼れるよりも、家のやつ家の人にと言ひたさに、親をば捨てゝ勘當受け、お前の女房になつた私、どんなことがあらうとも何で愛想が盡きようぞいな。

次郎　そんならおぬしやあ盗人と知つても、やつぱり愛想も盡かさず、

松山　お前と一つにゐたいのは、警にも言ふ似た者夫婦、

次郎　夜盗を働く鬼の女房に、

松山　枕さがしの鬼神とやら、

次郎　さういふおぬしが度胸なら、明日が日露れて縄目に逢ひ、

松山　お上のお仕置受くればとて、

次郎　際行く駒の二人連れ、

松山　二本の鎗の二世かけて、

次郎　離れぬ仲の紙幟、

松山　里は野末に身を捨札、

次郎　思へば果敢ない、

両人　身の上ぢやなあ。(トよろしく思入。時の鐘)。

松山　かうなるからはもし次郎さん、今夜こゝをこつそりと、連れて逃げて下さんせ。

次郎　そりや又なんで、

松山　枕捜しを知られし上は、どうもこゝにはゐられぬ仕儀、

次郎　なるほど、そりやあ尤もだが、この親切な親方へ、損をかけるが氣の毒だ。

松山　それも後から身の代へ、仔細を書いてお詫をしたらお許しなされて下さんせう。

次郎　むゝ、義理の悪いも僅な間。然しこれから夜の中に廓をぬけて急いだら、宇都谷峠が夜明前、

松山　その宇都谷といふところは、たしか去年文彌といふ、

次郎　むゝ、座頭がむごく殺されたとこだ。

松山　そんならそこを、

次郎　明けねえ中に、

太助　（この時出て來て）、樣子は聞いた。（ト出るを、次郎吉突廻して投げ退ける）。

次郎　仕度をしやれ。

松山　あい。

ト太助起上つて又かゝるを次郎吉引附け、灯を吹消す。時の鐘。松山は帶をしめなほす。この見得にて道具廻る。

（大黒屋塀外の場）――本舞臺一面忍び返し附の黒塀、見越の松。上の方に二階家、二十日の月出でる。と時の鐘にて、ぱつたりと音して二階の格子を打ちこはして次郎吉出で、家根傳ひに見越の松に扱帶を結び、ひらりと飛びおり四邊を窺ふ、その後より松山出で、下を窺ふ。

次郎　松山か、

松山　次郎吉さん、

次郎　扱帶を結んでおいたから、それを便りに飛びおりろ。

松山　あい。（ト庇へ出ようとすると、後へ文四郎出て抱留め）、

文四　松山、どこへ行くのだ。

松山　え、若旦那か。

ト振拂ひ飛びおりようとするを引戻し、内へ入れて引附け、

文四　こりや情を仇で返す氣だな。

松山　堪忍して下さんせ。

次郎　（上を見て）、南無三、見咎められたか。

ト此の時下手より鼠取藥賣り銀次、岩八出來りて、

兩人　捕つた（ト次郎吉にかゝるを立廻る。二階にては松山の振切らうとするのを文四郎支へて）、

文四　めつたにおぬしは、逃がしはしねえぞ。

ト立廻つて障子をぴつしやりしめる、これと同時に銀次、岩八の兩人は次郎吉を捻じ伏せ、早縄をかける。とどろ〳〵になり、このまゝ三人迫下がる。上へ心といふ字の板を引いて取り、黒塀を打返して草土手の石垣となり、その下は波の模様となる。中央に土手より匐ひ出し松の大樹あり、後方は土蔵の屋根を見せし遠景、舞臺の前方は河の心。總て鎌倉稻瀬川御蔵下の態となる。波の音になり、上手より中に蒲團を冠りて寝てゐる客を乘せたる舟現はれ、舳頭乘切りの長次艪を押して出來り、

長次　やい〳〵どうするのだ、どうするのだ、一本突つ切らねえか、えゝどぢな奴だ。とりかぢイ。

ト舞臺の中央へ來る。その時薄きどろ〳〵にて蝶二羽小舟の中へ消える。

お〻日那は夢でも御覽じたか、大そうな魘されやうだ。もし〳〵日那え〳〵、お眼をお覺しなさい、夢でも御覽じましたか。

トこれにて蒲團をはねのけると、内より稻葉幸藏起上り現はれて、

幸藏　そんなら、今のは夢であつたか。（トほつと思入）。

長次　もし旦那、大そうな魘されやうでござりましたぜ。

幸藏　さうだつたらうよ、ぴつしよりになつた。（ト思入。長次は裏向になり艪の早緒をなほしゐる。幸藏行火を出し、煙草をのみながら）、思ひがけねえ五年あと、駿河で別れた松山をあり〳〵見たは、日頃からどこにどうしてゐることか忘れぬ胸に五臓の煩ひ、ほんに夢とはいひながら、正直過ぎた松山が心にもねえ枕探し、とんだことをば見るものだ。然しこれが正夢なら、油斷のならねえ鼠取り（ト煙管で船の小縁を打つ、と雁首の落ちし思入）、南無三、煙管の、（ト河へ思入）。

長次　もし、雁首が落ちましたか。

幸藏　えゝ、初春早々、（トびつくりし、氣にかゝる思入）。

長次　とんだことをなさいましたね。

幸藏　これもこの身に重なる罪、どうで仕舞ひは、

長次　え、

幸藏　輕くはいけねえ。

ト殘つた吸口を河の中へ打込むを木の頭、

長次　おもかぢイ——。

ト櫓を押す、幸藏心にかゝる思入にてよろしく波の音にて、

ひやうし　幕

四幕目　滑川稲葉内の場

〔役名――ト者平井左膳、實は稲葉幸藏、松田の若徒本庄曾平次、左膳弟子左内、醫者山井養仙、山女衒權次、松葉屋の若い者喜助、お元弟三吉。松葉屋の松山實は若葉屋の娘お松、お熊婆、松田の乳母おふと、主膳娘おみつ、松葉屋の禿みどり實は松山娘おみつ等〕

（稲葉幸藏宅の場）――本舞臺三間の間常足の二重家體、正面更紗の暖簾口、上手に地袋戸棚、この上に本箱、上の方に障子家體、二重に唐机、その上に算木、筮　易書を積み、更紗の座布團を敷きあり。いつもの所門口。下の方一面に雪の積りし建仁寺垣。總て稲葉幸藏隱家の態。こゝに左膳の弟子左内行燈の傍に机に向ひ筮を持つてをり、傍に山井養仙、木舞臺に若い者喜助二人の中間と共に控へてゐる、この見得雪おろし鞠唄にて暮切く、

山井　ときに、先生のお歸りにはまだ間がござらうかな。

左内　左樣でござります、何處へ參るとも申されずに出られましたから、歸りのほどは知れませぬ。

山井　はて、それは困つたな、先生に見て貰はねばならぬ事がござるが、

左内　私でよくば見てあげませうか。

山井　いや〳〵、お代脈では安心ならぬ。

左内　これは御挨拶。してお前方はどうだな。

喜助　先生に見て貰ひたいと申したいか、お歸がおそいとあるなら、お前さまでもいゝ見て下さりませ、

左内　でもとは、失禮千萬な。

喜助　これは粗相を申しました。

三人　眞平御免下さりませ。

左内　なにさ、詫るには及ばぬが、して見てくれとは何でござるな。

喜助　へい、私どもは大磯の松葉屋の若い者でござりますが、松山といふ花魁が駈落をいたしましたが、どつちの方へまゐりましたか、方角を見てお貰ひ申したうござりまする。

左内　左樣でござるか（ト筮を取り）、けんげんこうりてい〳〵（ト筮を算へ算木を置く）。

山井　いや、そこな若い衆、愚老も物を尋ぬるのだが、この大雪では難儀でござるな。

喜助　はあゝ、お醫者樣にもお尋ねものでござりまするか、

山井　いかにも、昨日藥籠と家來を一人何れへか忘れてまゐつて、今に在所が知れぬ故、先生に見て貰はうと、わざ〳〵これまでまゐつてござる。

喜助　それは嘸お困りなされませう。

左内　然し、春でようござるな。

山井　何故でござる。

左内　鞠唄に唄ひますぜ、醫者は醫者だが藥箱持たぬ。

山井　何を言はつしやる。

喜助　もし、そんな冗談を言はずと、しつかりと見て下さりませ。

左内　なに、冗談は冗談、生業は生業（ト言ひながら算木をならべ）、怖いものだ、宅來隨と易に出た、即ち宅は内なり來は來る、隨は隨德寺の隨なり、松山といふ花魁が隨德寺をしたらうが、宅來でき

つと家へ來るから案じなさんな。

喜助　それは有難うございます、さうしてどつちの方を尋ねませうな。

左内　先づ西南を探さつしやい、それで知れずば東北を探したらよからう。

喜助　それぢやあ東西南北を探すのだね。

左内　その方角には是非ゐるだらう。

喜助　有難うございます。見料はいかほどでございますな。

左内　大道では二十四孔だが、宅判斷は百孔でござる。

喜助　（財布より當百を出し、紙に包みて）左樣なら、これへおきます。

左内　もし知れたら禮に來さつしやい。

喜助　きつと上ります。（ト三人門口へ出て）、

若一　コウ喜助さん、お前も大概だぜ、東西南北にゐねえ奴があるものか。

若二　あんなつまらねえ判斷を聞いて、百出すとはうんのろだぜ。

喜助　そりやあ喜助だ、如才はねえ。通川しねえ燒錢があつたから、紙へ包んでおいて來たのだ。

二人　そいつあいゝ氣味だつたな。

喜助　ト占を見た積りで、正物で蕎麥でも喰つて行かう。（ト財布より天保錢を出し）、南無三、燒錢と間違つた。

二人　それぢやあ百錢取られたのか。

喜助　えゝ、忌えましい（ト三人花道へ入る）。

左内　何と先生御覽じたか、出たらめを申しても、百孔になるて、

山井　貴殿の辨舌感心いたした、愚老なぞも病家にて耆婆扁鵲が配劑などゝ申すが、内證は藥種屋で買ふ葛根湯でござる。

左内　何れも藥屋はそんなものでござる、はゝゝゝゝ。
山井　ときに、先生のお歸りまでお座敷を借りたいが、よろしうござらうかな。
左内　よろしうござるとも、奥へまゐつてお待ちなさい。
山井　それは忝い、實際は昨夜夜通しに歩いたので、眠くてならぬて。
左内　御遠慮なく、お休みなさるがいゝ、
山井　然らば御免下されい。

ト奥へ入る。と花道よりお熊婆下駄がけにて褄を端折り、主膳の娘おみつ黒の頭巾を冠り、安下駄を穿き相合傘にて出來り。後より山女衒の權次大黒傘をさし出來りて、

權次　おい〳〵、そこへ行くのは月の輪のおつかあぢやあねえか。
お熊　むゝ、誰かと思つたら山女衒の權次か、いつ鎌倉へ出て來た。
權次　二三日後に鴻の巣の三河屋の旦那と出て來たが、お母あいゝ玉はねえかの。
お熊　あるよ、極くいゝのがある（ト顔でおみつへ思入）。
權次　ずつと踏めるね。
お熊　後に話をしようから、もうちつとして來てくれ。
權次　あい〳〵出なほして來ます。ときに兄貴は達者かえ。
お熊　相變らず堅藏で困るよ。
權次　ぜんてえ、盗人にやあ、いやさ、ぬしは堅い人だの。
お熊　えゝ口數利かずと、早く行きねえ。
權次　それぢやあお母あ後に來るよ。（ト引返して入る）。
お熊　これはお孃さん、お待遠でござりました。
みつ　いえ〳〵待遠なことはござりませぬ。さうしてお前さんのお家はえ。
お熊　つい彼方でござります。さ、轉ばぬやうにおいでなさりませ。（ト本舞臺へ來り門口にて）、あい、今歸つたよ。（ト内へ入る）。
左内　これはお袋さん、嘸お困りなすつたらう。
お熊　さあお孃さん、こつちへお入りなさりませ。
みつ　左樣なら御免なさいまし。（ト内へ入る、左内見て）、
左内　もしお袋さん、このお孃さんわえ。
お熊　今この先の四つ辻にうろ〳〵してござつた故、樣子をお聞き申したら何か尋ぬるお人があつて、

お家を忍んで出なされたさうだが、畫の中はいゝけれど夜に入ると宿無者めらが、どんなことをしようも知れぬ。そこでお連れ申して來たのだ。

左内　そりやよいことをなさいました。

お熊　さあお嬢さん、まあゆつくりとなさいまし、お前さんの行きたい所へ私が送つてあげるから、必ずお案じなさいますな。

みつ　どうぞお賴み申しますわいな。

お熊　さうしてお前さんのおいでなさる所は、どこでござります。

みつ　さあ私の行くところは（ト言ひ兼ねる思入）。

お熊　どこまでもお世話は申しますからは、隱さずとおつしやりませ。

左内　いつたい、お前さんはどちらでござります。

みつ　さあ、私や稻毛の御家中で松田主膳の娘でござんすが、お屋敷のお辻番にゐる與之助といふものに逢ひたいのでございますわいな。

お熊　（これを聞き、頷いて）はゝあ、それで樣子が分かりました。それぢやあその與之助さんといふが、お前さんの情人でございますね。

みつ　いえ〳〵、さうでは、

お熊　お隱しなさんな、私も卜者のお袋、見通しでござりますわな。

左内　然しお屋敷の辻番なら、鼻の先でござりませうに、何故こつちへおいでなされました。

みつ　さあ、その與之助が昨日から何處へ行つたやら行方が知れず、聞けば問注所とやらへ縛られて行たとのこと故、もしもこれ限り逢はれずばと、家を忍んで問注所へ行く積りで出は出たが何處が何處やら道は知れず、どう仕樣かと思つたところ、お前樣にお目にかゝりこのやうな嬉しいことはござりませぬわいな。

お熊　必ずお案じなされますな、もう日暮れでござりますれば、明日早くお連れ申して與之助さんとやらにお逢はせ申しませう。何にしろこゝの家は人出入が多うござりますれば、御窮屈でもあの戸棚に隱れておいでなさりませ。

みつ　いえもう、與之助にさへ逢はれることなら、どのやうなことでも厭ひはせぬわいな。

左内　こんな美しいお嬢さんに、さう思はれる男は仕合せ者だな。

お熊　必ず誰が來ようとも、口を利いてはなりませぬぞ。

みつ　そりやよう合點してをりますわいな。

ト此内花道より權次出來り門口へ來り、

權次　はい、御免なせい。

左内　それ、表へ誰やら、

お熊　ちつとも早く（と戸棚を明けおみつを中へ入れ、戸を締める。權次門口を明けるを見て）、權次か。早かつたの。（ト言ひながら門口へ出で、小聲にて）、どうださつきの玉は、

權次　年一ぺい百兩かものはあるね。

お熊　旅へ賣るのはをしいものだが、この近所ぢやあ足がつくから、此方の方へやらうかと思ふのよ。

權次　どうぞさうしてくんなせえ、あの位な玉が出來りやあ、おれも旦那の前へ鼻が高い。

お熊　ほかならねえ手前のことだ、働きにさしてやらう。

權次　そいつあ有難い、それぢやあお母あ御苦勞ながら、雪の中の小池へ行つて旦那に逢つてくんなせえな。

お熊　よし〳〵一緒に行つてやらう。（トこの中左内門口の方を窺ひ、あの娘を賣るのだなと思入。お熊門口を明ける）これ左司公や、おらあちよつと小池まで行つて來るから、今の娘を氣を附けてくれよ。

左内　あい〳〵、合點だ。

お熊　左膳が歸つて來ても、だまつてゐろ。

左内　あい〳〵。

お熊　言ふときかねえぞ、いゝか、いゝかといふに、

左内　お母あ一度言やあいゝぢやあねえか、なるほど年を寄るとくどくなるの。

お熊　いや、あの野郎おしやべりだから、油斷がならぬえ。

權次　そんな憎まれ口を利きなさんな。（ト花道へ行きかけて）。

お熊　コウ〳〵そつちは遠い、近道を行かう。

權次　路が惡かあねえかえ。

お熊　老人せえ歩かあな。（ト下手へ入る）。

左内　なるほど龍の中よりや年の功、惡い事にかけては頭より上手だ。

ト雪おろし、我物と思へばの端唄になり、花道より左膳實は幸藏黑のきめ頭巾、秩布、爪掛の下駄、蛇の目の傘をさし出來る。雪ちら〳〵と降る。

幸藏　月雪花のその中でも、雪にまさる詠めはない、野も山も白妙に限りなき銀世界、作らずしてのこの風景、あゝ雅人は賞美する筈ぢや。

ト雪に見惚れてゐる。と花道よりお元の弟三吉刺つ子の筒つぼ、紺の腹掛同じく膝の切れし股引を端折り、草鞋穿きにてむきみ笠を冠り、出來り花道にて、

三吉　もし〳〵旦那、ちつと物が聞きたうございます。

幸藏　（三吉を見て）見れば年端も行かぬ小僧、この大雪にどこへ行くのだ。

三吉　あい、この近所に平澤左膳樣といふト者があるなら、教へておくんなせえ。

幸藏　おゝ、その左膳といふはおれだが、なんぞ用か。

三吉　ちつと見て貰ひたいことがあつて來ました。

幸藏　あゝさうか、嘸雪で冷たかつたらう。さあ〳〵おれと一緒に來やれ〳〵（ト本舞臺へ來り）、今戻つたぞよ。（ト中へ入る）。

左内　これは先生、お早うございました。

幸藏　さあ小僧、こつちへ入りやれ。

三吉　あい（ト腰をかけ、草鞋をぬいでゐる）。

幸藏　これ、湯があらう、汲んでやりやれ。

左内　へい、これ小僧、今湯を汲んでやるから、足を洗やれ。

三吉　なあに、雪だから足は汚れねえ（ト手拭にて拭き、内へ入る）。

左内　先生、この小僧は、

幸藏　何か見て貰ひたいとて參つたのだ。

左内　さうでございますか。さあ、こゝへ來てあたるがいゝ（ト火鉢を出す）。

三吉　あい（ト火鉢の傍へ來り、左内に向ひ）、小父さん、寒いね。（ト言ひながらあたる）。

幸藏　して、小僧はどこだ。

三吉　あい、おいらあ由井ケ濱だ。

幸藏　由井ケ濱ぢやあ漁夫だな。

三吉　あい、父さんが漁夫だつたがね、去年の二月死んでから、母さんと二人で餌掘りに出るよ。

左内　むゝ、それぢやあお袋と二人か。

三吉　なに、まだお元といふ姉さんがあるがね、おいらが父さんは博奕好だつたから負けきつた時、姉さんを藝者に賣つてしまつたから、家にやあゐねえよ。

幸藏　はあ、そちが姉は藝者か。して、見て貰ひたいとは何だ。

三吉　あい、どろぼうが何處にゐるか、教へておくんなせえ。

兩人　え、（ト顔見合せ思入）。

幸藏　藪から棒に盗人を教へてくれとは、どういふわけだ。

三吉　今言つたおいらの姉さんの情人があるがね、母さんが若え時に乳母に行つた所の息子で、刀屋の新助さんといふのだがね、こないだその新助さんが百兩とかいふお金を取られて家へ歸ると叱られると言つて、いけどうなおいらの姉さんと水心も知らねえで川へ入つて死なうとしたのさ、そこへ盗人が來て助けてくれて、取られた金まで奚れたところ、極印とやらいふものがあつて、その金を持つてゐるものが盗人だと言つて、新助さんも姉さんも、昨日縛られて行のたのさ。

ト これを聞き、藏幸扨は此間やつた金は極印金であつたかといふ思入。

幸藏　あ、知らぬことゝて。はて、可哀さうなことだなあ。

左内　それぢやあ、嘸家で困るだらう。

三吉　あい、姉さんが牢へ行つたのでお金が澤山入るけれど、母さんとおいらと朝つから餌を掘りに行つても、三百か四百にしきやあなりやあしねえ。それに母さんが此間から風を引いて寢てゐるものだから、家に錢あちつともなし、おいらが布子や母さんの袷布子ぐるみ質にやつて、やつとのことでお金を拵えてやつたがね、煩つてゐる所え姉さんが牢へ行つたので、母さんは泣いてばつかり、ついおいらも悲しくなつて、喧嘩しても泣いたことはねえけれど、もし母さんが死んだら、姉さんは牢へ行つてゐるし、どうしたらよからうと思ふと、泣くめえと思つても涙が出てならねえ。

ト 此中泣聲で言ひ、手拭にて涙を拭く、幸藏は不便なといふ思入。

そんなことを思ふせへか、平生おいら寢坊だけれど怖え夢ばつかり見て、夜もほんとに寢られやあしねえ。今朝もお米を買ふ錢がねえから、七つから沙蠶を掘りに行つてね、そりよゝ百五十に問屋へ賣つて、それで母んにお粥を喰はして、さうして此方へ來たのサ。

幸藏　あ、まだ年も行かぬのに、太い苦勞をしやるの。

三吉　どうぞその金をくれた盗人がどこにゐるか、見ておくんなせえ。

幸藏　おゝ、見てやらうとも〳〵（ト箪笥を持ち）、けんげんこうりてい〳〵（ト算へ算木を置く）。

左内　嘸七つから餌を掘りに行つたら、冷てえことだらう。

三吉　そりやあもう氷を踏み割つて入るのだから、足もなにも覺えはねえのさ。

幸藏　こりや小僧よ。この易の表では、その盗賊が直に知れて、おぬしが姉も先方の息子もおそくも二三日の内には、許されて歸らうから案じるなと、家へ歸つたらお袋によう言やれ。

三吉　あい〳〵、そんなら二三日の内に許されて歸りますとか、そりやあ嬉しいことだ、大きに有難うございます。（ト辭儀をなし）、もし、いくらでございます。

幸藏　なに、禮物には及ばぬわい。

三吉　それでも母さんがいくらだか値を聞いて、置いて來いと言ひました。

左内　なにさ、先生がたゞ見てやるから、その錢で歸りに蕎麥でも喰つて歸るがいゝ。

三吉　そんならいゝかえ、氣の毒だなあ。

幸藏　些細な見料、心配には及ばぬ。

三吉　それぢやあ今度、むき身でも持つて來て上げよう。

幸藏　見料を取らぬ替り、この金をおぬしにやるから、何ぞお袋が好きなものでも買つてやるがよい。

ト紙入より金を出し紙に包みて遣る、三吉取つて見て、

三吉　こりやあお金だね、お金なら貰ひますまい。

左内　せつかく先生がやらうとおつしやるに、何故貰はぬのだ。

三吉　また縛られるといけねえものを、

幸藏　え。（トぎつくり思入）。

左内　馬鹿なことを言へ、そんな氣遣ひがあるものか。

三吉　それぢやあお貰ひ申しませう、こりやあ有難うございます（ト戴き）、嚏母さんが嬉しがりませう。

ト腹掛の隱しへ入れる。

幸藏　さあ〳〵。澤山降らねえ中に早く歸るがいゝ。

三吉　あい〳〵。

左内　嚏寒からうな。

三吉　なに、寒いとつて駈けて行きやあ、暖かになります。（ト草鞋を穿き笠を冠る）、こりやあ且那、大きに有難うございました。

幸藏　早く歸れよ。

三吉　あい〳〵（ト花道へ行きかけ）、むき貝よう、馬鹿貝のむき見よう。

ト駈けて花道へ入る、幸藏思入あて、

幸藏　あ、よしない情が仇となり、

左内　あもし（ト言つては悪いといふ思入）。

幸藏　誰ぞゐるか。

左内　奥に醫者が待つてをります。

幸藏　むゝさうか。

ト思入。花道より乳母おふと傘をさし下駄がけにて出來り門口へ來て、

ふと　はい、御免なさいまし、平澤左膳樣とはこちらでございますか。

左内　あい、こつちだが何方からござつた。

ふと　ちつと見てお貰ひ申したいことがあつてまゐりました。

左内　左樣でござるか、さあ、こちらへお入りなさい。

ふと　やつとこな（ト門口を跨いで内へ入る）。

左内　木魚講と思つたら、お前は身持だね。

ふと　はい、お腹に就いて見てお貰ひ申したうございます。

左内　それぢやあ取上婆さんの所へ行つたら、よからうに、

ふと　いえ〳〵先生に見てお貰ひ申さねばなりませぬ。（ト幸藏の側へ行く）。

幸藏　して、當用でござるか。

ふと　どうか二十四文で見て下されぬか。

幸藏　見料はいかほどでもよいが、當用かと申すのぢや。

ふと　へえ、當用と百錢とは違ひますか。

左内　何を言はつしやるのだ。

ふと　（巾着より二十四文出して）、先づ見料は二十四文、奥に先生がゐるなぞと言つても、もう餘計には出しませぬよ。

幸藏　はて、よいと申すに、

ふと　二十四文ときまつたら、先づ當時の事から死ぬ時までの事を「て下さりませ。

左内　いや、慾ばつたことだ。

幸藏　して、お前の身の上でござるか。

ふと　左樣でございます、何をお隱し申しませう、私の産れは京都烏丸枇杷葉湯賣の娘で、稻毛の御家中に奉公をしてをりますお乳母でございます。ちつと澁つ皮が剝けてゐると、かれこれいふのが「男の道、それに私がお心好故馴染になつた人が多く、山井養仙といふ醫者を始め六七人もございますが、何處へ片附けてようございますか、それを見て下さいまし。

幸藏　承知しました、唯今見て進ぜませう。

ふと　それにお耻しうございますが、御覽の通りの身體故、早く産み落したうございます。あいたゝゝゝゝ（ト腹を押へる）。

左内　これ、どうしたのだ〳〵。

ふと　今日の雪で冷えました故が、お腹が痛んでなりませぬ、あいたゝゝゝゝ。

幸藏　それは嘸お困りだらう、何か藥を上げたいものだ。

左内　丁度奥にお醫者がござる、ちよつと見てお貰ひ申さう。もし〳〵奥のお醫者樣え、急病人がございます、ちよつと來て下さりませ。

ト奥にて『あい〳〵承知しました』と山井養仙奥より出來りて、

山井　これは先生御歸宅でございたか、夕氣で一睡催し、とんと存じませなんだ。して御病人はどれでございまする。

幸藏　即ち、そこにをる婦人でございます。

山井　婦人とは有難い、どれ、お脈を伺はうか。（トおふとの脈を見ようとし顔を見合せ）や、そらは、

ふと　お前は養仙さん、

山井　（びつくりして）こいつは堪らぬ。（ト逃げようとするを捉へ）、

ふと　えゝ逢ひたかつた、逢ひたかつたわいな。

左内　扨は山井養仙といふ一筆の情人は、

山井　面目ないが愚老でござる。

左内　はて、物喰ひのよいお方だなあ。

山井　さうしておぬしやあどうしたのだ。

ふと　私や身の上を見て貰ひに來ましたが、今日の寒さでお腹が痛み、早く家へ歸りたいが筋が引釣り、歩けないからお前どうぞ負つておくれ。

山井　途方もねえことを言つたものだ。どうしてそなたが負へるものだ。

ふと　えゝ情のないことをお言ひでないよ、帶屋の長右衛門なぞは、〳〵お池通りも影凄き柳の馬場を横に見て、（ト淨瑠璃を語り）、と、お半を負つて柱川まで行つたわいな。丁度私も姙娠だから、お半の積りで負つておくれ。

山井　何だ、お半の積りだ、俄ちやアあるめえし。

左内　もしお醫者さん、お前もこゝらが恩返しだ、お乳母さんを負つてあげなせえな。

山井　それだといつて、こんなどぶつが、

ふと　誰がこんなどぶつにしたのだ。

山井　愚老ばかりしたといふ譯でもなし。

左内　何にしろ、こゝで蟲氣でもつかれては掛り合ひだ、早く負つて行つておくんなせえ。

山井　あゝ仕方がない、猪食つた報いだ。（ト尻を端折り門口へ後向きになる）。

ふと　そんなら、負つておくれか、おゝ嬉し。（ト養仙の脊へおふと負ぶさる）。

山井　とんだ親孝行だ。

左内　イヨウ〳〵、いゝ釣合の道行だ。

ふと　「お池泓りも影凄き、（ト淨瑠璃を語る）。

山井　えゝそれどころかえ、腰の骨が折れるやうだ。（ト おふとを放出し、渙散に花道へ入る）。

ふと　あいたゝゝゝ、さつても情ない養仙老、待つてくれ〳〵。（ト 腰を引き〳〵追ひかけ入る）。

左内　とんだまぜつ返しだ。

幸藏　（机へもたれ思案の思入でゐたが）、さるにてもさつきの小僧は、可愛さうなことだなあ。

ト花道へ思入。と花道より松田の若徒本庄曾平次出來り門口へ來て、

本庄　御免下され、先生は御在宿でござるかな。

左内　はい、在宅でござりまする。

本庄　然らば御免下されい。（ト内へ入り、合羽を取りよき所へ住ふ）。

幸藏　これは〳〵雪中御難儀でござりましたらう、さ、さ火邊へお寄りなさい。

本庄　有難うござる。早速ながら先生御判斷を願ひたうござる。

幸藏　畏まりました。してお願ひ事でござりますかな。

本庄　いや、斯樣な事情でござる、一通りお聞き下され。拙者事は稻毛の藩中松田主膳が若徒本庄曾平次と申す者でござるが、當月六日の夜川岸通りの堀を乘越え、盜賊が忍び入り、お納戸金百兩奪ひ取て行方知れず、その夜御殿の詰番は即ち拙者が主人にて、上より重き咎めの蟄居。こゝに一つの不便なは、その堀際の辻番人與惣兵衛といふ親仁が、その盜賊を手引なせしと疑ひかゝつて繩目に及び、問注所にて今では牢舍、最早六十越したれば殘る寒氣に獄舍の責苦、所詮命はござるまい。その又伜に與之助といふがござるが至つて親に孝心にて、紛失なせし金調へ、親が命を助けんと雪の下なる若菜屋へ金を盜みに入りしところ、捉へられてこれも繩目、なれどもその家の後家が情に不義なりと、その科を身に引受けて庇ふ樣子。これ皆元は我屋敷へ忍ひ入つたる盜人故、何卒彼めを詮議し出し、主人を始め人々の難儀を救ふ心なれどこの盜賊が知れませうや、

又は知れますまいや、御判斷願ひたうござる。就いては又主人の娘今朝より行方知れず、聞けばかの奥之助を戀ひ慕うてをるとやら、何れの方へ參りしやら、尋ねにまゐる方角をお指しなされて下さりませ。

ト此中幸藏一々衒なき思入あつて、

幸藏　すりやその盗賊故、辻番の親子の者ども宇舍せしとか。あゝ現在親を、

本庄　え、

幸藏　いやさ、お役目故に御主人も、太い御苦勞なされまするな。

本庄　お祭し下されい。

幸藏　どれ、判斷の仕りませう。けんけんこうりていく（トよろしくあつて）、この易の表では、遠からず盗賊も相知れ、御主人の御迷惑且つはその辻番の親子の者の疑ひも、晴れまするに相違ござらぬ。

本庄　それは何より重疊して、娘が方角は、

幸藏　お宅より乾にあたり、人に匿はれてござる樣子、それはやがて相知れませう。

本庄　當時名うての貴殿の判斷、よもや相違はござるまい、これにてまことに拙者も安心、主人も聞けば嘸かし悦び、これは些少ながらお禮の印しまで。（ト紙包を出し禮を言ふ）。

幸藏　これは忝なうござりまする。

本庄　心急きにござりますれば、最早拙者はお暇仕る（ト立たうとしておみつの簪を拾ひ）、こりや裏梅の紋附、まさしく娘御おみつどのゝ簪、

幸藏　え、

本庄　どうしてこれが、

幸藏　多くの人の參る我宅、誰が取落して參りしやら。

本庄　それにしてもこの紋は、

左内　はて、世間に似寄もござりませう。

本庄　いかさま、尋ぬる一圖に此の方のと思ふは狹い心でござる、はゝゝゝゝ。然らば先生、

幸藏　お靜かにおいでなさい。

本庄　御免下され（ト笠を冠る、左内提灯を點けて出す）、これは憚り（ト花道へ行きかけ）、世には似寄りもあるものなれど、あまりといへばその身そのまゝ、もしやこの家に（ト振返り思入あつて）、いや、心迷ふは愚痴の至り、どれ乾の方をお尋ね申さう。（ト花道へ入る）。

幸藏　（響を取上げ）女きれなきこの家に、合點の行かぬこの響、

左内　それは今の侍が、行方を尋ぬる娘の響。

幸藏　や、すりや松田の息女が、どうしてこの家に、

左内　道に迷つてござつたのを、お袋様がお連れなされ戸棚の中に隱してござるが、山女衒の權次が世話で鴻の巣へ賣る積り、その相談に雪の下へさつきおいでなされました。

幸藏　すりや、あの母者人が。えゝ何不自田なくさせ申すに、又しても非道なこと、人の爲めとは言ひながら我故難儀をかけたる人の娘を賣つては重ぬる罪、その娘御を早くこれへ。

左内　合點だ。（ト戸棚の中よりおみつを連れて出來る）。

幸藏　いやなに御息女、定めて樣子は戸棚の中にてお聞きなされたでござらうが、先刻あなたを伴ひしは、某が母ながら心よからぬ性質故に、あなたを苦界へ沈むる巧計、

みつ　えゝ、

幸藏　此家にあつてはお身の御難儀、これなる若者を供に連れ、一先お宅へお歸りあれ。

みつ　その志しは嬉しいが、逢ひたう思ふ與之助に、

幸藏　はて、緣あればいつにても逢はれぬことはござりませぬ。

みつ　それぢやといふて、

幸藏　かういふ中も心急き、母が歸らば何かと面倒、

みつ　そんならこのまゝ、

左内　少しも早く、

幸藏　然し、途中の人目もあれば、

左内　それぞ幸ひ、この空葛籠、（ト上手の家體より葛籠を持つて來る）。

幸藏　おゝ出かした〳〵。御窮屈でも暫くこれへ、（ト葛籠を明け、おみつを入れる）。

みつ　思はぬことにて、何かと太い。

幸藏　はて、お禮に及ばぬ。（ト蓋をして）、最前來りし曾平次殿、程は行くまい後追ひかけ、

左内　おゝ合點だ。（ト葛籠を負ひ）、そんなら頭、

幸藏　これ、（ト時の鐘）。

左内　どれ一足り、

トばた〳〵にて左内逸散に花道へ入る、幸藏後を見送りゐる。これより床の淨瑠璃になる、

走り行く後見送りて幸藏が血筋の緣と白雪の、我身に積る罪科を算へたてたる悔み言、

ト幸藏思入あつてどうと倒れ、

幸藏　盜みはすれど仁義を守り、富めるを貪り貧しきを救ふは天の道なりと思ふも己が得手勝手、例へば人の難儀をば金をもつて救うても、救つた金が又人に難儀をかけて、盜んだ金故我身に報ふその罪科。（ト此中下手よりお熊出來り、門口にて中の樣子を窺ひゐる）。二三日以前稻瀨川にて身を投げようとせしものを留めて聞けば、百兩の金を人に騙られて言譯なさに死ぬとのこと、その折稻毛の屋敷より金を盜んで、二人が命助けやりしが仇となり、極印金に盜賊の疑ひ受けて牢舍せし、男は女房の緣家たる雪の下の刀屋新助、女は藝者のお元とて、その新助が乳母の娘と最前小僧の哀れな話、聞いて間もなく又候や、曾平次殿の物語り、その夜の仕末に同類の疑ひ受けて牢舍せし與惣兵衞といふ老人は、水子の折に別れたるこの幸藏が實の親、その又親を助けんと盜みに入つて捕はれしは、顏は知らねど我弟、年端も行かぬ身をあはれみ、密夫と言うて盜賊の汚名を庇ふ若榮屋の後家は女房が實の母。いかなればこそ此のやうに由緣の人に難儀をばかけるも元は百兩の金をこの身が盜みし故、因果は廻る小車の引くに引かれぬ絕體絕命、うしのこの世も今日限り、いさぎよう名乘つて出で、血筋に絡む人々の繩目を助けにやならぬわえ。

〽先非を悔いて幸藏が名乘り出でんと覺悟なす、門にはお熊が始終の樣子、とつくと聞いて打ちうなづき、裏道さして忍び行く。さすが稻葉も此の世の別れ、過ぎ來し方を思ひ出し、

ト文句の通りよろしくあつて、

これにつけても不便なは、我故親の勘當受けし若榮屋の娘お松、故鄕をはなれて旅歩き、而も駿河で我が大病、路用の金も何やかや、せんじつまりし藥の代たゝまる宿屋の勘定に、可哀や駿河の二丁町へ浮き川竹の勤め奉公、その後聞けば鞍替に旅から旅へ行方知れず、いかなる憂目を見てゐるか、苦界が助けてやりたいと思つた念の屆かぬも、今となつては却て仕合せ、どうで一度は上の御苦勞、疊の上で死なれぬ身體と我は覺悟をしてゐれど、女房の身ではいかばかり情ない夫と恨まば恨め、逢はぬばかりにこの歎き、かけぬが優であつたわい。

〽立派に言へど目に浮む涙ぞ夫婦のまことなり。斯くなる上は片時も早く名乘り出で、人々の苦患を救ふがまだしも言譯。此の身の罪のあらましを願書になして名乘り出ん、むゝ、さうぢやゝゝ。

〽さうぢやゝゝと打ちうなづき、一間へこそは入りにける。

ト幸藏思入あつて奥へ入る。烈しく雪降りこの家體半分上手へ引き門口が舞臺の中央になり、下手へ雪の積りし建仁寺垣を引出す。

〰又もしきりに降る雪の中をうろ〳〵行く先も、どこがどこやら白妙に憂目みどりを杖柱、夫のたより松山が掟厳しき大磯の籠を離れし目なし鳥。

ト花道より松山部屋着にて雪の積りし絲立を着て手拭を冠り、鳥目の思入。禿みどり手拭を頬冠りにして、松山の手を引き出來る。

みど　もし花魁、お前は眼が悪い故、あぶなうござんすぞえ。

松山　いや〳〵私はそなたを頼りにする故、あぶないことはないけれど、したが折悪いこの雪で、嘸やそなたは冷たからう。

みど　いえ〳〵、私や冷たいことはござんせぬ。

松山　何のないことがあらう、私でさへ冷たうて足に覺えがないものを、よたけもないそなたの身體、冷たうなくて何とせう。あゝ又強う降つて來た。どこぞそこらの軒下へ連れて行てくりやいの。

みど　あい〳〵。

〰雪踏み分けてたど〳〵と、舍る軒端も縁のはし、(ト門口へ來て)、もし花魁、こゝでちつとお休みなさんせ。

松山　おゝこゝは家の軒下故、雪もさつぱり積らぬ樣子、ゆつくり休んで行かうわいなう。

〰言ふ聲洩れて幸藏が人や來ると門の口、さし覗いて窺ふも知らぬこなたは寄りこぞり、ト幸藏奥より出て來て窺ふ。松山はみどりの身體の雪を拂ひ、袖にて覆ひながら、

あ、折も折とて烏目の病ひ、夜に入ると少しも見えず、今宵もそなたがないことなら、一足でも歩かれぬ。それ故雪の降るをも厭はず夜夜中まで連歩く、邪慳な私に遣はるゝそなたは因果なことぢやなあ。

みど　いえ〳〵、私やお前のことなら、死んでも大事ござんせぬ。

松山　えゝそれほどまでにこの私を、思うてくれるか嬉しいぞよ。

〰見えぬ目ながら引寄せて、みどりが顔を撫でさすり、

あゝ、爭はれぬ親子の縁、

みど　え、

松山　これ、今日の今まで隱せしが、そなたは私が子ぢやわいなう。

みど　えゝ、そんならお前が母さんでござんしたか。

松山　おゝ、勤ずる身に子があつては、邪魔になる故他人向禿と言うて、越路から連れて來た故誰あつて知るものなけれど、親子の縁、今日の雪をも厭はずに年に增りしそなたの介抱、その心根が可

愛って、どうまあ名乗らずにゐられうぞいなう。

〰抱きしむれば縋り付き、

みど　何故私には父さんや母さんがないことぢやと、外の禿の親達が逢ひに來るその度に浦山しう思うたが、母さんができて嬉しうござんす。さうして私の父さんは、

〰問はれて松山涙を拭ひ、

松山　その父さんは五年後、駿河の府中で別れたまゝ、便りも知れず逢はぬ故、眼の不自由な身を以て雪の夜道も厭はずに、こんな苦勞をするわいなう。

〰わつとばかりに泣き沈む、聲は覺えの女房に、戸の隙間より幸藏がさし覗いてびつくて仰天、扨は禿は我子かと恩愛妹脊二筋の道に迷うてとつおいつ、五年この方尋ねし女房、名乗り聞けんかいやく〳〵、名乗らば親子が歎きの歎き、言はぬに如かじと堪ゆる苦しさ、門には雲に冷え凍え、持病に胸へさし込む癪。

あいたゝゝゝ。

みど　もし花魁ではない、母さん、どうぞなさんしたかえ。

松山　持病の癪が起つた故、こゝのお家へ御無心申し、お湯を一つ貰うてくりや。

みど　あい〳〵。

〰返事もうろ〳〵門に立ち、

もうし、こちのお家の人え、病氣の悪いものがござります故、お湯を一つ下さりませ。

ト幸藏思入あつて手拭を冠り、語調子を變へて田舍言葉にて、

幸藏　はあゝ、どうぞさつしやつたのかえ。

みど　あい、持病の癪が起きたのでござんす。

幸藏　そりやアはあ困るだんべい、藥でもあるかえ。

松山　生憎藥は持合はさぬわいな。

幸藏　わしィ、好え藥があるから、進ぜますべい。

〰言ひつゝ手早く紙入より、藥取出し白湯持ち添へ、

それ、藥をやるから、呑まつしやい。

〰渡せば取つておしいたゞき、

松山　これは御親切に有難うござりまする。

〰兩手を突いて禮を言ふみすぼらしけなその裝を、見るに不便のいやます雪、身體に積るを

見兼ねる幸藏、傘とつてさしかざせば、
ト此中松山藥を飲み湯を飲みなどする、幸藏は雪頻りに降る故有合ふ傘を開き松山にさしかざす。
松山雪のかゝらぬ思入あつて、
これみどり、雪は止んだ樣子ぢやの。
みどいえ〳〵藥を下されたこのお方が、傘をさしかけてござんすわいな。
松山えゝ御親切に有難うござりますわいな、お情深い人さんはこのやうにして下さんすれど、今もこれへ參る道にて、ある軒下にをりましたら、情を知らぬお人故見れば、どうやら胡散な裝置くこと出來ぬ出て行けと、年端も行がぬ此子までも杖棒もつて打ちたゝき、情ない目に遭ひますも、夫に逢ひたいばかり故、御親切なお方と見受けお願ひ申すは、此の邊に平澤左膳樣といふト者はござんせぬか、御存じならばお家をばお敎へなされて下さりませいな。
夫と知らず松山が賴む哀れさ、聞く切なさ、尋ぬる夫は我なりと言ひたい胸を撫下し、
幸藏はあ、その平澤左膳チウ人は、四五日あとに上方のほうへ突走つたテ、急に歸るこどぢやあんめえ。
松山えゝ、すりや四五日後にこゝを立ち、上方筋へ行かしやんしたとか、はあゝゝゝゝ。

はつとばかりに泣伏せしが、やう〳〵と顏を上げ、
緣も由緣もないお方に、このやうなことを申しますも異なことではござりますが、御親切におつしやつて下さるにつけ。この身の不仕合せお聞きなされて下さりませ。元私は鎌倉にて、それ相應に暮せしものゝ娘にてござりますが、親の許さぬ不義をなし勘當受けてともぐ〳〵に、上方筋へまゐりし折賴みに思ふ男の病氣に、藥の代や宿錢のそのたゝまりに仕方なう姙娠を隱し苦界へ沈み、辛い勤めのその中で產落せしはこのみどり、それより五年がその間、男へ操に肌觸れねば馴染んで通ふ客もなく、旅から旅へ住替へに、昨日は尾張今日は伊勢、流れ流れて大磯へ出るとそのまゝ來る客に、かういふ男を知らぬかと問ひかけたればその人なら、滑川の邊りにて平澤左膳といふト者がよく似てゐると詳しい話、男の苗字が平澤故たしかにそれと飛立つ思ひ、この子を賴りに刎橋から忍んで出たれど烏目の悲しさ、見えぬ眼ながら追手を忍び、よう〳〵尋ね來て見れば又その人は旅の空、五年この方この子を連れ泣かぬ日とてもないほどに、いくせの艱難苦勞なし、逢ひたう思うた願ひもかなはず、
神も佛もないことかと、思ふもやはりこつちの勝手、
親の許さぬ不義をなし、御恩も送らず苦勞をかけ、親ばかりかは金の爲め苦界に沈めば勤をば、

精出さねばならぬに勤めもせず廓を抜け、主人へ難儀に難儀をかけ、道に背いたことのみ故、天道様の御罰にてかゝる憂き目も此の身の罪、いつそ淵川へ身を投げて死にませうかと思ひますれど、生ひさきのあるこの子が不便さ、死ぬるにも死なれぬ苦しさを、憚りながら旦那様御推量なされて下さりませいな。

〽かつぱと伏して泣き沈む母が脊を撫でさする母子の心いぢらしく、名乗りたいのを喰ひしばり、堪へる苦しさ切なさは、くれんの氷張り裂く思ひ、八寒地獄の呵責の責も、いかでこれにや増さらんと、こぼるゝ涙呑込みて、

幸蔵　あゝ、あかの他人の私等でさへ、こなたの哀れなその話聞いて涙がこぼれ申す、嘸や尋ぬる御亭主がこれを聞かれたことならば、身も世もあられぬことであらう。

〽歎きを咳にまぎらせば、松山は顔をあげ、

松山　さあ、こちらではこのやうに思ひますれど、五年が間問ひおとづれのないのを見れば、もしや外に増花のあつて便りのないことかと、思ひまするも女子の常、

幸蔵　あ、いや〳〵そりやこなたの廻り氣、五年この方艱難して男を思ふ親切が、届かないでどうするもんだ。何しに仇に思ふべい。

〽我身を人のよそごとに、口には言へど眼に涙、禿は目早く打ちみやり、

みど　もし母さん、お前がそんなに泣かしやんす故、このお方もさつきから泣いてばかりゐやしやんすわいな。

松山　おゝさうであつたかいの、よしないこの身の愚痴を申し堪忍して下さんせ。雪もどうやら小止みの様子、そろ〳〵とまゐりませうわいの。

幸蔵　そんならこなたは、もうゆかつしやるか。

松山　はい、どことといふ當もなけれど、まゐりませずばなりますまいわいな。

〽立兼ねるのをみどりは見兼ねて、

みど　もうし、どうぞこゝへ今夜泊めて下さんせいな。

幸蔵　あゝ泊めてやりてえものだけれど、おらあこゝの奉公人、家の主人は邪慳な人なか〳〵泊めるこんでねえ。かうさつしやれ、これから二町ほど行つて右へ曲ると百姓家があるから、そこを頼んで泊めて貰はつしやれ。

〽言ひつゝ金を紙に包み、（ト幸蔵懐より金を出し紙に包み）、

駈落なさんしたとあるからは、定めて金もござるめえ、こりやあ少しばかりだけれど、おらが給

金を溜めた金を進ぜるから、持つて行かつしやい。

〽手に渡せば探り見て、

松山　こりやまあよほどの金を、然し由縁もないお方に、

幸藏　はて、そりやあいらぬ遠慮、おらも田舍にやあこなたのやうな女房があれば、女房にやつたと思やあ、何をしいことがあんべい。

松山　そんならお貰ひ申しまする、えゝ有難うござんすわいな（ト金を持つてゐる幸藏の手に縋り）、心の迷ひかさういふお聲が、尋ぬる男にどこやら似寄り、

幸藏　えゝ、

松山　あゝ尋ぬる男にこのやうに廻り逢うたことならば、嬉しいことでござんせうわいな。

〽尋ぬる夫に逢ひながら、見えぬ鳥目のいぢらしさ。

幸藏　今にこのやうに逢はれようから、淵川へ身を投げるなどゝいふ短氣なことは止さつしやい。命さへあつたなら、逢はれることがあるだんべい。

松山　御親切に有難うござんすわいな。

幸藏　さあ〳〵、澤山積らねえ中に行かつしやい。

松山　はい、そろ〳〵と參りませう。

幸藏　これ、よう氣を附けたがよいぞや、（ト みどりの背をたゝく）。

みど　あい〳〵、（ト立上り思入あつて行きかけ）、

松山　あゝ御親切なお言葉に、どうやら名殘りがをしまれて、

幸藏　おらもやりともないやうだ。

松山　さういふ聲が、（ト側へ來るを拂ひ退け）、

幸藏　あこれ、輕我せぬやうに行かつしやい、（ト門口をぴつしやり閉める）。

松山　はい、お別れ申しますわいなあ。

〽是非もなく〳〵松山が、降り積む雪を踏み分けて、二足三足行過しが、似寄りし聲に氣も引かれ、みどりに囁きさし足なし、傍の小影へ身を忍ぶ、

ト松山花道へ行きかけ思入あつて、みどりに呟き下手垣の小影へ入る。

〽かくとは知らず幸藏が、門の戸明けて見送れど、二人が影の見えざれば、ほつと一息といきをつき、

ト幸藏門口を明けて彼方を見て見えぬ故、門の外へ出て見る。此中舞臺は元へ戻る。幸藏家へ入り、

思入あつて、

幸藏　ちえゝ女房ども、許してくれ。別れほど經て五年越し、おれ故銀難苦勞をする女房や可愛い子供だもの、名乘りたいは山々なれど、明日は此の身の罪科に成敗受ける身體故、本意なく今宵歸せしは、そなたに歎きをかけまい爲め、情ない夫と思ふであらうが、知らずに歸へるそなたより知つて返すおれが切なさ。どうぞ許してくれいやい。

〽過ぎ行く方を伏拜み、悲嘆に暮るゝその所へ此の家の老母は立歸り、物をも言はず戸棚のうち明けてぴつくり仰天なし、

ト此時下手よりお熊出來り、内へ入り、戸棚を明けてぴつくりし、

お熊　やゝ、こりや戸棚の中には、むう、

幸藏　母者人、何でござります。

〽言ふにお熊はうち頷き、

お熊　これ幸藏、おぬしやァこの戸棚の中にあつたものを、知らねえか。

幸藏　戸棚の中にあつたとは、稻毛の家中松田主膳どのゝ娘御でござりますか。

お熊　やあ（トぎよつと思入あつて）、扨はおのれが娘をば、

幸藏　はい、送らして返しました。

〽聞くより老母は幸藏が襟髪取つてぐつと引附け、

お熊　こりややい、あの娘は鴻の巣へ賣り、百兩にする大切の代物、なんでわりやァお母さんの仕事の邪魔をしやあがる、えゝ腹の立つ、どうしてくれう。

〽傍に有合ふ天眼鏡、とるより早くめつた打、幸藏その手をきつと取り、

幸藏　これ、母者人、

お熊　なんだ、

幸藏　えゝ情ない、こなたはなあ。盜みはすれどこの幸藏非義非道の働きせず、人に難儀をかけまいと利合の細き町人の家へ入つたことはねえ。百や二百の端金盜まれたとて障りにならぬ大小名のお納戸金、盜んだとてもその金をおのが私慾に使やあしねえ、難儀な人を助ける金、それに引替へこなさんは、非義非道の働きのみ、金がほしくば何萬兩でも望み次第に上げまする。年端も行かぬ娘を騙し旅へ賣るとは非道な仕方、それ故助けて歸せし娘、どうぞこれから無慈悲なこと思ひとまつて下さりませ。（ト言ふを遮つて）、

お熊　いやたゝ〳〵、どうで盜人をするからは、情があつてもなくつても上のお手にかゝる時ァ、刑

狀は同じことだ、金がほしくば何萬兩でも夷講の賣買ぢやァあるめえし、御大層なことを吐かしやあがるな。年は取つてもお母さんは、頭の禿げた古猫だ、おれが眼からは鼠、何のちつぽきな形をして、大人ッくさい小僧めが、これ鼠よ、いやさ小僧よ、鼠よ、えゝ小僧めがしやらつくさい、(ト天眼鏡で又打ち)、汝等に金は貰はねえでも、しなびた腕で百兩や二百兩の金は直働かあ。貰ひ物ぢやあ肩身が狹い、さあ、金にする娘を返せ、えゝ返しやあがれといふに、

立蹴にはつたと蹴倒せど、親といふ字に手出しもならず、(ト幸藏きつと思入あつて)、

幸藏　そりや母者人無理といふもの、送つてやつた娘をばどうしてこゝへ呼ばれませうぞ。

お熊　呼ばれぬものを、何故やつた。

幸藏　さあ、それは、

お熊　何で親の邪魔をするのだ。

幸藏　さあそれは、

お熊　言譯なくば、娘を出せ。

幸藏　さあ、

お熊　さあ、

兩人　さあ〳〵。

たぶさを取つて引きづり倒し、

お熊　こりややい、汝やあ水子のその折に、襁褓に包んで捨てあつたを、おれが拾つてこの年まで育てたばかりか、盜人の道まで敎えた恩ある親だぞ、その親の金になる邪魔をしやがる腹癒せは、こう〳〵〳〵、

疊へすりつけにじり附け、

斯うされても手出しは出來めえ、えゝ意氣地のねえ野郎だなあ。

親の高下に幸藏が、無理と知りつゝ身を詫ぶる弱身へ附込むお熊婆、打つたゝきつ言ひたいかい、折しも夜明の鷄の聲、

幸藏　最早夜明に程近し、片時も早く、それ、

名乘り出でんと幸藏が、有合ふ刀ぽつこんで、行かんとなすをお熊婆帶際しつかと引留めて、

ト幸藏立上り腰をさし、血相して行かうとするを捉へて、

お熊　むゝ、血相變へて刀をさし、汝あおれを殺す氣だな。

幸藏　えゝめつさうなことおつしやりませ、ちつとのがれぬ用事あつて、夜明までに行くとこあれば、どうぞやつて下さいませ。

お熊　いや〳〵そりやあ嘘だ〳〵、おれを殺すに違ひねえ、さあ殺せ〳〵。

幸藏　えゝ又してもその樣なこと、產の親より優りし大恩、何とてこなたが殺されませう。

お熊　さほど恩あるおれなれば、何故娘を逃がしたのだ。

幸藏　さあ、それは、

お熊　何の汝が恩を知らう、浮世に邪魔なおれが身體。殺す氣に違ひねえ、さあ殺せ〳〵、（ト幸藏に身體をつきつけよろしくあつて）、殺し樣を知らずば敎へてやらうか。

〽言ふより早く幸藏が刀すらりと拔放すを、あわやとその手をじつと留め、

幸藏　あこれ、あぶない、放さつしやりませ。

お熊　いや〳〵放さぬ〳〵。

〽爭ふ機過まつてお熊が肩先切附くれば、あつと一聲おどろく幸藏、

幸藏　やゝこりや手が廻つてか、ほい。

お熊　うぬ、親を切つたな。

幸藏　許して下され、こりや怪我だ〳〵。

お熊　いや〳〵怪我ぢやあねえ、おれを殺すのだ、とても殺すならかうして殺せ。

〽刀持ち手を持添へて、七轉八倒虛空ゑ摑み、敢なく息は絕えにけり、幸藏はつと打ちおどろき、

ト此中お熊刀を持ち添へ我咽へ突きたて、あつと苦しみ、よろしくあつてばつたり落命る。幸藏おどろきどうと倒れ、死骸に縋り、

幸藏　えゝ情ない因者人、水子の折より此年まで、育てし私をこなさんは、親殺しにしたいのか。

〽悔み歎いて幸藏が動かす死骸の懷より、ばつたり落つる胴卷に結び附けたる怪しの一通手に取上げ、（ト お熊の懷より厚畳の胴卷と書置の出でゐるを見て）

此の胴卷はまさしく金、結び附けたる一通は、書置のこと、やゝゝゝゝ。

〽はつとおどろく表の方、さし足なして松山が內の樣子を窺ひゐる、こなたは書置繰りひろげ、

ト此中下手より門前の松山、みどり出來り、門口に窺ひゐる、幸藏は書置を開きて、

なに〳〵、「一筆書殘しし」左候へば先刻門口にてそなたの身の上承り候ところ、刀屋新助ど

の丶金子百兩騙られし言譯に、藝者お元と身を投げ死なんと致し候をそなたが留め、稻毛の屋敷より百兩盜み、新助どのへ遣し候、金子が極印金にて盜人の疑ひかゝりし、新助どのお元どの兩人を始め多くの人の難儀を見兼ね、名乘り出て一命捨て候殊勝なる心に慚ぢ、六十年來仕込んだる惡心發起なし候は、右百兩の金を騙り候は我等に御座候。それ故これまでの言譯にそなたの手にかゝり相果て申候、尙騙り取り候この百兩の金を持參なし、いさぎよく名乘りいで成敗受けらるべく候、そなたの來り候を死出三途にて相待ち申候、先は我身の言譯のみ、あら〳〵かしく」

（卜讀みておどろき）、扨は新助殿の金を騙りしは母者人にてあつたるか、やゝゝゝ。えゝ惡心發起なされたら、死なずと仕樣もあらうのに、早まつたことして下さつたなあ。

〰死骸に取附きかきくどく、時しも撞出す六つの鐘、

南無三、明六つ、

松山　嬉しや、此の眼が、

幸藏　時刻のおくれ、

〰時刻のおくれと幸藏が、氣の急く門には松山が烏目に悅ぶ明烏、

片時も早く、

〰明くる戸口に見合はす顏、（卜幸藏戸口を明け、松山と顏を見合せる）、

松山　や、お前は次郎吉さん、

幸藏　そなたはお松、

みど　そんなら、さつきの小父さんが、

幸藏　われが實の父ぢやわやい。

兩人　えゝ逢ひたうござんしたわいな。

〰兩人ひしと縋り附き、

松山　最前逢うたその時に、言葉は田舍訛りなれど、あまりよく似た聲音故取つて返して樣子を聞けば、

幸藏　やつぱり違はぬ尊ぬる夫、何故名乘つて下さんせぬぞいなあ。

松山　さあ名乘らぬ仔細は生兄ある娘に憚る此の身の罪科、仔細は扨のこの書置。

幸藏　その書置の文書は門にて聞きしが、そんならそれ故、

松山　名乘つて出ねばならぬ幸藏、

幸藏　えゝ、兄非を悔いて母樣がこの御最後に又候や、お前が名乘つて出やしやんして、後に殘つて何樂しみ、私もとも〳〵冥土の道連、

幸藏　その志しは忝いが、おぬしが死んでくれたとて、迷ひにこそなれ爲めにはならぬ。死ぬる命を永へて娘を育て、亡き後の弔ひをしてくれるのが、死ぬより增る何より供養、必ず死んでくれるなよ。

松山　すりや死ぬるも死なれぬか、これを思へば世の中に、

幸藏　いかなるものか夫婦となり、又子となりて別れしも、

松山　算へて見れば五年越し、

幸藏　苦ぞ駿河の府中より、

松山　別れ〳〵になりし身の、

幸藏　廻り逢うたる悦びも、

松山　直に別れの悲しみと、

幸藏　なるは如何なる、

兩人　因果ぞや。

ト兩人愁ひの思入、この以前下手より松葉屋の若い者喜助出來り、門口に窺ひゐて、この時門口を明け、

喜助　松山見つけた。（トつか〳〵と入る）。

みど　あれ。（ト松山に縋る）。

松山　これ。（ト後ろへ圍ふ、幸藏喜助をうんと當てる）。

幸藏　思へば果敢ない。（ト喜助をポンと轉し）、

兩人　緣ぢやなあ。

〳〵逢ふは別れの、

ト三重になり、顏見合せ愁ひの思入、本釣鐘にてよろしく　幕

五幕目

鎌倉問注所の場

同裏手水門の場

（役名――稻葉幸藏、早瀨彌十郎、刀屋新助、辻番人與惣兵衛、同伴與之助、石垣伴作、中川東藏。若菜屋後家お高、藝者お元、お元弟三吉）。

（問注所の場）――本舞臺三間の間高二重、本緣附の家體、正面に白洲格子、軒口に三鱗の紋附の幕

を張り、絞りあり、後方は大紗綾形の襖、上下後へ下げて柵矢來、總て鎌倉問注所の感、二重中央に早瀨彌十郎住ひ、平舞臺上下に番卒丹平雲平控へゐる、此の見得時の太鼓にて幕明く。と、ばた〳〵になり、花道より家主金八願書を懷へ入れ、蜆賣り三吉を連れて出來り、

金八　へい、お願ひの者にござります。

番卒　其方は何者だ。

金八　山井ケ濱の庄屋にござりまするが、これへ召連れましたは一昨日牢舍いたしましたる藝者お元の弟にござりまする。姉に對面いたし度くとせがみます故、お願ひに出ましてござります。お取次ぎ下さりませ。（ト願書を出す、丹平取次いで早瀨彌十郎へ渡す。早瀨開き見て）、

早瀨　むゝ、藝者元が弟三吉とは、その方か。

三吉　あい、おいらでござります。

早瀨　母が病氣とのことちやな。

三吉　あい、此間から寢てゐるとこへ姉さんが牢へ行つたものだから、直惡くなつて昨夜なぞは囈言ばかり言つて困りました。今朝もどうだか見て來てくれと言ひますから、庄屋さんを賴んで逢ひに來ました。どうぞ逢はしておくんなせえ。

早瀨　おゝ尤も、なことぢや、逢はしてやるぞ。

三吉　有難うござります。

早瀨　それ庄屋、案内してやりやれ。

金八　畏まりました。（ト三吉を連れ下手へ入る）。

早瀨　こりや、雪の下若栄屋一件の者ども、これへ呼び出せ。

兩人　はつ。（ト丹平は上手、雲平は下手へ向ひ）、

丹平　雪の下若栄屋の後家たか、

雲平　辻番人與惣兵衛が伜與之助、

兩人　双方ともにこれへ出ませい。

ト上下にて『畏りました』と返事あつて、上手より與之助繩にかゝり、十手を持ちし足輕繩を取りて出來り、下手より後家お高に家主佐次郎兵衛五人組二人付添ひ出來り、控へる。

早瀨　双方とも揃ひしか。

兩人　はつ。

早瀨　雪の下質屋渡世七郎右衛門後家たか、

お高　はつ、

早瀬　稲毛家の辻番人與惣兵衛倅與之助、

與之　はつ、

早瀬　あいや與之助、その方これなる後家たかゞ宅へ盗みに入りしと申すが、それに相違ないな。

與之　はつ。

早瀬　有ていに申し上げい。

與之　昨日申上げます通り、私事身貧に活しをります故、人の富貴が羨しく、金銀を盗まんと後家たかが宅へ忍び入りましたに相違ございませぬ。

早瀬　こりやたか、彼れはあの通り、その方が宅へ盗みに入りしと申す、そちはやはり密夫と申すか。

お高　はつ、御意にござりまする、四十路に近き身を持ちまして、恐入りましたことながらあの者と密に語らひ、内外の者の眼を忍び夜な〳〵庭の塀越しに忍ばせましてござります、折あしく手代どもに見咎められ、密夫と云はゞ我爲ならずと、與之助が庇ひだてに盗みに入りしと申すは偽り、密通に相違ございませぬ。

早瀬　こりやその方は後家故に、主なき身と思ふであらうか、假令死去いたさうとも七郎右衛門といふ

亭主のある身、世に位牌間男と申す、まこと密通に相違なければ、その分には許さぬぞ。

佐次　これお高どの、偽りを申上げるとそなたばかりのことでない、宿老どもの落度となる。第一數代續いたる若葉屋の暖簾にかゝる儀、包み隠さず申上げるがよいぞ。

早瀬　さあ、ありていに申上げい。

お高　唯今も申上げます通り、密通に相違ございませぬ、事露はれしその時はお仕置受けるも豫ての覺語、然しながら與之助ことはまだ前髪のことなれば、何辨へもなき身の上、殊には元より私から仕かけし戀にござりますれば、何卒與之助をお助け下され、此の身を密夫の御成敗になし下されまするやう、お慈悲をお願ひ申し上げまする。

トお高思入にていふ、此中與之助さうではないといふ思入あつて、

與之　恐れながら申上げまする、唯今後家が申上げましたは、ありや皆偽りでござりまする。金がほしさに私が盗みに入りしに相違ございませぬ。何卒私を盗人の御成敗になし下され、密夫でなければ科なき後家、お助けなされて下さりませ。

早瀬　こりや後家、與之助はあの通り盗みに入りしとのみ申し、そちは密通せしと申すが、何れが是にて何れか非なるか、先づ當座の理を押せば、假令密通にもいたせ、塀を乗越し忍び入れば、これ

盗賊も同じこと、かれが方には一つの利あれど、そちも密通と申すには、何か證據のあつてのことか。

佐次　これお高どの、かう見えてもこの家生若い時分は情人、此の身に覺えのあることだが、先づ色戀は文が最初、青物づくしか魚づくし、定めて文があるだらう、證據にそれを出さつしやい。

お高　さあ、その文もありましたれど、人目を憚りその都度々々燒捨てましてござりますわいな。

丹平　證據なければその方が、

雲平　申し分は相立たゝぬぞ。

お高　文は燒捨てましたれど、外に證據がござりまする。

早瀨　してその證據は、

お高　憚りながらお役人様、これ御覽下さりませ。（ト片肌脱ぐと、下に與之助の半纏を着てゐる）。

早瀨　むう、それが密通の證據とは、

お高　こりや與之助が半纏にござります。而も羽織を直せし紋附、今與之助が着てをりまする布子と同じ紋所、二世の縁の寶結び、いつぞや稻毛の辻番へ忍んで逢ひに參りし折、時雨るゝ夜半の肌寒く、名殘りゝ鶯の水放れ、風引かぬやうこれ着てと貸してくれたるこの半纏、朝夕一つにゐる心。で番ひ放れぬ比翼の肌着、女子の身にて男のものを着てをりますが不義の證據、なんと相違はござりますまいがな。

早瀨　何さま、それは一つの證據、

與之　あいや申しお役人様、あの半纏は此間、（ト言ひかけるを遮りて）、

早瀨　こりやく與之助、そちには尋ねぬ、控へてゐよ。

與之　ではござりますが、後家どのが今言うたのは僞り故、

早瀨　はて扨しつこい、控へぬか。

與之　それぢやと申して、（ト立ちかゝるを）、

早瀨　えゝ控へいと申せば、控へをらぬか。

與之　はつ。（ト平伏する）。

早瀨　かゝる證據のある上は、いかにも密通に相違ない。

與之　え、（ト思入、早瀨二幕目の位牌を手箱の中より出して）、

早瀨　こりや、これを見よ。

お高　え、どうしてそれを、（トびつくりする）。

早瀬　そちが留守を幸ひに取寄せおきし此の位牌、淨擧法林信士、貞擧法染信女、逆朱を入れしはそちが了名であらうな。

お高　御意にござりまする。

早瀬　夫婦は二世とこの如く、未來までも一つにをる心で位牌へ記せし法名、然るにこれなる與之助と密通なせし上からは、そちが夫法林信士が面へ泥を塗りし其方、今我が見る前で今一度未來の夫法林信士が面へ泥を塗りて見せよ。

お高　そりや又どうして、

早瀬　位牌に記せし法林信士を、土足にかけて穢し見せい。

お高　さあ、それは、（ト早瀬位牌をお高に渡して）、

早瀬　さなればまことの密通故、そちを刑に行つてこの與之助は助けくれる。さあ、土足にかけるか。

お高　さあ、

早瀬　但しはかけぬか、

お高　さあ、

早瀬　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

早瀬　返答致せ、どゞどうぢや。（トきつといふ、お高術なき思入にて）、

お高　はつ、恐入りましてござりまする。

早瀬　恐れ入つたとはどうだ。

お高　唯今まで申上げしは、皆偽りでござりまする。

早瀬　何故あつてその方は、斯まで偽り申せしぞ。

お高　何をお隱し申しませう、それにをります與之助事は、親孝心のものにして私宅へも常から出入り、このほど塀を乘越え忍び入りて捕へられ、その身の言譯詳しく聞けば、稲毛の屋敷の辻足輕親與惣兵衛が盗賊の疑ひあつて獄屋の住ひ、六十越せし老の身に命のほども危ふしとて、金子を盗みてその親の命を助けんばつかりに、盗みに入りしあの與之助、まだ年さへも十五には生先長い者行者、盗人なりと言ひ立なば、もしや命に障らうかと、それ故此身の浮名も厭はず密夫と言うて助けうとお上までも偽りしが、夫の位牌を土足にかけよと彌十郎様の一言に、口には密通なせしと言へど、心で詫びゐ法林信士どうまあ土足にかけられませう、是非なく事實を申上げます。たゞ此上のお願ひは忍び入りしと申せども、いまだ金子も取り得ませねば、何卒與之助が命をば

お助けなれて下さりますやう、お慈悲をお願ひ申し上げまする。

早瀬　ほゝお、あつぱれなる後家が實心、斯くあらんと察せし故その方が僞りを白狀させしは我情、假令前髪の者にもせよ、密夫とあれば科は同罪、一人助くることはかなはぬ。まつた盗人なりと言へど、未だ金子を盗まぬ上親を助けん彼が孝心、殊には緣なきその方が浮名を厭はず庇ふ實心、かれに愛でこれに愛で、盗賊なれど與之助が一命は助けくれるぞ。

お高　すりや、お助け下さりますとか。

與之　有難うござりまする。

早瀬　それ、與之助が縄目をゆるせ。

番卒　はつ。(ト與之助が縄を解く)。

佐次　やれ〳〵これで私も安堵、どうなる事と思つたに、彌十郎樣のお裁きにて双方ともに事なく濟み、こんな目出度いことはない。言はずと歸りはどこかで一ぱい、辨當代も四五度ぶり、こゝらが宿老の利得だて。

番卒　えゝ、かしましい默りをらう。

佐次　へゝつ。

與之　(お高に向ひ)、もし後家御樣、お情厚きお志し、何とお禮を申さうやら、有難うござります。

お高　私もそなたの命が助かり、このやうな嬉しいことはない。

與之　その悦びに引替へて、親父さまには獄屋の住ひ、

お高　こちらも同じ甥御の新助、緣につながるお元が牢舍、

與之　彌十郎樣のお情にあまへましてのお願ひは、私が親與惣兵衛、

お高　又私が甥の新助、一目なりともお慈悲にて、

與之　お逢はせなされて下さりませ。

早瀬　苦しうない、許し遣はす。とつくりと對面しやれ。

二人　有難うござりまする。

番卒　それ、双方ともに立ちませい。

二人　はあゝ。(ト足輕、家主附添ひ上下へ別れて入る。與より石垣伴作出來りて)、

石垣　彌十郎殿、今朝よりお一人にて御詮議、御苦勞に存じまする。

早瀬　これは〳〵伴作殿、さゝこれへ〳〵。

石垣　御免下され。御主君のお問合せで大きに遲刻仕つた。して貴殿のおかゝり雪の下若菜屋一件如

何相なりましたな。

早瀬　面目今篤と詮議いたせしところ、後家が實心與之助が孝心、あつぱれなること故、双方とも許し遣はしてござる。

石垣　左樣でござつたか。貴殿拙者兩人の掛りたる稲毛家盗賊の一件、一詮議仕らうではござらぬか。

早瀬　如何にも、面白吟味を遂げねばならぬ。

石垣　こりや〳〵、一件の者共をこれへ呼出せ。

番卒　はつ。（ト下方へ捌れて）、

丹平　稲毛家辻番人與惣兵衛、

雲平　雪の下刀屋新助、藝者元、双方ともに、

兩人　これへ出ませい。

ト上下にてはあゝと返事あつて、上手より與惣兵衛縄にかゝりて足軽附き、下手より新助、お元同じく縄にかゝり足軽附きて出來る、

足軽　下にゐらう。（トこれにて双方よろしく住ふ。早瀬與惣兵衛に向ひて）、

早瀬　こりや、辻番人與惣兵衛、稲毛の塀を乗越え、御納戸金百兩盗み取りし盗賊は、其方が手引きなせしとのこと、しかと左樣か、

與惣　昨日も申上げます通り、斯く老衰に及びし者を御扶助下さるお主樣、何しに手引いたしませうぞ、御推量下さりませ。

早瀬　むゝそりや、さうありさうなことぢや。して新助、その方は金子百兩騙り取られ、言譯なさにお元もろ共身を投げ死なんとせし所を、さる者に助けられ極印金とも知らず百兩貰ひしとのこと、してその者は何處の者ぢや。

新助　はつ、金子を失ひ死なうとまで存ぜしほどの事故に、心も心なりませず、何處の人とも存ぜず、助けられたるその上に失ふ金子を貰うたるその嬉しさに、そのまゝに別れましてござりまする。

お元　その夜のことは何事も後や前にて後悔のみ、そのお人の名所を承はらぬは不調法、お許しなされて下さりませ。

早瀬　いかさま、それもさうありさうなことぢや。

石垣　あ、いや〳〵彌十郎殿、そりやあまり忽緒なる御詮議、ちとお控へなされい。こりや新助、二朱か一分の金ならば住所知れざる者にもせよ、貰ふまいものでもないが、小金ならぬ大枚百兩、住所名前も知らざる者より貰ひしといふは不審の第一、必定汝等金子に困り、稲毛の屋敷へ忍び入

り、盗み取つたに相違あるまい。

新助　いえ〳〵、まつたく貰ひ受けましたに相違ございませぬ。盗みをいたす心なら何しに死なうといたしませう、こゝの所を思召され、盗賊とのお疑ひお晴らしなされて下さりませ。

石垣　いや〳〵盗みをなしたに相違ない、聞けばこれなる藝者元を、三浦の藩中何某が執心なすを遺恨に思ひ、身受なすとの噂を聞けば、必定刀の代金は身受の方へ振り向けて、盗みをなしてその穴をうめる所存であらうがな。

新助　いえ〳〵何とおつしやりましても、そのやうな覺えはございませぬ。

お元　身受などゝのお疑ひがございますなら、親方へお問合せ下さりませ。

石垣　だまらう、此奴が。じたい汝が何某を忌み嫌うて、そのやうな貧乏野郎に從ふ故、貧の盗みにお上へまで御苦勞をかくるのだ。何故何某に從はぬのだ、心を改めきつと從へ、痴け者めが。

早瀬　あいや伴作殿、貴殿何を御意なされる。

石垣　はて知れたこと、盗賊の詮議仕る。

早瀬　盗賊の御詮議なら、藝者の元が何某の心に從ふの從はぬのとは、要らぬ御詮索かと存じます。

石垣　いや〳〵その道の元からして、詮議せねば相ならぬ。

早瀬　その元からの御詮議なら、これなる新助が騙られし金の出所は、三浦の家中平岡權内殿、貴殿の御舍弟より出たる金子、元をたゞさばそれからそれ、枝葉が擴がり、思はぬ人に難儀がかゝらうも知ぬぞよ。

石垣　やあ、

早瀬　よい加減に御詮議なさい。

石垣　然らば、それはそれにして、新助めを拷問なし、盗賊の白狀させん。それ、新助めを拷問なせ。

兩人　畏まつてござりまする。（ト左右より割竹を持ちて立ちかゝる）。

丹平　稻毛の屋敷へ忍び入り、

雲平　お納戸金を盗みしと、

兩人　ありていに申上げい。

新助　假令どのやうにおつしやりましても、覺えないことは申上げられませぬ。

丹平　言はぬとて、その分に致しおかうか。

雲平　拷問なして言はせるぞ。

新助　どのやうな貴苦に逢ひましても、致しやうがございませぬ。

石垣　しぶとい奴だ、それ打ちするゑい、

兩人　はつ。さあ申上げい〳〵（ト割竹にて新助を打つ）。

お元　あもし、どうぞ私をお打ちなされて、新助さんをお助けなすつて下さりませ。

石垣　あゝいゝ覺悟だ、兩人共打ちするゑい。

兩人　はつ、申上げい〳〵。

ト新助、お元の兩人を打つ、兩人とも打たれながら互に庇ふ思入、與物兵衛これを見て、いとしいといふ思入あつて、

與惣　あゝこれ、知らぬと言はつしやるに、そのやうになされずとも、

石垣　えゝ要らぬ口出し控へをらう、今に汝もこのやうに拷問なすぞ覺悟なせ。

與惣　はつ（ト控へる）。

石垣　それ、打つて打つて打ちするゑい。

兩人　はつ。申上げい〳〵。（ト手酷く打つ、兩人苦しき思入あつて）、

新助　えゝ、さりとてはお情ない、この身に覺えもないことを、どう有體に申されませう。

お元　打たでかなはぬことならば、私を打つて新助さんを、お助けなされて下さりませ。

新助　いえ〳〵私故にこの憂き目、お元を助けて私をお打ちなされて下さりませ。

お元　いえ〳〵私を、

新助　いや、私を、

石垣　えゝ、舌たるい庇ひ立、望みの通り打て〳〵〳〵（ト急いて言ふ）。

兩人　はつ。

早瀨　あいや〳〵伴作殿、彼等もよほど疲れし樣子、暫時御猶豫して遣はされい。

石垣　いや〳〵猶豫いたさずもう一詮議、これも上への御奉公。

早瀨　ではござらうが、

石垣　伴作忠義を勵み申す、必ずお構ひ下さるな。

早瀨　はて、是非に及ばぬ。

石垣　いや汝等では手ぬるい〳〵。どれ、身共が直に拷問なさん（ト下へおり割竹を取つて）さあ、きり〳〵と吐かしてしまへ（ト新助、お元を打ち）、さあ吐かさぬか、吐かさぬか。吐かさぬと言はさずにおかうか、こう〳〵〳〵（ト兩人を續け打に打つ、兩人片息になりて）、

新助　いかなる因果でこのやうな身に覺えない嫌ひ受け、かゝる憂き目に遭ふことぞ。

お元　これを思へばあの折に、いつそ死んだらよかつたに、

新助　なまじ生らへ失うた金を貰うたばつかりに、

お元　疑ひ受けてこの苦しみ、

新助　とてものことに命をば、

兩人　おとりなされて下さりませ。

石垣　おゝ命を取つてやらうから、盜みをせしと白狀なせ。

兩人　それぢやといふて、

石垣　きり〳〵と吐かしをらう。

ト兩人を打ちすゑる、これにて新助、お元顏を見合せ、盜賊となつて死なうといふ思入。

新助　はい、盜賊は、

兩人　私どもでござりまする。

石垣　むゝ、よく白狀なした。

新助　その替りには二人とも、

お元　早う殺して、

兩人　下さりませ。

石垣　彌十郎殿お聞きなされたか、白狀いたしました。

早瀨　それはお手柄なことでござつた。

トこの中與惣兵衞始終氣を揉む思入、結局堪へ兼ねし思入にて、

與惣　あもし〳〵、その盜賊はそのお方ではござりませぬ。

石垣　なんと、

與惣　その二人の衆はその夜金を貰うたお人、盜んだ人はほかにござりまする。

早瀨　なに、外にあると申すか。

與惣　あまり今の拷問が强さに、大方盜人と白狀なされたでござりませうが、この親仁が證人、その盜人ではござりませぬ。

早瀨　いかさま、さうありさうな事ぢや、すりや伴作殿再吟味をなされずばなりますまい。

石垣　むゝ、再吟味より、こりや老耄、外に盜賊あることをどうしてそれを存じをる。

與惣　へい、見てをりましてござりまする。

石垣　見てをつたとあるからは、汝盜賊の同類だな。

與惣　いえ、まつたく以て、

石垣　何故また同類でないならば、見のがして取り逃した。

與惣　さあ、それは、

石垣　同類なるか。

與惣　さあ、

石垣　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

石垣　それ、拷問なせ。

足輕　はつ。さあ、申上げい〳〵（ト丹平雲平の二人與惣兵衛を打つ）。

與惣　どうぞお許しなされて下さりませ。

足輕　許してやるから白狀なせ（ト散々に打ちすゑる、與惣兵衛堪へ難き思入にて）、

與惣　あ申上げます〳〵、所詮拷問では助からぬ我命（ト覺悟せし思入にて）、何をお隱し申しませう、その盜賊は私めでござりまする。

石垣　すりや、おのれが盜みしとか。

新助　あもし、その夜の盜人はそのお人ではござりませぬ。

石垣　またそん事を言ふか。

お元　お金をお貰ひ申せしは、外のお人でござりまする。

石垣　え〻汝等は不分明なことばかり、それ、双方とも今一應抉ぢ上げて拷問なせ。

皆々　畏まつてござりまする。

ト花道揚幕の中にて、稻葉幸藏の聲にて、

幸藏　あいや、その御詮議、暫くお待ち下さりませう。

石垣　なんと、

ト花道より幸藏出來り、花道よき所へ控へる、與惣兵衛、新助、お元等見て、

新助　や、思ひがけない、

お元　お前はその夜の、

與惣　盜人どの。

石垣　扨は彼めが盜賊とな、それ、取逃すな。

皆々　心得ました。

幸藏　いやお騒ぎあるなお役人、我と名乗つて出でたる盗人、逃げも隠れも仕らぬ、お下にござつて下さりませ。

石垣　むゝ（ト控へる）。

早瀬　して、その方は何と申す者ぢや。

幸藏　はつ、私こそは稲葉幸藏と申す盗賊にござりまする。

石垣　扨は汝が稲葉よな、それ、縄打て、

早瀬　あいや伴作殿、お控へなされい、唯今彼が申す如く、自身に名乗り出たる上は、篤と仔細を訊せし上、縄打つともおそかるまじ。

石垣　でも、焼鳥にへを、とりにがしては、

早瀬　はて、氣を苛だてずとお控へなされい。

石垣　むゝ（ト控へる）。

早瀬　いざ、幸藏にはこれへ、

幸藏　眞平御免下さりませう。（ト本舞臺へ來り、中央へ住ふ）。

早瀬　して、その方が名乗り出でしは、

幸藏　我故これなる人々が、無實の疑ひ受けしと聞き、助けん爲めに此の身の罪科申上げたるその上にて、御成敗を受けんと存じ、名乗り出ましてござりまする。

早瀬　むゝ、すりやその方が稲毛の屋敷へ、忍び入りし盗賊とな。

幸藏　御納戸金を盗みし次第、恐れながら一通りお聞き濟み下さりませう。先づ事件の起りと申しまするは、これなる刀屋新助殿が、鶴ケ岡にて三浦家より預りし金子百兩騙り取られし故の事、この金子を騙り取りしは、即ち私が養母お熊婆あと申す者。その金故に言譯なく新助殿にはお元どのと身を投げ死なんとせしところへ、參り合せて樣子を聞けば、金故命を捨てるとある故、見るに忍びず後なる稲毛の屋敷へ忍び入り、百兩盗んで二人が命助けしが仇となつて、極印金に疑ひかゝり二人ともに此の縄目。その折これなる與惣兵衛殿、辻固めの身をもつて取逃しては役目の落度なれども、此のほど疝癪にて行歩自由にならざれば、取押へること思ひもよらず、とあつて逃がさば役目の落度、一棒汝に當てる間我を殺して立退けと、義を立通す老の賴み、この老人の縄にかゝり手柄にさせんと存ぜしかど、前申す養母ある故その場を逃げしばつかりに、與惣兵衛殿も牢舍の憂き目、まだそれのみか若葉屋の後家、老人の伜、新助殿の親父、お元どのの母弟、多くの人へ難儀をかけしもその原は皆我がなす業、二十五歳の曉も昨日と過ぎて夢も覺め、最早

命の盡きる期と覺悟を死出の旅仕度、身にお仕着を纏ふとも。せめてお上の成敗受け、この身の罪を滅す所存、かゝる樣子を老母が聞き、先非を悔いてこれも又命を捨てゝの身の言譯、即ち證據はこの書置、騙りし金の百兩もろともお上へこれを差上げますれば、その元々へお返し下され、この幸藏に繩をかけ、無實の罪の人々をお助けなされて下さるやう、偏にお願ひ申上げまする。

ト幸藏思入にて言ひ、書置と金を出す、足輕早瀨の前へ持行く、早瀨感心の思入にて、

早瀨　ほゝお、惡に强きは善にも强しと、改心なして人々の難儀を助けんその爲めに、我と我身の罪を訴へ自身の白狀、神妙々々、彌太郎感心のいたす。

幸藏　はゝはつ。（ト辭儀をなす）。

早瀨　これにて始中終明白に分かりたり、それ三人の者の繩目を許せ。

足輕　はつ（ト與惣兵衛、新助、お元等の繩を解く）。

石垣　此上は、幸藏がこれまで積る惡事の段々、拷問なして白狀さそう。

早瀨　あいや、幸藏詮議は拙者が致す、貴殿は此場のあらましを、御前へ御披露下されい。

石垣　委細承知仕つつた。

早瀨　こりや、その方どもも休息いだせ。

足輕　はつ。

石垣　然らば拙者は奥殿へ、

早瀨　御苦勞ながら、

石垣　彌十郎殿、

早瀨　伴作殿、

石垣　後刻、

ト時の太鼓になり、石垣伴作は奥へ、足輕は上下へ別れて入る、早瀨上下へ向つて、

早瀨　それ、身寄り者は、これへ出ませい。

ト上下にて『はあゝ』と三人の返事して、上手より與之助、下手より若菜屋のお高、蜆賣りの三吉出來り控へる。

それにて樣子は聞いたであらうが、金を盜みし幸藏が我と我身の白狀に、事明白に分りし故、新助が騙られし金子は新助へ相渡す、極印金の百兩は此方より稻毛家へ使者を以て相渡さん、與惣兵衛は伜與之助、新助は伯母高、お元は弟三吉三人の者へ引渡す間、勝手次第に連歸れ。

三人　は、はゝ難うござりまする。

ト お高等三人辭儀をする。早瀨金を新助に渡し、お熊婆あが書置を開き讀みゐる、與之助は與惣兵衛に、お高は新助に、三吉はお元にすがりて、

與之　もし、父さま、

與惣　あゝ、伜よ。

お高　新助、

新助　伯母者人、

三吉　姉さん、

お元　弟、

お高　所詮この世で逢はれまいと、

與之　思ひのほかにこの御赦免、

三吉　こんな嬉しいことはない、

與惣　こりやまあ、夢では、

皆々　ないかいの（ト手を取交し思入、此中幸藏ぢつと俯向き思入あつて）、

幸藏　よしなきことにて此方衆へ難儀をかけし稲葉幸藏、その罪故にこの身をば刀の鏑となすが言譯、

これにてどうぞ許して下され。（ト双方へ思入）。

新助　偖令憂き目に逢へばとて、あの折命を助けられずば、

お元　浮世を短う暮す二人、

與惣　我も無慈悲に殺されなば、再び伜に逢はれぬ身體。

お高　今このやうに血筋の者が、

與之　名乘り合ふのもお前のお蔭、

三吉　何で恨みに思ひませう。

新助　言ひ置くことでもございますなら、

與惣　せめてもの恩返し、

お高　何なりとも遠慮なく、

與之　どうぞ言うて下さりませ。

幸藏　（思入あつて）、此期に及び何一つ言ひ置くことはなけれども、此の世の別れ與惣兵衛殿へ、進ぜたいのは我が守袋（ト懐中より取出して與惣兵衛に渡す、與惣兵衛見てびつくりなし）、

與惣　やゝ、こりやこれ覺えの劍先布、この守り袋を所持なすからは、

與之　そんなら常々噂に聞いた、別れ程經し私が兄さん（ト言ひかけるを制へて）、

幸藏　あゝこれ（ト言っては憑いといふ動作）、又若菜屋の後家御へは、秘府の守袋をお讓り申す。

お高　（取って見て）やゝ、こりや娘が自筆の起證文、そんならそなたが、

新助　お松どのと言交せし、

幸藏　あ、これ（ト制へ、上を見る。此時早瀨扇を頰杖に居眠りをしてゐる）。

與惣　扨こそその時年格恰似寄りに若しやと思ひしが、これを所持なす上からは、二十何年その以前水子で別れし我子の次郎吉、

與之　常に話にこの年月、明暮逢ひたう思うたる兄さんでござりましたか。

ト與惣兵衛、與之助幸藏の側へ寄る、幸藏思入あって、

幸藏　いゝやそれは盗んだ品、私は何でもなけれども、その持主は誰にもせよ、定めて生の御恩も送らず、親に先立つ不孝者、逢はぬ往昔は知らぬこと、見れば名殘りがをしまれて、不孝な兄になり替り、親へ孝行頼むは弟、とさあ、この持主が言ふであらう。

與之　そのお頼みがないとても、たった一人の親ぢやもの、大切にせいで何としませう。

幸藏　必ずともに頼むぞよ。

お高　噂は聞けどついぞこれまで、逢はねば顔は知らねども、此品持ってゐるからは、五年以前鎌倉を連れ退きなせし娘が聟。

新助　次郎吉殿と言はれしは、世にも稲葉と名の高き幸藏殿であったるか。

幸藏　いゝや、それも守り袋と一つに盗みし女の起證、その娘御も男故苦勞苦患の惡足も、名乘つて出れば命の年明け、勘當許して下されと起證の男が親への頼み、

新助　おゝ、そりや伯母御とて血を分けし現在娘のことぢやもの、何の憎いことがあらう、勘當なすは世間の手前、

お元　ぬしはもとより私もとも〳〵、お詫申して御勘當お許しあるやうお願ひ申しませうわいな。

幸藏　それにて私も一つの安堵、

三吉　さあ姉さん、母さんが待つてゞあらう、少しも早く歸りませう。

お元　あ、これ、忙しない。

幸藏　いや、その身の疑ひ晴れたる上は、善は急げ少しも早く、

與惣　あ、思ひまはせば不思議にも、血筋の緣にしがらみて、

お高　こゝに連なる人々は、

與惣 私とは親子、

與之 この身は兄弟、

お高 名乗れば姑、

新助 從兄弟同志、

三吉 おいら二人も、

お元 つながる御縁。

幸藏 それもこの身の臍緒と起證を返す上からは、縁はこれまでゝ、あかの他人、私に構はず少しも早う、

六人 とは言へ、見捨てゝ、

幸藏 はて、歎きをかけぬが、この身の言譯、

六人 それぢやと言うて、

幸藏 上への恐れ、言葉は御無用、

六人 はあゝ。（ト泣き伏す。此時早瀨目の覺めし思入にて）、

早瀨 あゝ春眠曉を覺えずと、詩に聯ねし如く、春の眠氣にとろ〳〵と一睡催し、その方どもが何を言うたか、とんと身共は覺えぬわい。

六人 ても、お慈悲深い、

早瀨 あこれ、暫くも言ふ慈悲は上、落着なせば長居は無用、双方ともに立ちませい。

六人 はつ。（ト此時足輕二人出て）、

二人 きり〳〵と立ちませい。

六人 はあゝ。

ト三重になり、花道へお高、新助、お元、三吉行き、東の仮花道へ與惣兵衛、與之助行きかけ振返り、幸藏と顏見合せ、双方愁ひの思入。

六人 これがこの世の、

幸藏 顏の見納め。（ト双方ぢつと顏見合せ）、

六人 はあゝ（ト泣き落す）。

足輕 えゝ、きり〳〵と立ちませい。（トこれにて双方泣き〳〵入る）。

早瀨 あ、盜賊なせど仁義を守り、一命捨てゝのそちが訴へ、かほどの器量ある者を成敗なすは殘念ながら、助けおかれぬそちが形狀、何とて盜賊なしたるぞ。思へばをしき事ぢやなあ。

幸藏 はつ、有難きそのお言葉、斯くお情厚き其許樣のお手にかゝるは此の身の仕合せ、元より覺悟の

ことなれば、御法通りの御成敗仰せつけられ下さりませう。

早瀬　いかにも助けおかねば、この世にあるも最早僅、情を以て縄目に及ばず、いたはつて遣はすほどに、心静かに覺悟しやれ。

幸藏　はゝ、有難うござりまする。（ト奥より石垣伴作つか〳〵と出來りて）、

石垣　あいや、その儀は罷りならぬ。

早瀬　伴作殿、ならぬとはいかゞでござる。

石垣　されば、かゝる大罪人に縄かけぬは、下世話に申す油斷大敵、逐電なせしその後で後悔なしても後の祭り、手枷足枷菱縄に、きつと窮命させねばならぬ。

早瀬　御尤もなる仰せながら、そりや非義非道を働く盗人、仁義を守る盗人が何とて逐電いたさうや。既に唐土周の文王罪ある者に縄をもかけず、獄屋にあらぬ廣庭へ龜圖を畫いて放ちおきしに、罪人文王の情を感じ誰一人その龜圖を破つて逃げしものなきとや。唐土人すら斯の通り、心なき者なら知らず、仁義を守る稲葉幸藏、それ故縄はかけ申さぬ。

石垣　いゝやそれは大きな油斷、知つた自慢の唐土詮索、そりや氣の長い唐人だから逃げもせず、まじまじと龜圖の中にゐたらうが、日本人はさうは行かぬ、是非とも縄をかけにやおかぬ。

早瀬　すりや、どうあつても其許には、

石垣　貴殿ばかりか拙者も相役、取逃がさぬやう幸藏に、是非とも縄をかけねばならぬ。

早瀬　然らば稲葉幸藏は、貴殿へ確とお渡し申すぞ。

石垣　おゝ受取るからは逃がさぬやう、それ幸藏に縄打て、

足輕　はつ、腕廻せ。

幸藏　いざ、御存分に。（ト足輕二人縄をかける。石垣見て）、

石垣　いや、斯うしておけば大丈夫、身共が確と預るほどに、早瀬氏には奥へござつて、御休息致されい。

早瀬　然らば暫時休息いたさん。

石垣　お役目御苦勞。

早瀬　あゝ、あたら若者、

石垣　えゝ、

早瀬　後刻御意得ませう。

ト唄になり早瀬幸藏へ思入あつて奥へ入る、石垣思入あつて平舞臺へ下り、